

熊本県文化財調査報告 第94集

熊本県大津町

# 八 窪 遺 跡

—地域振興整備公団の土地造成の伴う文化財調査—

1987

熊本県教育委員会

熊本県大津町

はち くぼ  
八 窪 遺 跡

—地域振興整備公団の土地造成の伴う文化財調査—

1987

熊本県教育委員会

## 序 文

この報告書は、熊本県菊池郡大津町大字高尾野字八窪所在の八窪遺跡の発掘調査報告です。

この遺跡のある高尾野地内に「熊本中核工業団地」が造成されることになり、施工に先立ち県教育委員会は、埋蔵文化財の発掘調査を実施しました。八窪遺跡の現地調査は、昭和62年2月から同年7月におよびました。調査を実施するにあたり、地域振興整備公団熊本開発所・県企業誘致対策室及び町企画室、地元高尾野集落の皆様のご理解とご協力により無事に調査を完了することが出来ました。これらのご協力に対して心から感謝いたします。

ここに報告書を出すにあたり、県民皆様の埋蔵文化財についての理解と、専門家の皆様の研究の一助になれば幸いです。

昭和62年12月25日

熊本県教育長 田 嶋 喜 一

## 例 言

1. 本報告書は、大津町八窪遺跡調査の報告書である。
2. 報告書作成にあたり、遺物の実測は緒方勉がした。遺構・遺物の図のトレースには主として佐藤淳子があたり、一部を木下俊恵が行った。
3. 本文執筆及び編集は緒方がした。
4. 本報告書に取り扱った測量図・遺構図等の北の方位は、磁北を示している。
5. 報告書作成にあたり、遺物の整理は吉本清子、米倉五月が、またレイアウトにあたり、木下が協力した。

## 本文目次

第一章 調査に至るまで .....	1
第二章 八窪遺跡の位置と環境 .....	4
第三章 八窪遺跡の調査 .....	6
第1節 調査の経過 .....	6
第2節 調査の方法 .....	11
第3節 八窪遺跡の土層層序と遺物出土層位 .....	13
第4節 遺物出土状態と検出遺構・その他 .....	19
第四章 発掘資料の整理 .....	27
第1節 整理の方針と整理作業の経過 .....	27
第2節 八窪遺跡出土遺物 .....	28
第五章 調査の成果と課題 .....	82
第1節 遺物包含層と遺物 .....	82
第2節 八窪遺跡における遺物の分布 .....	84
第3節 調査のまとめ .....	86

## 挿図目次

第1図 熊本県大津町八窪遺跡位置図 .....	3
第2図 熊本県大津町八窪遺跡周辺図 .....	5
第3図 八窪遺跡調査区割 .....	12
第4図 八窪遺跡土層層序 .....	14
第5図 八窪遺跡表土はぎ後の土層の状態(西) .....	16
第6図 八窪遺跡表土はぎ後の土層の状態(東) .....	17~18
第7図 八窪遺跡G-5区焼土周辺遺物出土状況 .....	20
第8図 八窪遺跡石皿出土状況(B-5区) .....	21
第9図 八窪遺跡発見の竪穴(H-6区) .....	22
第10図 八窪・猿田彦太神周辺地形図 .....	25
第11図 八窪・猿田彦太神実測図 .....	26

第12圖	八窪遺跡出土土器 1	36
第13圖	八窪遺跡出土土器 2	37
第14圖	八窪遺跡出土土器 3	38
第15圖	八窪遺跡出土土器 4	39
第16圖	八窪遺跡出土土器 5	40
第17圖	八窪遺跡出土土器 6	41
第18圖	八窪遺跡出土土器 7	42
第19圖	八窪遺跡出土土器 8	43
第20圖	八窪遺跡出土土器 9	44
第21圖	八窪遺跡出土土器 10	45
第22圖	八窪遺跡出土土器 11	46
第23圖	八窪遺跡出土土器 12	47
第24圖	八窪遺跡出土土器 13	48
第25圖	八窪遺跡出土土器 14	49
第26圖	八窪遺跡出土土器 15	50
第27圖	八窪遺跡出土土器 16	51
第28圖	八窪遺跡出土土器 17	52
第29圖	八窪遺跡出土土器 18	53
第30圖	八窪遺跡出土土器 19	54
第31圖	八窪遺跡出土土器 20	55
第32圖	八窪遺跡出土土器 21	56
第33圖	八窪遺跡出土土器 22	57
第34圖	八窪遺跡出土土器 23	58
第35圖	八窪遺跡出土土器 24	59
第36圖	八窪遺跡出土土器 1	60
第37圖	八窪遺跡出土土器 2	61
第38圖	八窪遺跡出土土器 3	62
第39圖	八窪遺跡出土土器 4	63
第40圖	八窪遺跡出土土器 5	64
第41圖	八窪遺跡出土土器 6	65
第42圖	八窪遺跡出土土器 7	66
第43圖	八窪遺跡出土土器 8	67
第44圖	八窪遺跡出土土器 9	68
第45圖	八窪遺跡出土土器 10	69

第46図	八窪遺跡出土石器11	70
第47図	八窪遺跡出土石器(弥生) 25	70
第48図	接合破片の分布(土器) 1	89
第49図	接合破片の分布(土器) 2	90
第50図	接合破片の分布(土器) 3	91
第51図	接合破片の分布(土器) 4	93~94
第52図	接合破片の分布(石皿) 5	95

## 付 図 目 次

付図 1	八窪遺跡縄文時代遺物出土状態 1
付図 2	八窪遺跡縄文時代遺物出土状態 2

## 表 目 次

表 1	八窪遺跡出土縄文土器	71~78
表 2	八窪遺跡出土石器	79~81

## 図 版 目 次

図版 1	表土はぎと石皿等発見状況	99
図版 2	八窪遺跡の土層	100
図版 3	遺物出土状況 1	101
図版 4	遺物出土状況 2	102
図版 5	遺物出土状況 3	103
図版 6	八窪遺跡発見の竪穴	104
図版 7	八窪遺跡調査終了時の試掘溝による確認作業	105
図版 8	八窪所在の猿田彦太神	106
図版 9	八窪遺跡出土石器(上・1~5、下・6~13)	107
図版10	八窪遺跡出土石器(上・14~28、下29~35)	108
図版11	八窪遺跡出土石器(上・36~45、下46~59)	109
図版12	八窪遺跡出土石器(上・60~63、下64~69)	110
図版13	八窪遺跡出土石器(上・70~77、下78~87)	111
図版14	八窪遺跡出土石器(上・下)	112
図版15	八窪遺跡出土石器(上・下)	113
図版16	八窪遺跡出土石器・他(上・下)	114

## 調査の組織

調査主体	熊本県教育委員会
調査責任者	丸木 保賢（文化課長） 林田 敏嗣（文化課長補佐） 隈 昭志（文化課長補佐・文化財調査係長事務取扱）
調査事務	松崎 厚生（文化課主幹） 桑原 憲彰（文化課参事） 谷 喜美子（文化課主任主事）
発掘調査	
調査主任	緒方 勉（文化課囑託） 勝又 俊一（文化課文化財主事） 藤崎 伸子（文化課囑託） 安達 武敏
地元協力者	城野 文子・佐藤よしの・府内せつ子・府内のり子 城下とし子・矢野ヤスヨ・日田ヤチヨ・古庄 二重 家入ミサオ
整理作業	木下 俊恵（臨時職員） 米倉 五月・吉本 清子・佐藤 淳子

# 大津町八窪遺跡調査報告

## 第一章 調査に至るまで（踏査と試掘）

昭和60年7月、熊本県菊池郡大津町高尾野地区に地域公園が中核企業団地を造成する計画があることを県企業誘致対策室より連絡があった。そこで県文化課はこれをうけて、昭和60年8月5日隈昭志、木崎康弘が当該地区の踏査を実施した。その報告によると第2図の4地区から遺物が採集され、それぞれが高尾野遺跡群の一部であるとの報告がなされた。文化課では現地踏査の報告をもとに、4地点を試掘しその結果に基づき今後の対策を講ずることになる。

昭和61年7月10日～7月14日、踏査報告による4地点を緒方勉が試掘した。試掘にはバックフオーを用い、各地域に数条の試掘溝（トレンチ）を掘り、各溝の土層断面を観察し、遺物の包含状態、さらに遺構の有無を検討することにより地区の遺跡の情報を把握することにした。以下、各地区のトレンチの概要を述べる。

第一地区は今回の土地造成計画地のほぼ中央部に位置する。踏査時、遺物が採集された最も東の地区である。地番のうえから大字高尾野578と579番地の100×80米位の接続する畑地で、北と南は山林に囲まれている。また578番地は地目のうえから畑地であるが、実質的に山林と化している。

試掘は「口」の字形にトレンチを設定、幅60釐、深さ100釐、所により土層観察のため160釐の溝を掘った。ここに参考まで、土層の状況を深掘りしたトレンチの北西端付近の層序について説明すれば次のとおりである。

第1層表土、黒褐色の竹根や樹根の入り混じった腐食に富んだ火山灰土で、層厚約20釐。第2層は黒色火山灰土で、バサバサした手触りの土。層厚約30釐である。第3層はオレンジ色の火山灰土で層厚約16釐。第4層は黄褐色粘土質の締まった土で、層厚約22釐。第5層黒褐色土の締まった土で、層厚約55釐。第6層は粘質のブロック状の塊りのある土で、層厚約15釐。以下第7層がこれに続き、6層よりくろく、暗褐色の土である。

この地区では遺物が検出されず、土層断面から遺構の徴候は発見されなかったが、一般的状況から第2層が弥生・古墳時代の遺物包含層とみられ、第2層下位から第3層にかけて縄文後晩期等の遺物が、また第3層下位から第4層にかけて縄文早期の遺物包含層がみられる。

第2地区は第1地区の西約300米の地点で、間に小さな谷を隔てている。調査予定地の高尾野341番地には桑が、西側の346番地には栗が植栽されていた。そこで、トレンチは作条の間に設定した。まず、両畑の境界域に沿って南北30米を掘り、ついで、T字形に約20米を掘った。ト

レンチはおよそ1米前後の深さに掘り、第4層迄の土層断面を観察した。土層層序は第1試掘地点と違いは無く、南北トレンチの途中で1層耕土約20種、2層黒色土約18種、3層オレンジを帯びた黄褐色土約67種、4層黄褐色粘質土約38種あり、以下5層と続いている。

この地区では縄文晩期とみられる土器の小片2点が発見されたが、顕著な遺物は無く出土層位は不明瞭であった。

第3地区は第2地区の西約200米の地点で、北・東・西の三方を山林や、藪で囲まれている。ここには桑が植栽されている。トレンチは南北50米、T字形に東西30米に設定し、深さ約1米の4層迄確認した。

この地区の土層は前の地区と違いはなく、遺物が出土しなかったので改めて説明を省略する。

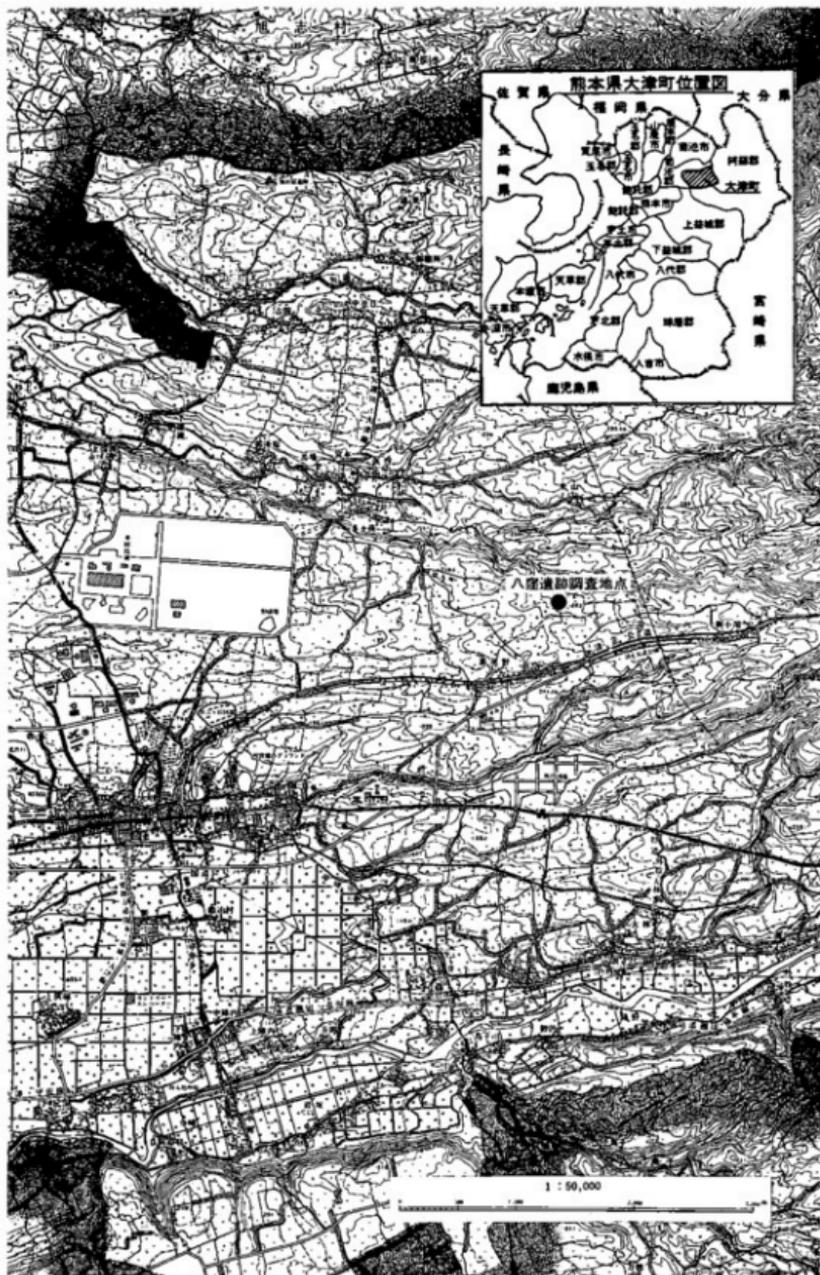
第4地区は第3地区の西約400米のところ、段落ちとなり西になるにつれ低くなっている。この地区は試掘をもとに、本調査実施に至る地区で詳細は以下の記述にゆずることにし、ここではあくまで概要にとどめたい。

第4地区は南北の農道を挟んだ両側の畑で、高尾野410及び431番地の50×80米位が対象である。トレンチは東側の410番地に南北2条（それぞれ50、30米）、中央部に東西1条（55米）に設定し試掘をした。西側の畑は縦横十文字にトレンチを設定し、南北18米、東西12米の調査のための溝を掘った。

各トレンチの土層観察の結果、410番地では、道路沿いに掘った西の南北トレンチの中央付近の2層（黒土）の下位から3層にかけて多量の土器が発見された。また東西トレンチでは、その西半から遺物が検出された。431番地では東半は2層と3層の一部が削りさらされ、そこに新たな客土があり遺構検出の可能性は乏しいと判断した。

以上の試掘結果をもとに、土地開発に対する今後の処置として、現時点では第1～3地区についてこれ以上の調査の必要はない。しかし、第4地区の410番地の西半及び431番地の西側については、この地域の開発に際し発掘調査が必要である。また、これとは別に、農道の北端の三叉路（451番地東北端）に江戸期の「猿田彦太神」がある。この石造物については、調査のうえ移転等の処置がのぞましい。

なお、文化財保護法の手続きは、昭和62年1月6日付け教育第623号で文化庁長官署で発掘通知書を提出し、昭和62年3月17日付け62委保記第2～747号で、文化庁文化財保護部記念物課長小林孝男から、通知書を受理した旨の通知があった。



第1図 熊本県大津町八塚遺跡位置図

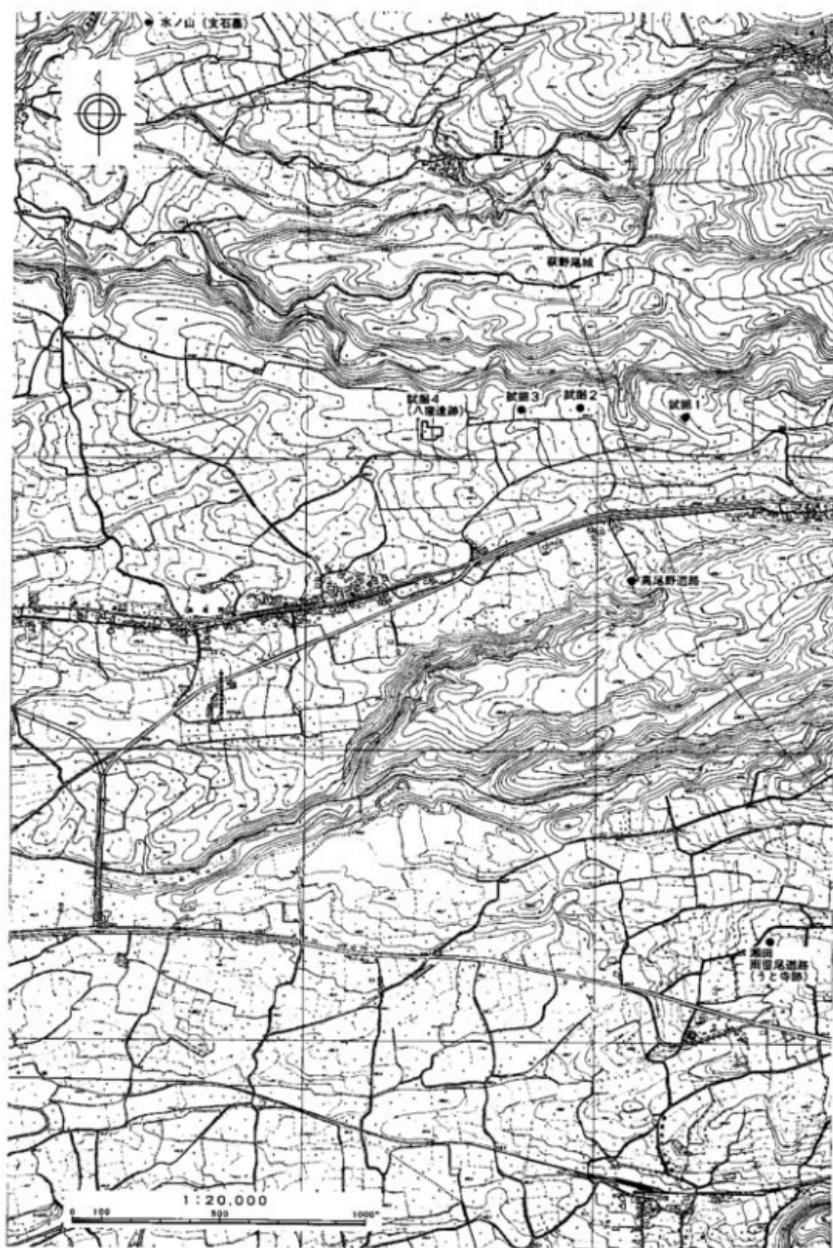
## 第二章 八窪遺跡の位置と環境（第1・2図）

八窪遺跡は行政区分のうえから、熊本県菊池郡大津町大字高尾野字八窪に所在し、今回の発掘調査地点は高尾野410及び431番地である。文化庁文化財保護部編纂『全国遺跡地図43』熊本県によれば「高尾野遺跡」は別の地点に登録されている。そこで、高尾野地内に発見された本遺跡を、小字名を冠し「八窪遺跡」とした。この遺跡を国土地理院発行の5万分の1図幅「菊池」にもとめれば、図北より13.9㎞、東より17.2㎞の交点あたりに相当する。

大津町は、熊本市の東およそ20㎞の距離にあつて阿蘇への道筋となつてゐる。古くは宿場町として栄え、江戸時代細川藩の参勤交代のルートになつてゐた。現在は都市の人口拡散、地元の企業誘致等により近代的都市へと生まれ変わらうとしてゐる。本遺跡へ行くには、熊本市より阿蘇方面に向け大津バイパスを抜けると「引水」の信号にさしかかる。そして400米先の、次の信号が阿蘇北外輪山に向かうミルクロードの起点になつてゐる。この三叉路を左折すると、道は上り坂になる。進むことおよそ2㎞にして、通称「清正公道」（せいしょうこうどう）に合流する。ここから人家脇の農道を北へ分け入り、迂回しながら700米程行くと今回の八窪遺跡発掘調査の現場に達する。

世界的規模の阿蘇山は周りを標高800米前後の外輪山が取り囲む。本遺跡のある北外輪山の西斜面は西に漸傾し、山腹には大小の谷を形成する。遺跡はその平坦面に占地してゐる。調査現場は標高約262米、すぐ北側には比高差150米の溪谷がある。この谷はいつもは枯れ川であるが、雨期には外輪山からの雨水を集め、轟々たる荒れ川の様相を呈する。参考までに記すれば、昭和初期には遺跡の近くに数戸の人家があつて、この谷の中程に横井戸を掘り、その水を飲み水として使用してゐた。

八窪遺跡の周辺の上代遺跡として、前記の高尾野遺跡がある。南東800米ばかりの地点にある弥生末期の遺跡である。縄文・弥生さらに寺跡とみられる瀬田・雨留尾遺跡は南南東800米の国道57号の北側にある。その他、支石墓として知られてゐる水ノ山は北西1700米の地点にある。



第2圖 熊本県大津町八座遺跡周辺図

## 第三章 八窪遺跡の調査

### 第1節 調査の経過（調査日記抄）

県文化課は現地での試掘調査の結果に基づき、県企業誘致対策室長宛に、昭和60年12月24日付け文書をもって「大津町字八窪遺跡410番について全面的な発掘調査が必要である」ことを通知した。その後、翌年9月24日付け文書によって当該地域の調査依頼がきた。当初、直ちに調査にはいる予定であったが、事業者側の都合により延々になり、1月に至り調査の準備にはいった。この間、調査事務処理の後、62年1月31日（土）になり現場小屋を建てた。

2月2日（月）曇り後雨・雪 本日より資材を搬入し引き続き調査にはいる予定であったが、しかし、午前中曇りの天気も午後には小雨模様となり、やがて雪に変わった。朝、進入してきた野道は忽ちぬかるみに化した。作業員の手助けをかり、車は2時間後かろうじて現場離脱に成功した。3日（火）、早朝より大津に向かう。大津引水交差点までは降雪も少なく、車の通行も可能であった。しかし、ミルクロードに入ったあたりから漸次雪の量が増え、清正公道付近では積雪数十種におよんだ。これ以上進入することは無理とみて、車にチェーン装着の上引き返した。

現地入りするや否や、積雪という思わぬ伏兵にあった。冬の調査と言うことで、当然このような障害は予想されていたが、この場に至って雪解けを待つしかない。

5日（木）快晴 現場の様子を把握するため現地へ出かける。ミルクロード脇に車を停め、野道を歩く。人通りがないので降雪はそのまま積もり、膝を没し、足をとられながら小屋に辿り着く。この様なことから、実際調査に入るのは来週に持ち越すことになる。

7日（土）快晴 進入路に横たわる雪折れ木の伐採をする。9日（晴）進入路の野道を補修、この仕事は断続的に16日まで続く。一方、10日（曇り後晴）から調査予定地の地形測量を始める。13日に至りバックフオーにて表土剥ぎに移るが、先ず、農道東側の410番の排土を西より東に順送りすることにす。

表土剥ぎは試掘の結果をもとに、およそ第2層（黒土）の下面を残す程度に上土を除去することにしたが、この種の作業についてオペレーターの不慣れもあって作業は順調には進まなかった。それでも、表土剥ぎは19日に一応終了した。この間、大津町企画課芹川係長、阿蘇観光KKの荒巻計人氏に便宜供与してもらった。

2月20日（金）曇り 表土剥ぎが終わったところで、10米方眼のグリッドを組む。グリッドはその一辺を南北方向にとり、東西方向を西からA・B・C・D……とし、南北方向を北から1・2・3……とした。また今後調査を予定している農道西の畑も同一グリッド内におさめるため、

西北端がA-1となるようにした。従って、農道脇のラインがA列となった。一方、土層観察のためのテストピット(試掘坑)の土層断面を削る。断面から地表下3米迄の土層の状態を把握出来た。

2月25日(水)曇り後雪 現場では表土剥ぎ後の残土処理の作業をする。しかし、又もや雪に邪魔され、作業中断を止むなくされる。2月26日(木)曇り時々小雪寒の戻り、氷結と調査環境は極端に悪い。上土除去、更に現場進入路の補修。27日(金)曇り時々雪、月が替わり3月になる。2日(月)曇り現場待機中に小雪がちらつく、その中本降りとなり一面雪化粧する。本日の作業は困難とみて皆を解散。3日(火)、この日は結水するも曇りのち晴れのまづまの天気、残土除去により、これまで各グリッドで縄文土器が検出された。4日(水)曇り時々小雨、試掘坑断面削りにより、土層は第9層まで観察できた。土層の不鮮明の所もあるが、調査における一つの方向づけにはなる。

5日(木)晴 この日黄砂現象があらわれる。いよいよ一陽来復の春である。これまで雪、氷雨、泥濘に悩まされていただけにこの日の来るのが待ちどおしかった。2層下位の遺物検出が続く。試掘坑土層観察の結果所々土層の乱れ(異常)のあることを発見、それというのは3層(イモゴ類似層)からの落ち込みの他、注目すべきことは4層(黒土)からの落ち込みで、それが5、6層を抜け7層に達していた。これが遺構の一断面とした場合、時期的に、少なくとも縄文早期以前に遡ることは確かである。

3月11日(水)早朝雨後曇り 本日よりF-6、7区の遺物出土状態の実測をはじめ。遺物の実測の終わった所は、引き続き遺物の露出にかかる。明日からの作業に備えて再度バックフオーを搬入。

3月12日(木)曇り F-7区以南は、試掘の際2・3層から土器等の出土が殆ど無かった。そこで、試掘坑断面に検出された4層下面からの落ち込みを面として捉えるため、バックフオーを使用してF-7、G-7区4層迄の土を取り除くことにした。その排土の深さは約1.4米、とても人力で処理出来る量ではない。機械力を駆使して除去した結果、F-7区4層中から20×20釐位の石が現れた。層中に礫や石を含むことのない火山灰土に石があること自体が不自然で、遺構発見に希望を繋ぐものである。同様の石は16日にもG-7区で1個発見された。バックフオーによる表土剥ぎは地点を農道の西に移し、引き続き排土作業を続けた。ここではA・B・Cと西から東へと作業を進めた。その結果B-6、C-6区のあたりから土器が集中的に発見された。しかし、B-3・4の各区では遺物も少なく、土層の落ち込みから判断して、西側調査区の中央部付近(B-3・4区)は西に向かって小さな谷を形成していることがわかった。

3月18日(木)曇り時々晴 F・G-7区は4層中に発見された石の周辺を精査するため、数回に分けて5層上面まで掘り下げる。この間少々気になる事として、2個の石のほか全く人の気配がなく、4層中から1片の土器すら出土しなかった。ついで5層上面を露出し、落ち込み

を平面的に探索する。露出面から大小(径20~60㎝)の丸い落ち込みが多数発見される。しかしどうみても遺構の臭いがしない。そうした場合2個の石は、また4層からの土層の落ち込みは一体何であろうか。一先ずこの問題についての結論は先送りすることにした。

19日(木) 天気はまづまづの調査日和である。各区で出土した遺物は実測のうえ、区毎にナンバーを付し、レベルを記入して取り上げた。今日はG-6区の遺物実測、その間、作業員にはA・B区あたりの残土処理をしてもらう。現地入り以来担当が私一人であるため、インスタントな調査体制では実測をする間にとっても綿密な作業をさせるわけにはいかない。午後少憩の間に降雨しきり、本日の作業を打ち切る。

昭和62年4月15日(水)曇り 本日より新年度の調査再開。先ず、進入路700米の野道の補修、草刈り、砂利入れなどの作業。F-7区では4層下面について遺構の有無を精査する。この地点は17日迄同一作業を繰り返すが、木炭・焼土その他土器・石器等の人の生活の痕跡が全く認められなかった。そこで第4層以下について、これ以上の調査はしないことにした。

4月17日(金)晴 G-6区について第3層2度目の遺物掘り下げをする。ここには土器片の量が多く、中には礫や黒曜石片があって当時の生活面である可能性が高い。この日土地造成のため設けられた公共水準点の高さが、海拔標高262.1935米であると判明。18日(土)も好天のためF-6区の遺物実測、G・H-6区の3層掘り下げ、遺物の露出をする。

4月20日(月)快晴 本日より勝又君が現場入りする。再び現場は二人の調査員となり俄に活気づく。G-6区では遺物の実測、その取り上げと作業は順調に進む。H-6区では木炭が集約的に発見され、F-5区で2回目の掘り下げは3層上位に達する。今日からバックフオーを投入し、機械力を借りて排土に努める。

4月22日(水)曇り バックフオーはC-6付近の排土。F-6区では既に区毎の遺物番号60になる。H-6では123、G-6では155と遺物の量は確実にふえる。

4月23日(木)晴 A・B・C-7区の表土剥ぎ、F-5区は遺物が極めて多く、2米の方眼にして実測する。F・G・H-6区辺りでは、2層と3層の界面に起伏があって、ビット状の落ち込みが多数みられる。今日は発掘調査とは別に、農道北端三叉路にある「猿田彦太神」の調査のため、周辺の雑木を伐採し一帯を清掃する。猿田彦太神は南面して建っているが、幾分傾いていた。石碑の横にはタブの老木があり、周りを石垣で囲っていることが藪払いによりはっきりした。

4月24日(金)晴 道路補修、F-7、G-7区の4層出土の2個の石は実測のうえ取り上げる。G-4、H-4区も発掘を始める。またH-6区では木炭粒が焼土を伴って出土した。

4月30日(木)晴 各区で遺物実測、遺物の取り上げ、出土状態の写真撮影と忙しい。また西側のA・B・Cの6区では上土の除去をする。

5月になり雨、連休と続き現場作業の休みが多くなる。7日(木)曇り、F-4、G-4、H-

5の各区では遺物の実測その取り上げを、C-6区では上土の取り除きをする。8日(金)晴、H-4区実測、G-4区掘り下げ、また猿田彦の石碑の実測、地形測量をする。

5月11日(月)曇り 先週に引き続き遺物の実測、取り上げ、更に発掘(掘り下げ)の作業を継続。猿田彦周辺の測量も継続。13、14、15、16日と地点を替え、同様の作業の繰り返しである。幸い好天に恵まれ調査は進む。

5月19日(火)曇り A-2・3区の西側は表土が深く、バックフオーで40~50㎝取り除いた後でも2層(黒土)3層(黄褐色土)の地層が確認されない。そこで下位の土層を見るため、西端に幅1米位、深さ1米位の試掘溝を南北方向に10米に亘って掘る。ここでの土層断面には3層はおろか、2層の黒土も現れなかった。このような状況から、この地点(B-2・3区)には遺跡の範囲が及んでいないものと考えられる。現在、この地点は平坦であるが、もともと小さな谷をなしていたものとみられる。その他H-4区では実測して遺物取り上げを、またA・B・C-6区の掘り下げをする。

5月20日(水)晴 F~H区の1/100の全体図をつくる。G-5区では遺物の数は241になる。西のA-7、B-7、C-7の各区では畑の境界線に沿って溝状の攪乱土が現れる。この攪乱土はC-6区で北に曲がりC-5区に及んでいた。攪乱土は確認した範囲で幅3~5米、掘り込みは第3層に及んでいた。この攪乱土について、その後数日かけて調査をしたがその性格を糾明するに至らなかった。そこで、埋土の色調などからして年代的に新しいものとしてこれ以上追求することを中止した。

5月23日(金)曇り H-5区北側(木炭・焼土の周り)は遺構発見の期待があるので、土の湿り具合をみてその検出に努めた。その結果、南北に長く3×2.5米位の楕円形のひび割れのあることを確認した。そこで慎重を期するため、その中に十字形に試掘の溝を入れた。溝は幅20㎝とし、土色の変化に注意して掘り下げた。

5月25日(月)薄曇り 先週よりの作業の継続としてH-6区の遺構の発掘がある。遺構内の埋土は固く、整穴の床の見極めは困難であったが、その床面まで掘り下げた。ここでは寧ろ、埋土のほうが周りの土より粘りが感じられた。また埋土中に木炭片(粒)のあるのも特徴の一つであるが、木炭片の分布は遺構の東半に多かった。

5月29日(木)晴 26、27日の大雨で調査現場でも土砂崩れなどの被害がでる。西側調査区の道路遺構実測をするが、その際硬化面上から近世陶片が現れ、踏み分け道の年代は古くて江戸、もっと下って明治・大正ということも考えられる。

5月30日(金)曇り 5月もすでに月末になった。F-5区では遺物の出土が多く、3層での掘り下げが3回目になる。F-5区の南よりの地点では磨製石斧1・打製石斧3・磨石3が集中的に発見された。この異常ともみえる現象は、土の乾燥などの条件により遺構の検出は困難にしても縄文人の生活が生感触として伝わってくる。C-5区では実測、続いて掘り下げ、道路

遺構もその断面の実測をする。

62年6月1日(月)晴 F-5区遺物の実測、G-5区掘り下げ、C-5区実測及び掘り下げと作業はまず順調に進捗する。2日も前日の作業を継続する。しかし午後雨に見舞われる。3日掘り下げ地点はG-5区よりH-5区に移る。4日H-4、H-5、F-5、G-5区と実測、掘り下げの単調な繰り返しが続く。この中、F・G-5区では4回の繰り返しで殆どの遺物が出尽くしたものとみられる。

6月5日(金)晴 この日、H-4区のG-5区に接するあたりに焼土のあるのを発見、その周りを精査するも遺構の検出なし。

8日大雨、9日雨のち曇りの天気、時節梅雨の前兆かと思われる。10日(水)快晴、久し振りに爽やかな日である。F・G・Hの4・5の各区では実測、掘り下げの作業を繰り返す。雨後の湿りを幸いに遺構の検出に努めるが結果は妙々しくなかった。しかし、H-4区、F-5区及びG-5区では焼土は鮮明に浮きだされる。

6月11日(木)快晴 今日入梅、本来ならば雨期のはずが、空にはその気配がない。引き続き遺物の実測、取り上げ、さらに残りの地点の掘り下げ作業に精をだす。12日、この日も好天、農道に接したF-4・5・6区西側の土層断面の実測、ここは土層断面が地表からの図のとれる有利さがある。その他、現場の写真撮影、その他発掘作業をするが、G-6区には打製石斧2点などの遺物がまともって発見される。

15日(月)雨のち曇り 現場は休む。17日、晴れ時々曇り、現地調査の収束を考える時期にきた。まず安全を期するため、手始めに試掘坑の埋め戻しから始める。一方で、遺物の実測、写真撮影。各区ではジョレンを使い遺構検出に努めるが、温度の上昇に伴い乾燥のためその検出は困難。

18日(木)曇り 風あり爽やか。東側のF・G・Hの各区の調査も終わりに近づき、調査の重点が西側のB・C区に移る。特にC-5区には出土遺物多し。東側の各区はレベルを使い、参考まで各地点の高さをだす。

6月22日(月)快晴 19日午後降雨、しかし梅雨の気配なし、寧ろこのことは調査に幸いでいた。東側では残りの調査をする傍ら、念のため、調査終了地点について深掘りすることにした。各区の中央部に幅40㎝の溝を縦横に掘ることにより、層中の遺物の掘り残しの有無を調べると共に、断面観察による遺構検出の可能性を試した。

62年6月25日(木)曇り 22、23日に引き続き調査の終わった所に幅40㎝の試掘溝を掘る。各溝における遺物の有無、埋没状況を観察した。それによると、大多数の遺物は既に取り上げたが、幾箇所かの試掘溝に石や土器の小片が残っていた。しかし、溝の土層断面を見るかぎり黄褐色の色調にはとくに変化は見られなかった。

6月26日(金)快晴 F-Hの東側の発掘終了時における全体写真を撮る。西側調査区の遺物

はC-6区からC-5区へと拡がっており、地形の上から北西に向かって幾分傾斜しているが、遺物はC-5区よりB-5区の方へ延びるようである。

6月29日(月)曇りのち小雨 B-5区では石皿が据わった状態で出土する。石皿は3層にのった形で、周りには磨石なども散乱していた。このB-5区では実測と発掘を繰り返す。またG-5区北側は、焼土とその周辺に多数の炭化したドングリの散乱していることで注目していた。この地点についてはもう少し調査の手をいれることとした。

7月1日(水)曇りのち雨 B-5、B-6区調査区を限った発掘をする。G-5区では焼土の周りを5種掘り下げる。この地点を上から見下ろすと、径5米位の範囲に遺物が集中しており、周りの土より幾分黒ずんでいることが判った。焼土の周りから土器片・ドングリの量が確実にふえる。この一帯については、更に5種刻みで掘り下げる。

6日(月)曇り 7月になり遅ればせながら梅雨の様相となる。前夜は雷雨、調査現場の所々に水溜まりができ、その排水から始める。F-5区の焼土の周りもG-5区と同じく掘り下げる。B-6区についても実測と発掘による遺物の露出を繰り返す。

7日(火)曇り 時々雨のはっきりしない天気である。G-5区では図取りの後、遺物取り上げをする。G-5区での遺物は700の大体になる。

8日(水)曇り G-5区では焼土の中心部を南北に断ち切る。最後のあら料理である。しかし、その断面から遺構の立ち上がりとか、床面(硬化面)は確認できなかった。またF-5についても遺物実測・遺物取り上げなどの終末処理をする。

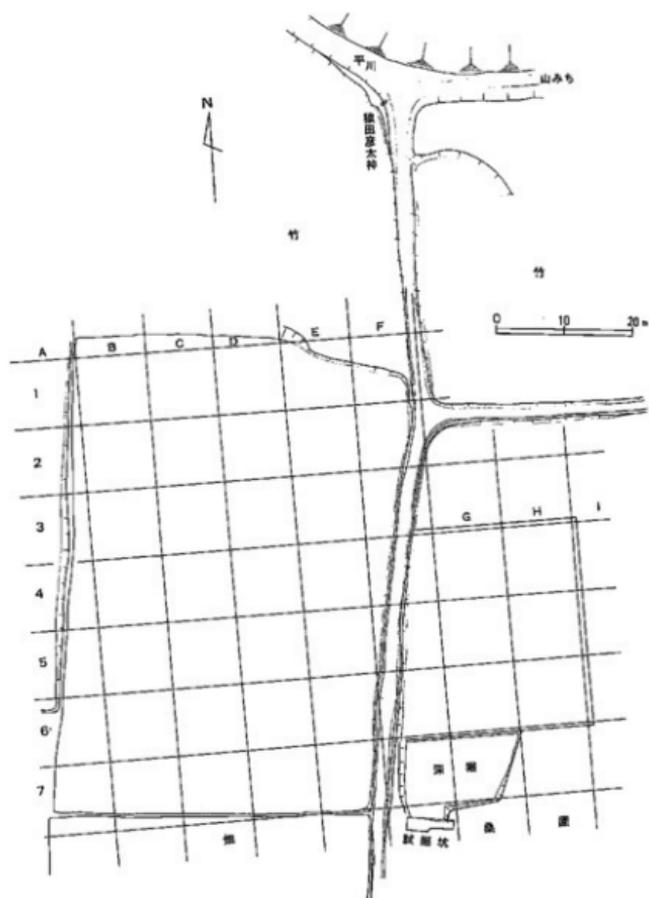
9日(木) この日も残務整理などの現場の撤収準備をする。

62年7月10日(金) 現地の関係者等に挨拶して、調査資材をまとめ引き上げる。この八窪遺跡の発掘調査は、厳寒のしかも積雪の中現場入りした。年度を越え6箇月余り、現場をあとにし感慨新たなものがあった。

## 第2節 調査の方法

八窪遺跡の調査は、既に「調査に至るまで」の中に述べたように現地踏査、次いで踏査時遺跡が確認された地点の試掘を経て本調査に及んだ。そこで、調査対象地の状況は調査前にある程度把握できた。“調査の経過”にも記しているとおり私一人が現地入りし、発掘調査を始めることになった。

以上のような経過から、八窪遺跡の発掘調査を開始するにあたって、予め調査方法について検討したわけではない。これ迄、試掘により2層下面及び3層から縄文後・晩期とみられる土器が出土している。このことを基本にして、一人現場と言う状況を考え、予想される遺物の広がりやを考慮にいれ表土剥ぎを行うことにした。作業の効率を上げるため表土剥ぎにはバックフ



第3図 八座遺跡調査区割

オーを使用し、2層下面の遺物包含層の直上で止める（実際的には地面の起伏、オペレーターの技量といった要素も加わり考え通りには行かなかった）、といった方針でのぞんだ。

表土剥ぎ、上土の取り除きの後、遺物処理・記録の便宜さを考慮にいれ、早い段階にグリッドを組むことにした。各グリッドは10米拵とし、一側を南北軸にあわせることにした。またグリッドは東西軸を西からA・B・C・D……とし、南北軸を北から1・2・3・4……とした。発掘（掘り下げ）作業はグリッドごとに行い、遺構が検出されない場合は5～6種の深さを面的に掘り下げた。その際、露出した遺物は写真撮影・実測の後、番号を付し取り上げる。また遺構等が検出されない場合は同一作業を繰り返す。遺構検出の際は自ずと遺構調査に重点を移していくことになる。ここでは遺物より遺構という考えを基本においた。

この様な考えのもと調査を始めた。その後は、調査の進行状況にあわせ随時検討を加えることになるが、結果的に遺構・遺物の発見状況、人的構成要件をもとに“調査の経過”に記したとおりになった。

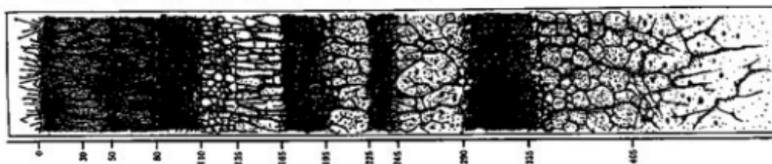
八窪遺跡での調査対象として、遺構遺物の発掘とは別に“猿田彦太神”が調査区域内にある。この石造物については、周辺の清掃の後、実測（測量を含めて）することにより記録した。表土剥ぎの際出てきた踏み分け道についても、記録の対象とした。

### 第3節 八窪遺跡の土層層序と遺物出土層位

調査前の現地試掘により土器の出土層位はある程度把握できた。しかし、新たに現場入りするに当たりテストピット（試掘坑）を掘ることにした。試掘坑は直接調査の障害にならないように配慮し、今回の調査区の南端の農道脇（F-8区）を試掘地点に選んだ。試掘に当たり、バックオーをつかい1.8×3.0米、深さ3米位の穴を掘り、西及び南壁を地表からの地層観察に充てた。

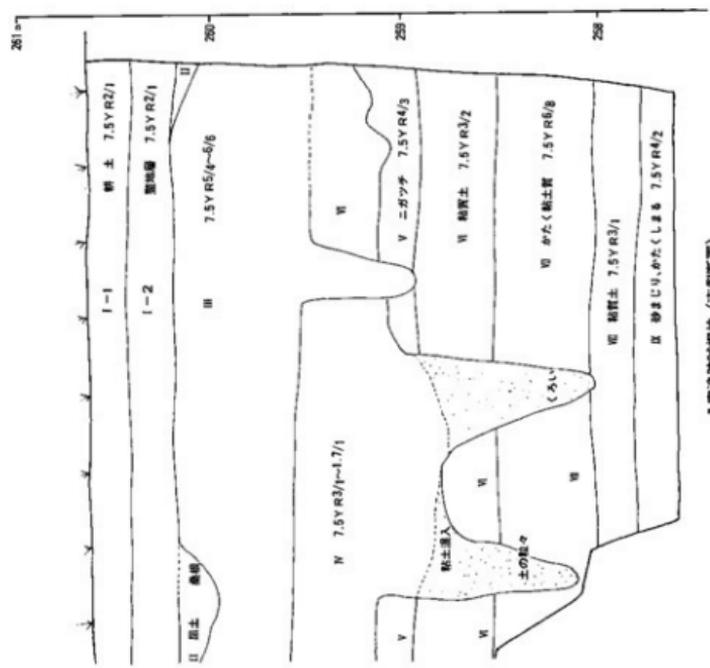
八窪遺跡試掘坑の土層説明のまえに、高尾野地区の地層について専門家による調査がなされているのでそれを活用したい。それというのは「写真でみる九州の土壌と農業」<sup>註1</sup>及び「あるいて見る九州の土壌」<sup>註2</sup>である。第4図の右図は「熊本県・大津町・高尾野」の黒ボク土の断面で、調査地点が大津町・高尾野（たかおの）のミルクロード沿いであることから八窪遺跡は東北約1軒の至近の距離にある。土層の様態については図の中の説明にゆづるとして、ここでは同書から“ニガ土”についての説明を補足したい。

「彼ら（大津町・西原村の農民）が“黒ニガ”、“赤ニガ”、“ゴマニガ”とよんでいる」。これらの土層はいずれも「多腐植質の火山灰埋没土層を指し、腐植含量が10～15%で、土色のより黒いものを“黒ニガ”とよび、比較的腐植含量が少なく、7～8%程度で暗褐～黒褐色の漸移層を“赤ニガ”と称している。この両者よりも土性（粒径組成）が粗く、浮石や粗砂程度の



- (1) A<sub>0</sub>: 10YR 2/1, L, (黒ボク層)
- (2) A<sub>12</sub>: 10YR 2/1, L, (黒ボク層)
- (3) B<sub>1</sub> 1 b 1: 10YR 1.7/1, L, (黒ボク層)
- (4) B<sub>1</sub> 3 b 1: 10YR 2/2, L,C, 小塊状構造 塊状構造 (ツルニガ肌), (黒ニガ肌)
- (5) B<sub>1</sub> 1 b 1: 10YR 2/2, 3/1.6, 3/4 キヤイト (へビ紋様), CL, 中・小塊状構造 塊状中硬, (黒ニガ肌)
- (6) B<sub>1</sub> 2 b 1: 10YR 3/4, CL, 大塊状構造 塊状中硬 (固塊 色水山状肌)
- (7) B<sub>1</sub> 1 b 2: 10YR 3/1, 3/2 キヤイト, L,C 小塊状構造 塊状中硬 (ツルニガ肌), (黒ニガ肌)
- (8) B<sub>1</sub> 1 b 2: 10YR 2/3, CL, 塊状構造 (向に丸味あり), L, 固ボクニガ肌)
- (9) B<sub>1</sub> 1 b 3: 10YR 2/2, 3/2 キヤイト (へビ紋様), L,C, 小塊状構造 塊状中硬 (ツルニガ肌), (黒ニガ肌)
- (10) B<sub>1</sub> 2 b 3: 10YR 2/3, 2.5YR 4/4, 4.6 厚皮(固塊を含む), CL, 大塊状構造 (向に丸味あり), (下層ツルニガ肌)
- (11) V A 1 b 4: 10YR 3/1, 3/2 キヤイト (へビ紋様), L,C, 中・小塊状構造 塊状中一硬度 (黒ニガ肌)
- (12) V B 1 b 4: 10YR 4/6, 3/1, 3/2 キヤイト (オレインゴロシ) の粗粒部, L,C, 大塊状構造 塊状中一硬度 (タイワン)
- (13) V B 2 b 4: 10YR 4/6, CL, 塊状の塊状硬, (塊状色水山状肌)
- (14) 図1の地点より採へたる、標高約20m、図1の(2)層1、イキロ層部は土の硬面は固塊から成り、ツルニガ肌、上部・下部の2枚とも存在する、(丸形ツルニガ肌層 標高約20m位置) (カラー・F10層、標高 200m)

標本集・大塚野・高尾野 (図野高: 1973-Oct.)



八雲遺跡試掘坑 (前断面)  
右は写真である「九州の土層と構造」より

第4図 八雲遺跡土層層序

大きな結晶の長石が、あたかもゴマ塩の中のゴマのように混在している土層をゴマニガとよんでいる」

以上のことを念頭において試掘坑の土層に目をむけたい。

八窪遺跡での土層について試掘坑南側断面図をもとに説明したい。

第1層黒色土で、1-1は現代の耕作土で層厚10~20㎝、1-2は整地層で層厚22~36㎝である。1-2はこの地点に第2層が部分的に、しかも落ち込みという形でしか残っていないことから現代の整地層ということが知れる。

第2層は黒土でこの断面には部分的にしか観察することが出来なかった。F-4、F-5区の西側断面にはよく残っていて、大部分は整地により動き1-2に吸収されたものとみられる。層厚20~40㎝、30㎝前後がこの地域の一般的状況とみられる。「写真でみる九州の土壌と農業」の「熊本県・大津町・高尾野」(以下、略して右図)の(4)II A 3 b 1 (黒ニガ層)に相当するものとみられる。

第3層はにぶい褐~橙色のバサバサした土で、イモゴ類似層と見られるもので一見して他の土層と異なっている。層厚65~70㎝、子細にみれば明黄色~黒褐色と部位により土色に幅がある。右図の(5)II B 1 b 1 (赤ニガ)及び(6)II B 2 b 1に相当するものとみられる。この様に専門家は、土の構造から二つの層に分けておられるが試掘坑でも子細に検討すれば二分出来たかもしれない。

第4層は黒土で層厚45㎝前後で、右図の(7)のIII A 1 b2 (黒ニガ)層に相当しよう。後で触れるが、この層からの落ち込みが土層断面上に観察された。

第5層は褐色の堅く締まった土で層厚20㎝前後、ニガツチと俗称される肥後の広域に分布する土である。右図の(8)III B 1 b 2 (上部ゴマニガ層)に相当する。

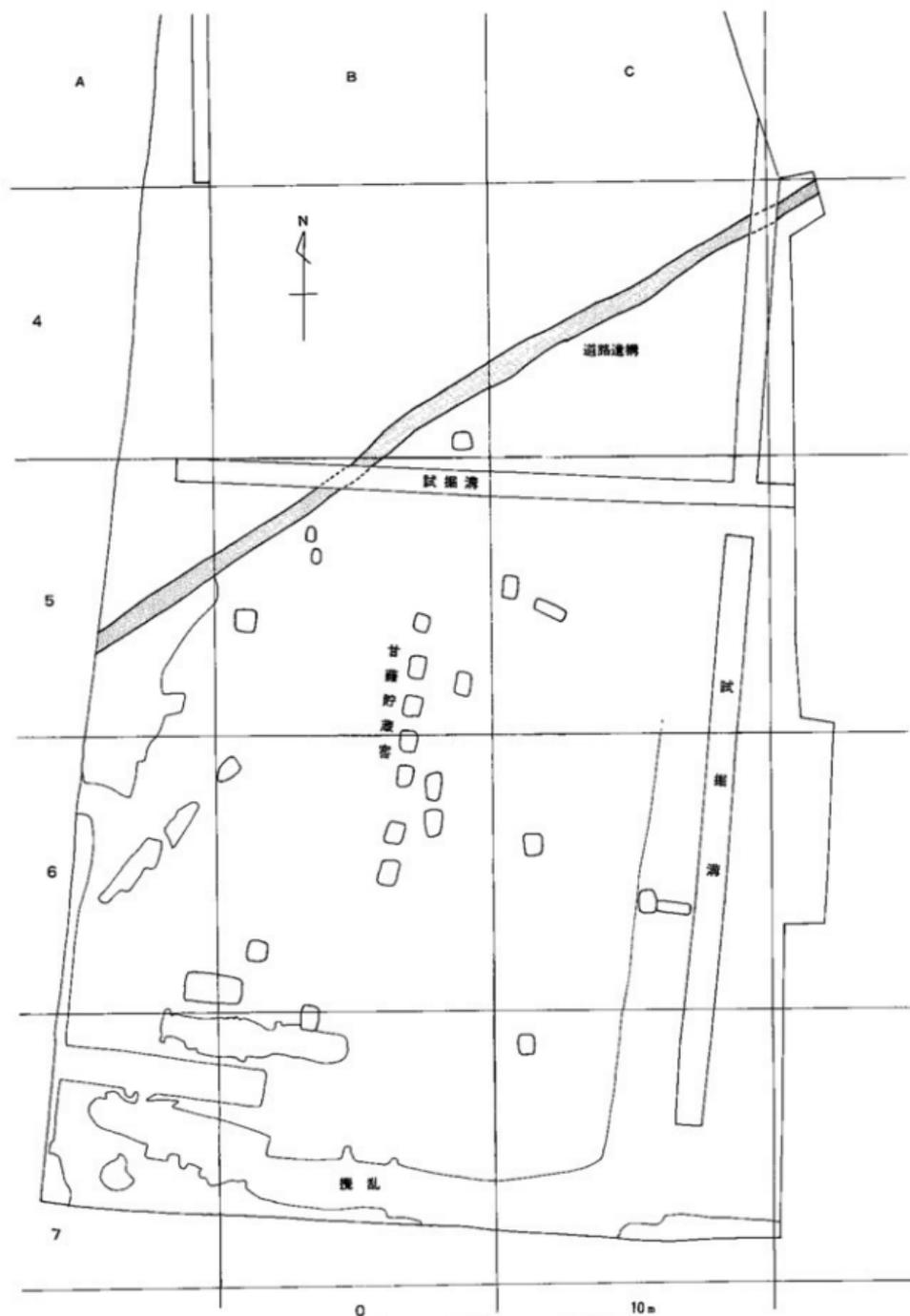
第6層は黒褐色の粘質の堅く締まった土で層厚40~45㎝、右図の(9)IV A 1 b (黒ニガ層)に相当しよう。

第7層も橙色の粘土質の堅く締まった土で層厚53㎝である。この層は右図の(10)IV B 2 B 3に對比されよう。

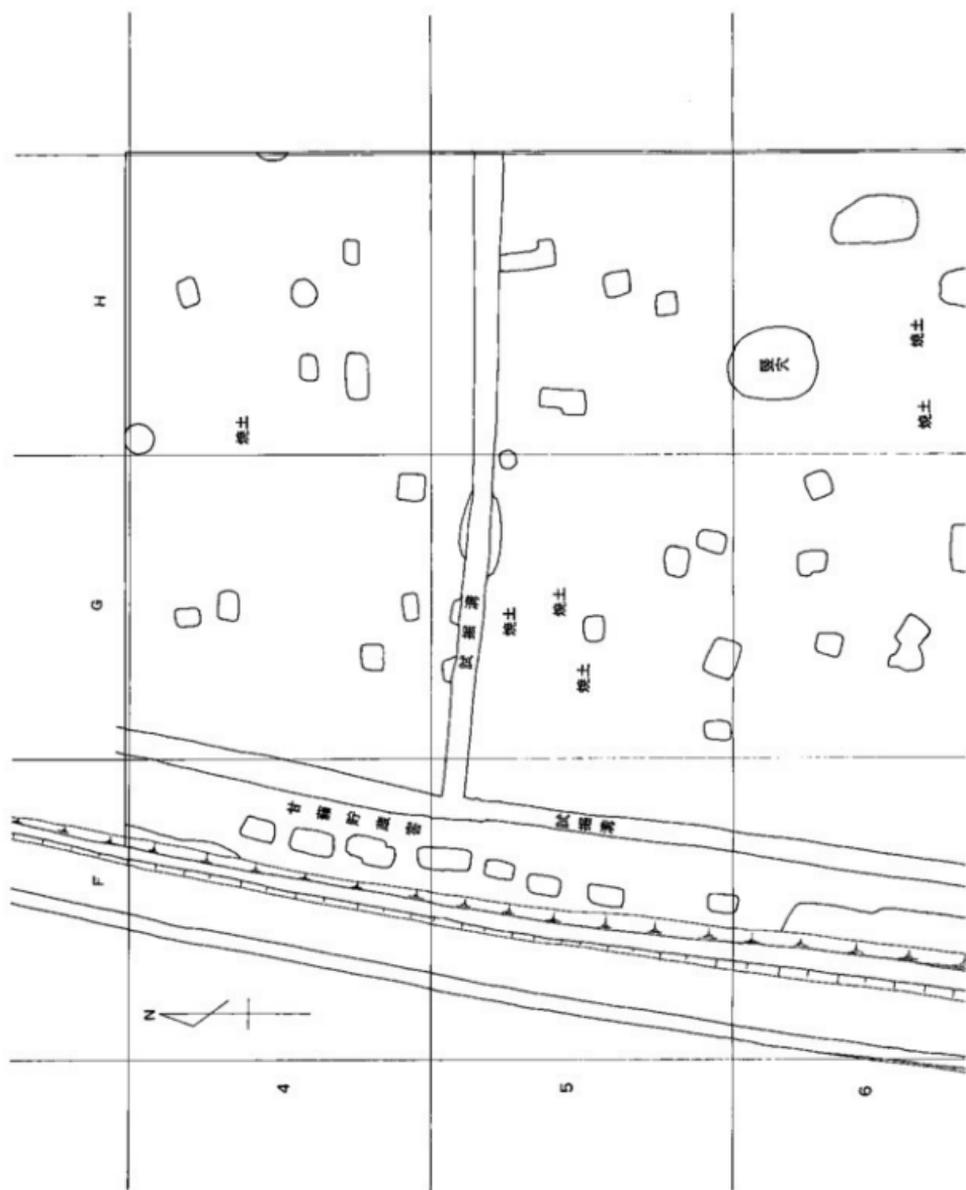
第8層は黒褐色粘質の堅く締まった土で層厚32㎝、色調は6層より幾分暗い。右図の(11)VA 1 b 4 (黒ニガ)に相当する。

第9層は灰褐色の堅く締まった砂まじりの土で試掘坑で30㎝余り確認した。この層は右図の(12)に相当することが考えられる。

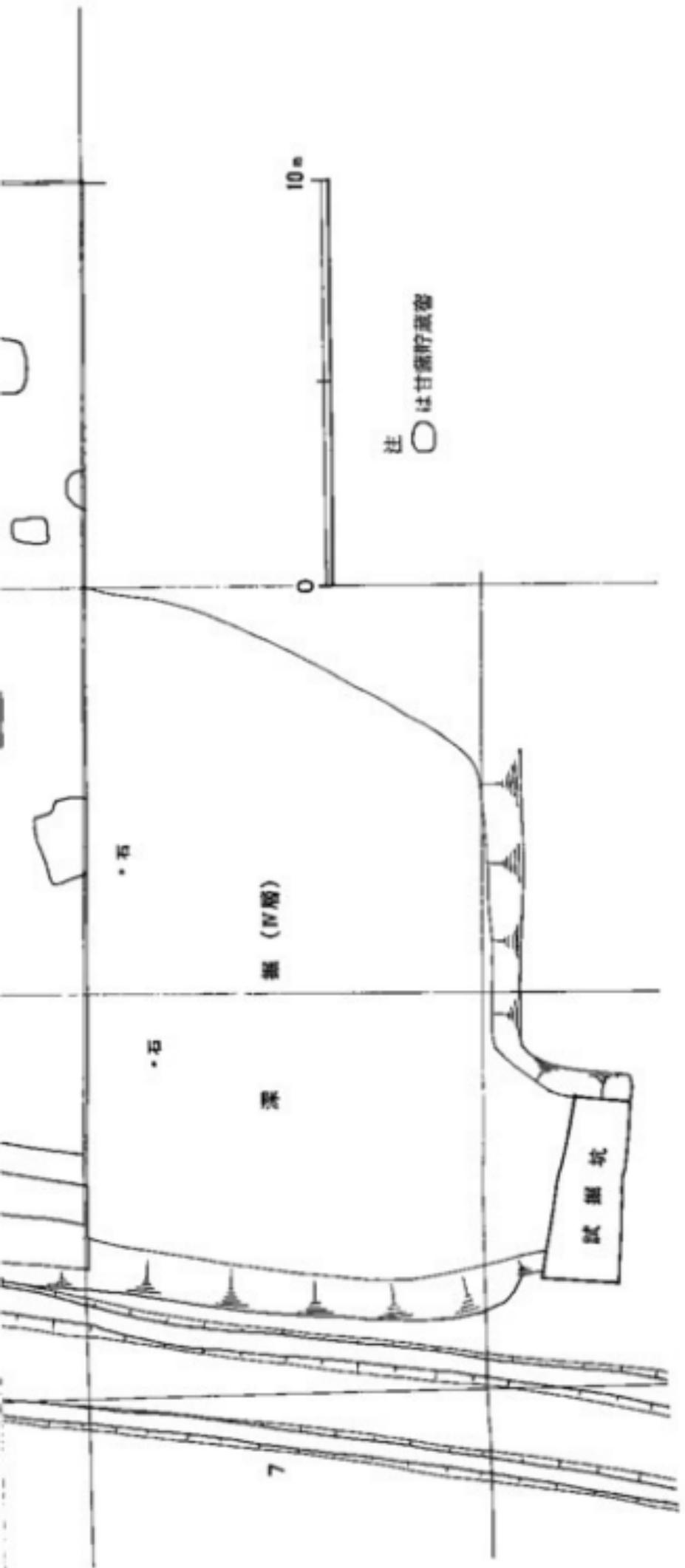
以上が試掘坑における土層断面観察の概要であるが、八窪遺跡の縄文土器(後期・晩期)包含層は第2層下面~3層中位あたりとみられる。ここで第4図の八窪遺跡土層断面図を前にして注目すべきことは、第3層と第4層からの落ち込みである。極めて常識的な判断として、第4層もしくは第5層形成以後の、掘り込み(遺構であることを含めて)と考えられる。とくに、



第5図 八窪遺跡表土はぎ後の土層の状態(西)



第6図 八窪遺跡表土はぎ後の土層の状態(東)



4層からの落ち込みは調査担当者の脳裏を強く刺激した。それが堅い5層のニガツチを突き破り、6・7層、更に8層に達しており、落ち込みの中には粒径2糶程度の土粒や粘土が混じり時間をかけて埋没したことを物語っていた。後刻、F-7・G-7区4層面のきつかけとなるが、人為的な掘り込みであるか、それとも自然的所作によるものかについては問題を残すことになる。

注1 『写真でみる九州の土壌と農業』1980 写真でみる九州の土壌と農業編集委員会発行

注2 『あるいて見る九州の土壌』1982 土壌調査研究会発行

#### 第4節 遺物出土状態と検出遺構・その他

ここでは、主として八窪遺跡発掘調査現場に関わる事項について取り上げてみたい。既に「調査の方法」の中に述べたとおり、現地での調査は遺構検出に重点をおいた。しかるに、火山灰土の乾湿等の諸条件に恵まれず縄文期の遺構として竪穴1、近世とみられる踏み分け道1条を調査するに止まった。遺物の出土状態について、ここでは縄文土器・各種石器の他、木炭・石、或いは焼土などの発見出土の状況について述べることにする。その他の事項は地上物件としての石造物、即ち“猿田彦太神”についての調査について述べたい。

##### (1) 遺物の出土状態 (付図1、2)

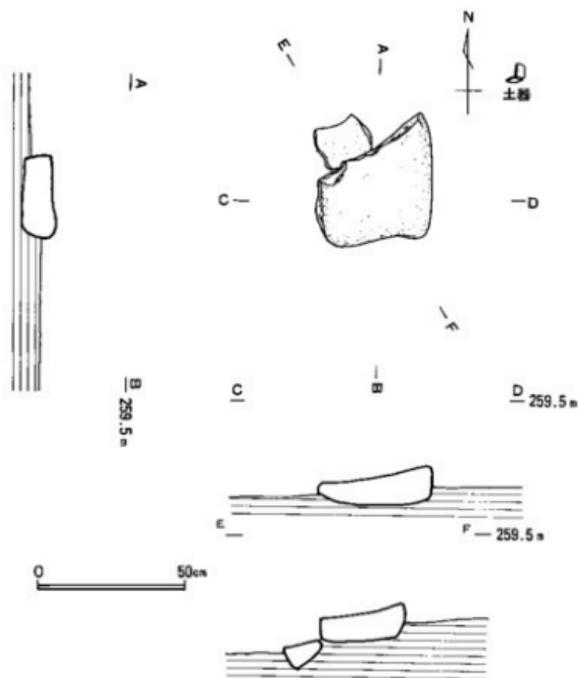
八窪遺跡発掘調査現場を南北に縦断する農道を境に、西と東に分けて説明することにする。農道により遺跡が分断される結果になるが、現在使用中の農道ということで実際にこれ以上の発掘が出来なかった。さらに農道の西側東半は後世の攪乱の為、大部分の遺物包含層が消滅していることが試掘により明らかであった。個々の説明にはいるまえに、共通の事項として後世の攪乱土と試掘溝がある。図中、四角や丸で囲った中に+印のところが攪乱土で、50~70糶のものは甘藷の貯蔵窖で、貯蔵施設の出来た現在でも深さ1米位の穴を掘り貯蔵している。

試掘溝は西側調査区(付図1)に南北・東西の各一条が、また東側調査区(付図2)にも南北・東西各一条を図示している。攪乱土や試掘溝の埋土除去後、発見した遺物についてはその中に記録している。また各図には幅1米の透視断面図を付し、それぞれの遺物の包含状態を理解し易くした。

西側調査区(付図1)図に示したB・Cの5・6区以外でも遺物は出土しているが、ここでは図によって説明したい。

この辺りの土層は、透視断面図の遺物の包含状態から判断出来るように西或いは東に僅かに傾いている。遺物の分布は南北試掘溝の東側は疎らで、小片が散発的にしか発見されなかった。その原因の一つに、土層の攪乱が第3層に一部及んでいたことにもよるが、大部分が土器の小破片であることから元々遺物の量が少なかったものとみられる。また図の西側、とくに南寄り





第8図 八窟遺跡石皿出土状況 (B-5区)

側の調査区の現地形は概ね平坦である。東西透視断面図の図の西端（農道側）の地表が高いのは道端の畦によるもので、2層以下の界面と比較すれば僅かに東が高くなっていることがしれる。西側調査区の精査部分は約400平方メートルであったが、東側の調査した範囲はF・G・Hの4・5・6の各区とF-7区及びG-7区の約850平方メートルであった。

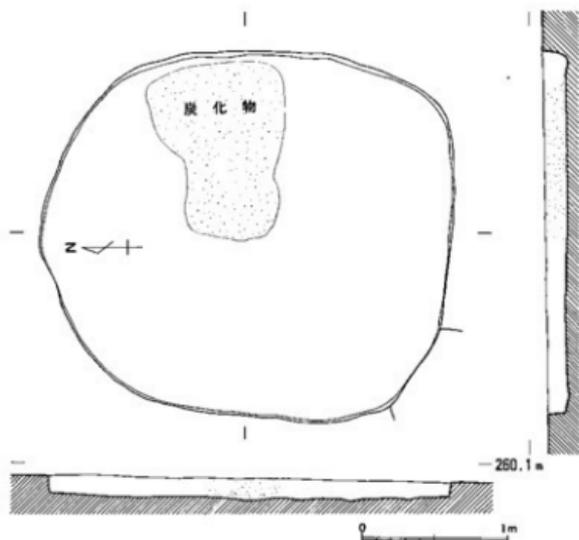
付図2は東側調査区の全体図である。この調査区でも随所に土層の乱れがあり、その攪乱が土層の深部に達している所もあつた。攪乱も一辺70厘米前後の長方形のものは甘藷の貯蔵窖であるが、なかには円形の窖もある。H-6区の東南に大形の掘り込みが二つあり、このうち北よりの穴は重複して掘られている。これらの穴から大型動物の骨が出土しているところから、恐らく斃死した牛馬を埋めたものとみられる。

図中、H-6区（一部H-5）に竪穴一基が発見されたが、その他明確な遺構の検出はなかった。しかし、遺構に伴うとみられる焼土は多数発見されF-5区に2、G-5区に3、G-4区とH-4区の境に1、さらにH-6区に2の合計8箇所検出されている。炭化物は包含層の中に散発的に検出されたが、集中的に発見されたのはH-6区の竪穴の中とG-4区、更に

に磨石が数個散乱していたのも何か暗示的である。

C-5区はとくに遺物の量が多いことは、先に記した数値のしめすところであるが、土器の他に完形の石器がふくまれている。数点の打製石斧のほかに、整形石器、磨石、敲打器などが含まれている。C-6区でも部分的に土器片などが集中していたが、石器は磨石2個のみ発見された。

東側調査区（付図2・第7図）農道東



第9図 八座遺跡発見の竪穴 (H-6区)

G-5区の焼土のところである。H-6区の炭化物は竪穴検出の契機となるが、G-5区の異常なまでに多い焼土と炭化物は、この地点(第7図がそれで、このことについて後述)について重点的な掘り下げをする口火となる。

次に遺物の分布状況について述べる。遺物は調査したほぼ全域から出土した。

このうちF-5区・

G-5区・G-6区のあたり、更にH-4区及びH-6区には分布の密度が高い。またH-4区の東半とF-5区からG-5区にかけて遺物の出土量がとくに多い。これは断面図をみても判るように、F-5区からG-5区のあたりは遺構を追跡して掘り下げたことによるが、もともと遺物の多い地点であった。

生活に直結するとみられる石皿・磨石、その他、石斧・石鎌等も土器片と共に広域に分布している。F-5区東側の大形の石皿は、それが横に倒れた状態で発見されている。それらの状況から意味するところを窺い知ることは難かしい。

第7図はG-5区西北部の焼土と遺物の密集地点で、下位からの遺物の出土状況である。遺物は直径4米位の範囲がとくに多い。そこで遺構の確認、掘り下げ、遺物の実測を数回繰り返した。結局、面的には遺構の検出が困難であることから焼土の付近に幅40cmの試掘溝を掘った。断面図と平面図の焼土の範囲のずれは実測時の発掘深度の違いから生じたずれであるが、焼土自体周辺部になると範囲が曖昧になっている。焼土の周りには炭化したドングリが多量に(集めただけで200~300粒)出土した。南北の試掘溝は、始め焼土の部分を外して掘り下げたが、最終的に焼土をも断ち切り土層断面から遺構の検出につとめた。焼土の広がりが下位におよぶのは熱伝導のうえから当然として、断面観察から遺構の掘り込みなどの立ち上がりは確認されなかった。この土層断面の状況から読み取るとすれば、当時の生活の場はもう少し上の遺

物の集中するあたりに求めるのが現場の状況と符号する。さらに付言すれば、この焼土を中心にした径4米位の遺物集中地点に“平地住居”の可能性を考慮に入れてもよからう。

ここで、農道より東側の各調査区で記録（位置とレベル）した遺物の数を参考迄に記せば次の通りである。

F-4区	85	F-5区	450	F-6区	140
G-4区	469	G-5区	724	G-6区	347
H-4区	592	H-5区	347	H-6区	225

遺物として取り上げたもののなかには、土器・石器のほか、中には自然遺物と見境のつかないものもあるが、記録した数値から出土量の概数はつかめよう。

ここで、東の調査区F-7区とG-7区第IV層発見の2個の石について述べねばならない。F-7区の石は、北はF-6区との境から180㎝、東はG-6区との境から180㎝の交点付近から出土した。石の下面の高さ標高259.19米で、第5層の上約20㎝であった。G-7区の石はG-6区の境の南110㎝、F-7区の東2米のところより出土し、石下面の標高259.26米、第5層上40㎝のところであった。この2個の石には加工・使用痕はみられないが、黒土中に発見された石としてとくに記録に留めた。

## (2) 検出遺構

### 竪 穴 (第9図)

竪穴はH-6区、一部H-5区に跨ぐかたちで発見された。その平面プランは南北に長い楕円形をしていて、長軸2米78㎝、短軸2米45㎝を測った。竪穴の深さは、その検出面から10～15㎝であった。遺構内、とくに東側には木炭片、炭化したドングリが多量に発見された。土器片は埋土中に縄文土器が少量出土し、破片の中には周り（竪穴外）の土器片と接合するものもあった。周りの土が硬いということもあって、床面にはとくに硬化面と言えるものは無かった。

### 道路遺構 (第5図)

いわゆる踏み分け道である。遺構は早くも表土剥ぎの段階で発見され、A-5区からC-4区の方に一定の幅をもった硬化面が確認された。硬化面は幅約30㎝、N-56°-Eの角度を保ちながら直線的に延びていた。道路遺構の土層断面を西端のA-5区でみれば、地表下20㎝に硬化面の上面があらわれる。土層は硬化面上に2層識別出来るが、1層は耕作土で約12㎝、次いで、2層には黄色の土（イモゴ類似層か）の混入した黒土がくる。この層厚約8㎝である。硬化面は凹レンズ状になか凹みになり、数枚もの層をなす。断面中程の厚さ約18㎝、ここでは剥離面から4枚に分離出来た。硬化面のまわり、即ち、下・横は黒色土で八窪遺跡の土層層序に取り上げた第2層に相当する。この下に黄褐色のイモゴ類似層がある。

道路遺構は総延長28米を検出したが、その方向はF-G-2区の農道三叉路のところに延びているように思える。そこで、確認の意味も含めて遺構の延長が予想されるF-2区、E-3区を

断ち切ってみた。西側のD・E区は試掘調査の段階で、ある程度予測されていた通り、地表下数十種にわたり攪乱され遺構の検出は不可能であった。

ここで道路遺構の年代についてふれなければならない。年代判定の材料として、遺構検出の層位から古代・中世まで時代がのぼることはない。道路面から数点の近世陶片が発見されている。また現耕作者はじめ、地域の人々はこの道路のあったことを知らない。勿論道路の方向が今の道に連なることが推定されるが、西は山林にむかっていることなどから近世以降・近代には消滅したものとみられる。

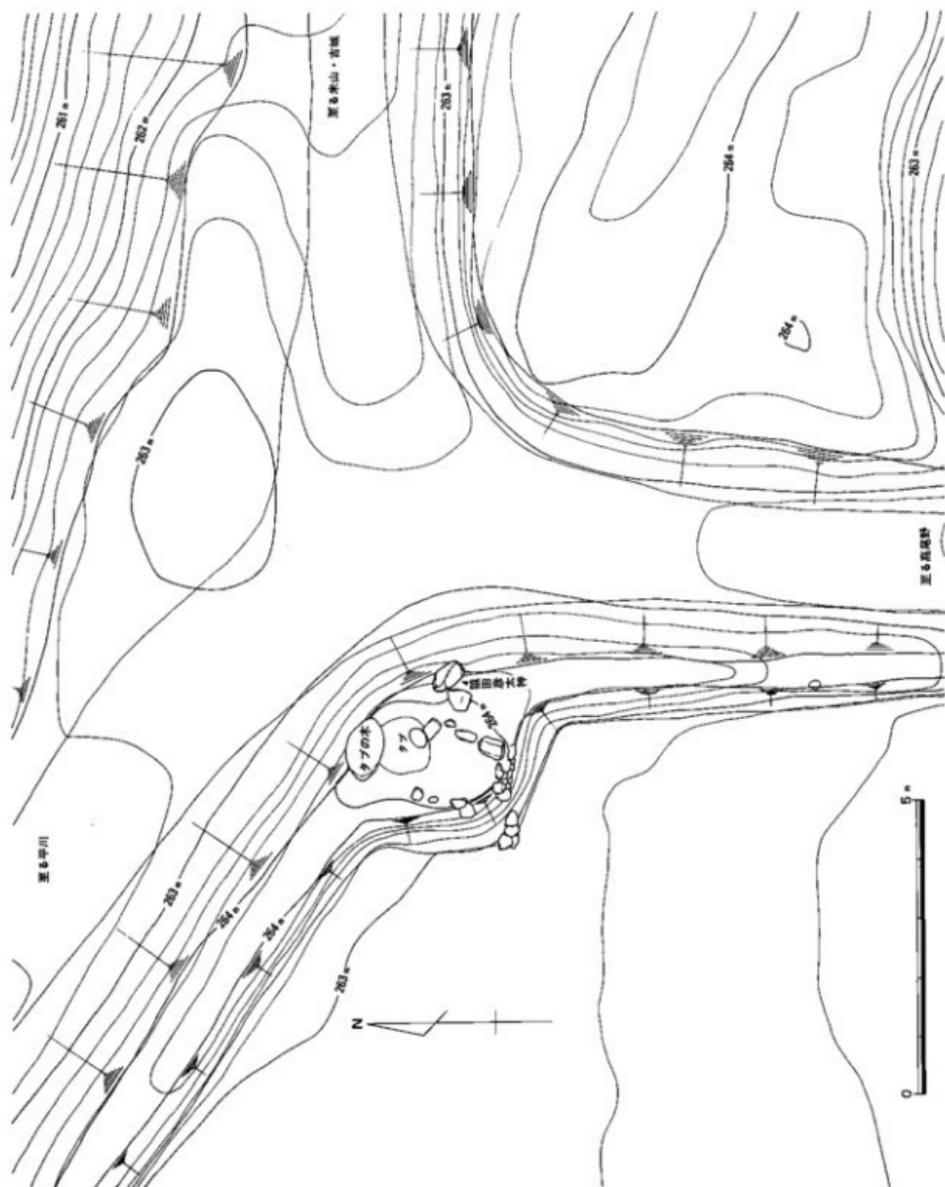
農道より東のF・G・H列の4・5・6の各区の縄文時代の遺物の出土状態は付図2のとおりである。ここでも随所に甘藷の貯蔵密とうによる攪乱土が目につく。攪乱土のうちH-6区東側の楕円形の大型の掘り込みは、窖中から大型の獣骨が出土しており、近世以降・現代に近い時期の斃死家畜(牛馬)を埋めたものとみられる。さらにF-6区の農道沿いの攪乱土も近世以降の掘り下げと見られる。またF列の農道に沿って南北一条、F-4区から東のH-6区にかけて東西一条の溝は61年調査時の試掘溝である。

### (3) その他

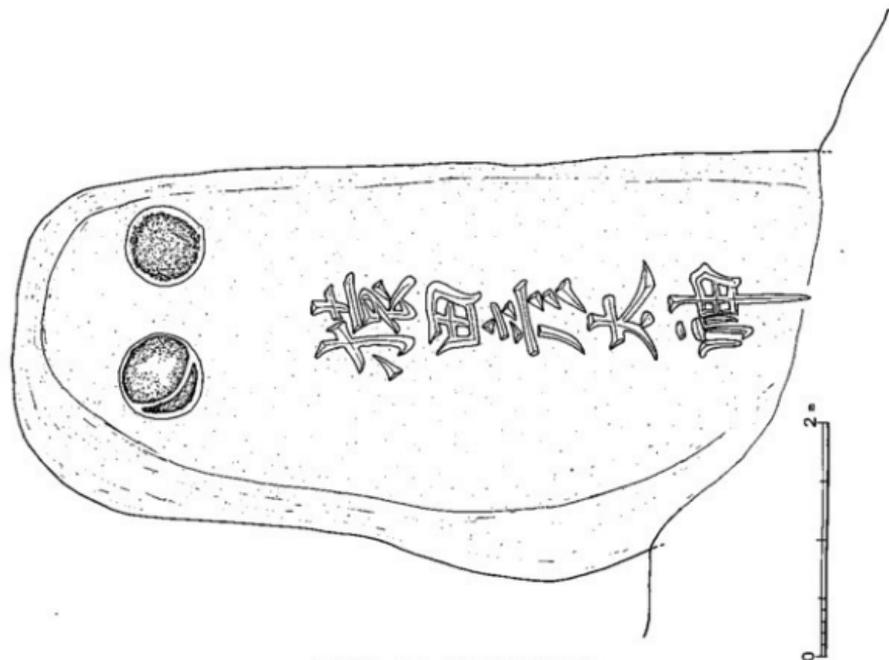
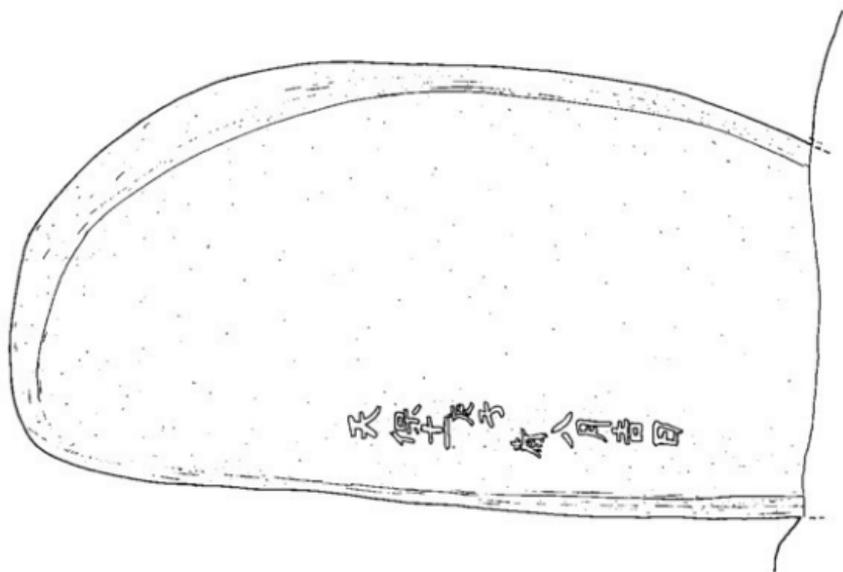
ここでは、発掘調査現場の北約50米の地点にある“猿田彦太神”を取り上げる。猿田彦太神は南(高尾野)に延びる農道の丁度三叉路の角に建っている。この道を西に行けば、平川の方角となり、また東は山道となっている。しかし、地元の人の話によると、この軸道は米山・古城に通じていたという。道幅1.8米(1間)道路で往時は、この村の重要な役割を担っていたものとみられる。

猿田彦太神の石碑のあたりは、周りより1米余り高く盛土され内側(南と西)には石垣が積まれている。盛土の上にはタブの大木(100×70㎝)が茂り、その南東側に南面して猿田彦太神の石碑が建っている。石碑は不安定に揺らぐことから、始めから南面していたのか、それとも道に面して東向きに建っていたのか地上観察では明らかでない。しかし、根固めとみられる挽き白の破片などが碑の根元にあった。

石碑は高さ70㎝ばかり(一部埋没)、幅約35㎝の三角柱状の自然石(安山岩)を用い、二側の平坦面に文字が刻まれていた。前面上部の径6.5㎝の丸いかたちは、右の円形を日、左の三日月を月に見立てているものとみられる。中央の縦書きの五文字は「猿田彦太神」と薬研彫りされ、碑の性格付けをしている。上部の日月の形は、地域によっては猿田彦太神が「庚申」の役割を担わされていることから、この猿田彦太神も同様のものかとみられる。碑の正面右側には紀年銘がある。銘は左隅に小さく「天保十一庚子歳八月吉日」と刻まれ、庚子と歳は割り書きしてある。ちなみに天保十一年は、1840年に相当する。



第10図 八窪・猿田彦太神周辺地形図



第11图 八座・猿田彦太神実測图

## 第四章 発掘資料の整理

### 第1節 整理の方針と整理作業の経過

八窪遺跡の現地での発掘は、積雪などの悪条件に悩まされたがともかく62年7月10日完了した。現地撤収後、県の文化財収蔵庫に遺物を持ち込み、発掘資料の整理をすることになった。出土した縄文土器・石器はその数およそ5000、時間・予算、さらに整理に係わる人的要因も加わり条件として満足出来る状況ではなかった。

現場では、出土する遺物が縄文土器及び石器（試掘の際確認済）ということで、遺構検出の困難さが予測された。そこで、それぞれの発掘資料は各グリッドごとに一連の番号を付し、個々の遺物についてレベルを記入した。その資料を生かすには、整理にも綿密さが求められるが、遺物の接合復元に十分な時間を割くことは困難で、また実測可能な遺物について、全ての物について実測は断念した。しかし、出土した遺物は一通り目を通したので、大きな欠落は無いものとみられる。

整理にはいつて以後の主な作業は、直ちに遺物の水洗い、注記を終え接合に入った。8月にはいり石器の分類仕分けの後、その実測にかかる。続いて8月10日より土器の実測にはいる。実測はまず農道西側のB・Cの各区よりはじめ、主な器形が出たところでその分類（パターン化）を試みる。一方、石器の実測図が出来たところでそのトレースも並行してする。8月下旬に至り、土器や石器の接合が進んだ段階で、遺物の接合関係を記録に留める。8月31日から再び残りの石器の実測にはいり、それが10月中旬迄かかる（この作業は9月21日より半月間緒方訪中のため中断）。10月14日より農道東側出土の土器の実測にかかる。何しろ土器の量が多いので、実測可能な破片（小片を除き）を手あたり次第に図化する。11月上旬殆どの遺物の実測を終わる。またこの頃、トレースについて現場での測量・その他の実測図についても完了、引き続き土器のトレースにはいる。

これからの整理の作業として、遺物のトレースの他、出来上がった図のレイアウト、文章執筆がある。このうち報告書執筆は11月11日にはじめる。遺物の接合について、図化後それぞれの破片が接合し、改めて図を取り直すなどの不手際もあったが止むを得ない処置であった。

土器や石器の接合資料について、同一個体の分布、即ち破片の分散状況は整理作業の過程でとくに興味をひいた。接合破片の上下の、主に土層との関係、横への空間的広がり、遺跡における遺物の在り方を物語るものとして重要である。時間的制約の中で全ての接合資料を取り上げる余裕がなく、「五、調査の成果」の中で項目を挙げて取り扱うことにした。

## 第2節 八窪遺跡出土遺物

八窪遺跡の発掘調査により多数の遺物が出土した。遺物は縄文土器をはじめ、同時代の石器及び炭化したドングリがある。さらに少量ではあるが弥生土器片も出土している。以下これらの遺物について説明したい。

### (1) 土器 (第12~35、47図)

#### 縄文土器 (第12~35図)

八窪遺跡における縄文土器の出土の状態は付図1・2の示すとおりで、土層層序のうえから2層下面~3層にかけて出土した。土器はすべて破片で、しかも小破片が少なくなかった。それらの破片は整理の際接合し、実測のうえ図化したのが第12~35図である。

ここに図示した各土器はそれぞれ個性があり、何れも特徴をもっている。いうなれば皆違うということである。それでは実際のでなく、図毎に観察表でも付けたらとも考えた。器形・文様はそれなりに判るとして、胎土の状態・器面調整についてとくに変わったもの以外似たりよったりのものが多く、相対的・比較的の表現に頼らざるをえない。土器の焼成も同様で、土器の色調にいたっては雑多で、黒褐色・暗褐色・褐色、さらに灰~灰褐色などの表現をしても言現わすことは困難で、時には土器の部位によっては斑模様であったりしている。極めて限られた時間のなかでは詳細な表作成は無理とみて、簡単な表の記載に止めた。

そこで、先ず土器の器形・文様(施文)の特徴から幾つかのパターンに分類し、とくにその個体の特徴については説明を付け加えることにする。分類にあたり、ここではあくまで便宜的な説明用語のつもりで使用した。

以下まず分類規範について説明し、ついで個々の遺物の特徴等について述べたい。土器の口径等の計測値や各土器片の出土地点については表としてまとめた。

## 深鉢

### 分類 I (第12図)

ここに分類されるのは、いわゆる磨消縄文を施文した土器とした。一般的に口縁部は外反し上端が波状になる。口縁の上縁に沿って文様帯があるが、文様は数条の沈線と線枠のなかの縄文からなっている。頸部はしまり、頸と最大胴腹部との間に沈線と縄文とからなる文様は磨消されている。またこの種の土器の器面調整は精製磨研である。

第12図1~20に図示した土器がそれで、1~6、8、9以外の土器には磨消縄文の施文がないが同類とみてこの中に包括した。この中、1~3、7、10~16、18~20は口縁部で、その他の図は頸部から胴部にいたる文様帯である。ここにあげた土器はいずれも破片で、全体像の把握はできないが、口縁部は波状をなすことが考えられる。口縁部に1~3条の沈線があり、頸

部並行沈線文と連点文が(6、8、17)みられる。6の頸部文様帯の下位にはX字形の文様が確認される。

#### 分類 II (第13~22図)

ここに分類する土器は比較的大型の器形のものが多い。底部は比較的小さいが安定した上げまたは平底である。最大胴腹部に稜線がつき、その上位に一条の沈線をめぐらすことがおおく、中にはつまみ出しの突帯をもつものもある。胴から口縁への移行部はゆるく内反りになり、口縁部になるにしたがい外反りになる。口縁部に文様帯をもつものと、単にゆるく外反するものがある。この違いをもとに、ここでは前者をII a 後者をII b として分類した。これらの土器の器面は、概ね精製磨研である。

図示した土器の口縁部に文様帯のあるのをII a (21~60)とし、すんなり立ち上がり文様帯のない土器をII b (60~89)とした。口縁部欠失によりその何れとも判別困難なものを単にII (90~116)とした。

II a の口縁部には2~3条の横への凹線または沈線があり、破片からの図示復元であるため全てについて当てはまるかは明らかでないが、文様帯上に1~2個の凹点のつくことがある。31、59、60(波状口縁)は他のII a とした個体と形が異なるが、同類の中の変形としてII a の中に集約した。II a の頸部は内反りしながら肩部にいたり、外に反りながら再び開くが、最もひらいたあたりに僅かな稜線がつく。そして窄まりながら底部にいたる。肩のうえには一条の沈線又はつまみ出しの突帯がくる(52、54)のがある。

II b は概ね口縁部が外反しながら直上する。個別的にみれば口縁端は平らなもの、尖るもの、まるみをもつものの変化がある。頸部以下底部にいたる形はII a と大差がない。

これらIIの中に包括した土器の口縁部径と肩部の径はほぼ同一か、幾分肩部の径が大きい。器面は磨研され、焼成良好、色調には個体により黄褐色~黒褐色、または灰黒色と幅がある。

#### 分類 III (第22~25図)

ここには従来「粗製土器」と呼ばれている土器を取り扱った。この名称が必ずしも適切であるとは思わないが、他に適当な語彙がないのでそれに従った。IIIにあげる土器は一般的に器面調整は粗く、とくに外面粗豪である。しかし、中には内側口縁近くを磨研したのものもある。器形の特徴も一定せず、このうち浅鉢とみられる個体についてはそちらにまわした。

117~130に図示した土器をIIIとしてまとめた。器面はおおむね横方向に粗く調整しているが、中には118、119、121のように内面が平滑なものもある。

117の3点は同一個体とみられるもので、117-1は口縁部である。口縁部上端に凹点文が確認されるが、この種の施文技法は一般的に、阿高式土器にみられるものと同一である。118、121はほぼ同形の土器で、口縁部がゆるく外反し、内側の屈曲部に稜線が認められる。胴部以下は126~129が考えられる。119は多少これらと様相を異にし、口縁下の屈曲が大きい。120、122は

118などと同類みられるが、123～125は口縁部に施文帯があり、器形が異なる。これらはII aの口縁部の文様とも違って、沈線の数で5～6条ないし9条と多い。130は器面が粗いが、特徴としてII類にちかい。

#### 分類 IV (第25図)

分類するにあたり、一団体一類というのは分類の性格上極力避けねばならない。群の中でのみ個としての存在が保証されるからである。分類IVに類別した土器はそういった誇りを免れないが、今のところ別にてだてがないので項目としてとりあげた。

131がそれで、器体は口縁部に向かって椀状に膨らみをもつてのびる。器面調整のよい黒色磨研土器である。

### 浅鉢

#### 分類 I (第25、26図)

ここに取り上げる土器の特徴としてまず口縁部外側に文様帯があり、文様は太めの沈線が数条横方向に引かれる。図の多くが破片からの復元であるため、すべての土器がその様になるか定かでないが、口縁部上縁の一部が突出する。そして文様帯には1～2個の凹点文がつくことがある。口縁部から胴部にかけて内反りにゆるくカーブし、再び外に向けて張出しシャープな稜線をつくる。稜線上にはさらにつまみ出しの突帯がつくものもある。この種の土器の器面はよく研磨され、なかには精製磨研で器面に滑沢を帯たのが多い。また器面の色調は暗褐色～黒褐色と個体により幅がある。

132～153が分類Iとした土器である。図の中、144、147、149は器形を知るのに好都合である。口縁部は上に立ち上がり文様帯となり、ここに凹線文または沈線文がつく。破片のなかには文様帯に凹文をつける個体(133、136、142、151)が確認される。また口縁の一部が突出する個体(136、140、146、147、148、149、151、152)があるが、浅鉢I類としたすべての個体がそうなるか定かでない。

#### 分類 II (第27～30図)

Iに分類した土器は胴部に稜線をもつが、IIにあげる土器は底部から口縁部にかけて大きく外反し、口縁部にいたり上方に屈曲する。その立ち上がりの状態にふたとおりあって、内反するかたちのものをここではII aとした。その他、口縁部に向かって外反するのをII bとした。この仲間には屈曲部の上に段のあるものと、数条の凹線文のあるものにタイプ分けすることが出来る。ここではそれぞれII b-1、II b-2とに分類した。ここでひとこと付言すれば、口縁部の立ち上がりの状態と施文技法との間に相関性がみられることである。即ち、II aの文様帯には沈線文であることが多い。

154～163に図示した各土器がII aである。これらの土器は口縁部への立ち上がりが直または

内反ぎみになり、口縁部上端内側にまるみがつく。器の大小により立ち上がりに1.5～2.8㎝と幅があるが、その外側が文様帯となり2条の沈線文がある。器面はいずれも精製磨研され、155には滑沢がある。

164～173をⅡ b-1とし、174～202をⅡ b-2として扱った。Ⅱ b-1は口縁下屈曲部の上に段がつく(172は小破片のため明瞭でないが173の例からして段のあることが推測される)。このうち172と173には屈曲部の上に一對の凹点文がつく。また169～171には段をはさんで羽状文がまわっている。ここに図示した164と165は、焼成・胎土・器面調整が似ていて同一個体の可能性があり、同一個体であった場合口径の違いは歪みによるものである。Ⅱ b-2は口縁下に数条の凹線文のつく土器であるが、この中の174、176、177、180、192、195、196、199には屈曲部上に凹点があることから、他の個体にも凹点文のある可能性が高い。Ⅱ bにあげたいずれも黒色磨研土器で、黄褐色～黒褐色の色調の器面で、羽状文施文の土器などは堅緻な焼き締めである。

#### 分類Ⅲ(第30～32図)

Ⅲに分類したのは底部からゆるく立ち上がり、一旦胴腹部のあたりで屈曲し、再び口縁部にかけて外反りになってのびる。ここで口縁部にいたり立ち上がるが、くびれが一見玉状の断面となる。ここでは、胴腹部から口縁下にかけての立ち上がりの状態からⅢ aとⅢ bとに分類した。Ⅲ aはゆるく、しかも長い立ち上がりのものを、Ⅲ bは短かく急な立ち上がりのもとした。

203～216をⅢ aとして分類した。210～213によく器形の特徴がでていいる。底部からゆるく立ち上がった器体は一旦小さく屈曲し、再び外反りのゆるいカーブをかきながら口縁部にのる。口縁部で立ち上がり、玉状の口縁となるが、このさい内側に段と外側に沈線状の区切りができる。いずれも黄褐色～黒褐色の精製磨研土器で、214、215には滑沢がある。

217～228をⅢ bとした。Ⅲ bはⅢ aと口縁下の状態が異なり、立ち上がりが短かくしかも急である。この中に取り扱った土器の細部の特徴にいたっては幅があり、必ずしも一様でなく、内面の口縁下の屈曲部に稜線のでる222～224、227、228と、まるみをおびる217～221と225、226の違いがある。Ⅲ bの器面調整、色調はⅢ aと大差がない。

#### 分類Ⅳ(第32、33図)

Ⅳに分類した土器も完形資料がなく、底部の状態は定かでない。しかし、他の八種遺跡出土の多くの土器と同じく、一部には丸底のものほか上げ底状を呈するものとみられる。この種の土器は豊かな胴部、そして頸が一旦しまり、口縁部にかけて外開きになってのびる。口縁部は単純なものであるが、ここでは波状の口縁の土器も含めることにした。

Ⅳに分類したのは229～233で、何れも破片からの図示による復元であるが、口縁部が波状になる231とそれ以外の平坦口縁がある。器面は231の外側がいくぶん粗いほか、概ね黒色磨研の

精良な土器で、暗褐色～黒色を呈する。

#### 分類 V (第33図)

この中に237と238の二点の土器を取り上げた。これらの土器はそれぞれ異なった特徴があって、分けて考えてもよいが変移の幅が小さいとみて一つに包括した。底部不詳、口縁部にかけてすんなりのびる。口縁部は内側にカーブするだけの単純な器形の土器。

237は一見盤状の器形をしており、復元にあたり同一個体の破片とみられる二十数点のものがあつた。これは黄褐色～黒褐色の内外とも磨研土器。238は237に比べ深い鉢で、黒褐色の精製磨研土器である。またこの器体には煤が付着している。

#### 分類 VI (第33図)

粗製土器の浅鉢形のを分類VIとしてとりあげた。二点の土器は、破片の図示による復元から、深鉢というより浅鉢とみたほうがよさそうである。

235、236はIVに分類した土器で、内外面とも横方向の器面調整で条痕のあとが顕著でありとくに236の内面の凹凸がはげしい。235は口縁部が僅かに外開きになり、236は窄まり気味である。

#### その他 (第33図)

土器片のなかには器形の設定でないものがある。ここでは深鉢を4、浅鉢を6に類別整理したが、これらのパターンから外れる個体について「その他」として包括した。

239～250に図示した土器は小片であり、これまでパターン化した各土器ともいくぶん趣を異にしている。そこで項目として取りあげることしなかつた。

239は口縁部に起伏があり、上面と外面に文様があり、屈曲部に凹点と沈線がつく。240は波状の口縁で外面には沈線文がうかがえる。241は239に近い器形の鉢とみられ、屈曲部に押点がある。242には羽状文が、243～245には沈線文がある。また247には突帯が口縁下にまわる。

#### 鉢以外の器形 (第33図)

八雲遺跡の発掘調査により数点の鉢以外の土器が出土した。壺形や注口土器とみられる土器がそれである。

251の壺形土器はまるい膨らみのある胴部と、肩に一条の沈線をめぐらしている。口縁部はゆるく外反し、先端はとがる。器面は滑らかで黒褐色を呈する。

252は胴部がまるく膨らみ、器体には横方向に数条の凹線文がめぐり、さらに凹点が縦に並ぶ。この種の土器は他の類例からして、注口土器と見られる。

#### 土器の底部 (第22・24・34・35図)

土器の底部から口縁部まで接合できた資料は、今のところ一点もない。時間をかけて整理することになれば、接合資料のでてくる可能性は強い。ここでは図示した各資料をもとに説明したい。

115と116は底部から肩にかけての器形の状況から深鉢Ⅱに類別したものとみられ、また127と128は深鉢Ⅲに類別した粗製土器である。図示した土器の底部だけから土器の全体像を認定することは困難であるが、強いて推測をすれば255と256、さらに263・265・290も深鉢Ⅱになることが考えられる。さらに292・291・294～303は粗製土器の可能性が高い。291・292・296・298・300および302には、円盤状底部に製作技法上の特徴がうかがえる。器面の特徴から精製磨研土器とみられるものを列記すれば、253・257・261・264・270～277・280・284・286があり、これらは浅鉢となるものとみられる。

#### 弥生土器（第47図）

八窪遺跡の発掘調査により3点の弥生土器が出土した。土器は第2層の黒土層からの出土でF-6区2点、H-7区1点の都合3点である。土器は何れも小片で、第48図に図示したとおりである。1～3ともに甕形土器の口縁部の破片で、1、2からその状態がわかる。口縁上端は平坦もしくはいくぶん膨らみがある。3は上端を欠ぐがほぼ同形の土器であり、口縁下に一条の突帯が確認される。

この3点の弥生土器は、何れも中期前半に位置づけられよう。

#### （2） 石器（第37～46図）

ここに図示した石器は、排土中に採集した一部のものを除き2層下面～3層の縄文土器包含層から出土したもので、層中出土の縄文土器に伴うものとみられる。これらの石器の出土地点、計測値等については、表2にまとめた。

#### 石 斧（36～38図）

石斧は31点出土した。この中1～27は打製石斧で、残りの28～31は磨製石斧である。

打製石斧は一部（12、26）を除き安山岩を素材として製作され、剥離した原礫面を残し加工されているものが多い。石器の形もいくつかに類別することができる。草鞋（わらじ）形した大の石斧（1～5）、刃部の反対側が尖るもの（8、10）、全体の四角形のもの（11、13のほか18、23もそうか）などの特徴がみられる。打製石斧のなかに折損したのもも多く、折損状況の違いは形態とともに石斧の土掘りなどの機能を暗示するのかもしれない。

磨製石斧は3点ある。30を除き欠損しており、29は東側の排土中より採集したものである。28は折損品で、刃部を磨いて居る。石質は28が安山岩、29頁岩、30、31は片麻岩である。

#### 敲 打 器（39図）

棒状の石器が多数出土している。図示した33～40がそれで、断面三角・四角形の棒状をしており、その側端に敲打痕のあるのが特徴である。この種の石器は、出土資料を子細に調べれば他にもあるかもしれない。

#### スクレーパー（第40、41図）

石器の側端に刃のあるのをスクレーパーとして図示した。42～45がそれで、大小多様である

が何れも安山岩製である。

#### 円盤形石器 (第40図)

2点の円盤形の石が出土し、47は製品、48は未製品とみられる。47は片岩で48は安山岩である。

#### 石 鎌 (第40、41図)

多数の石鎌とみられる石器が出土した。49～59がそれで、49、50には完形品で一侧にノッチがついている。51、54はほぼ同形をしており、一侧が細くなっている。55、57はこぶりで、57の刃部には反りがある。石質は49～56、58、59は片岩で、57は頁岩。

#### 石 匙 (41図)

出土した石匙は1点、61でしかも採集資料である。安山岩、つまみがついている。

#### 鑿形石器 (第41図)

2点の鑿形の石器が出土した。いずれも小型の石器で、石器の一侧を欠いている。原礫面の一部に残すも、片麻岩製の磨製石器。

#### 磨 石 (第42、43図)

磨り石多数出土した。64～87に図示した石器がそれで、欠損品を含め14点ある。平坦な面が摩耗し、中には敲打痕のあるものもある。磨石は径6.7㎝～14.5㎝の安山岩の自然礫を利用してつくられている。

#### 石 皿 (第44、45図)

石皿5点が出土した。88～92がそれで大小(8～30Kg)の違いがあるが、いずれも安山岩の原礫を使用している。90は上面が平坦であるところから、単に台石として使用したのかもしれない。これ以外のものは上面が凹んでおり、なかでも88は両面を石皿の用に供している。石皿のうち、88と92は割れた破片が分散しており、92の場合F-5区出土の石皿にG-5区出土の石皿の小片が接合した。88の石皿については後に問題として取り上げるが、接合しただけで実に10数片になる。

#### 石 鎌 (第46図)

石鎌7点が出土した。93～99がそれで、何れも凹基無茎の小型打製石鎌である。サヌカイトまたは黒曜石を原石としており、93、94、96、98は五角形の鎌で一般的に縄文後期に出現することが知られている。

打製石器のうち、石器の機能の定かでないのがある。第38図32にあげたものがそれで、安山岩を四角形に加工調整しとくに刃部にあたる部分はない。四角い形をしたことが石器としての目的に適応しているものとみられる。

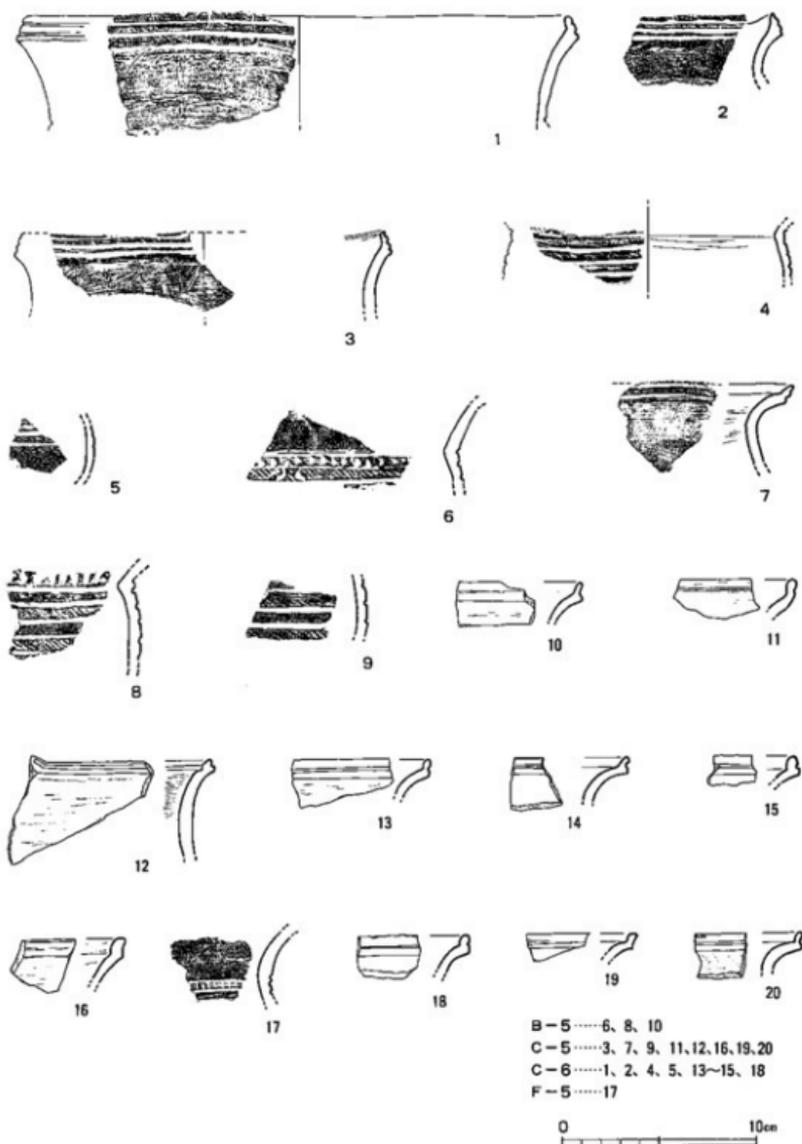
### (3) 植物種実 (ドングリ)

八窪遺跡の縄文土器包含層から多量の炭化した植物種実(ドングリ)が出土した。ドングリ

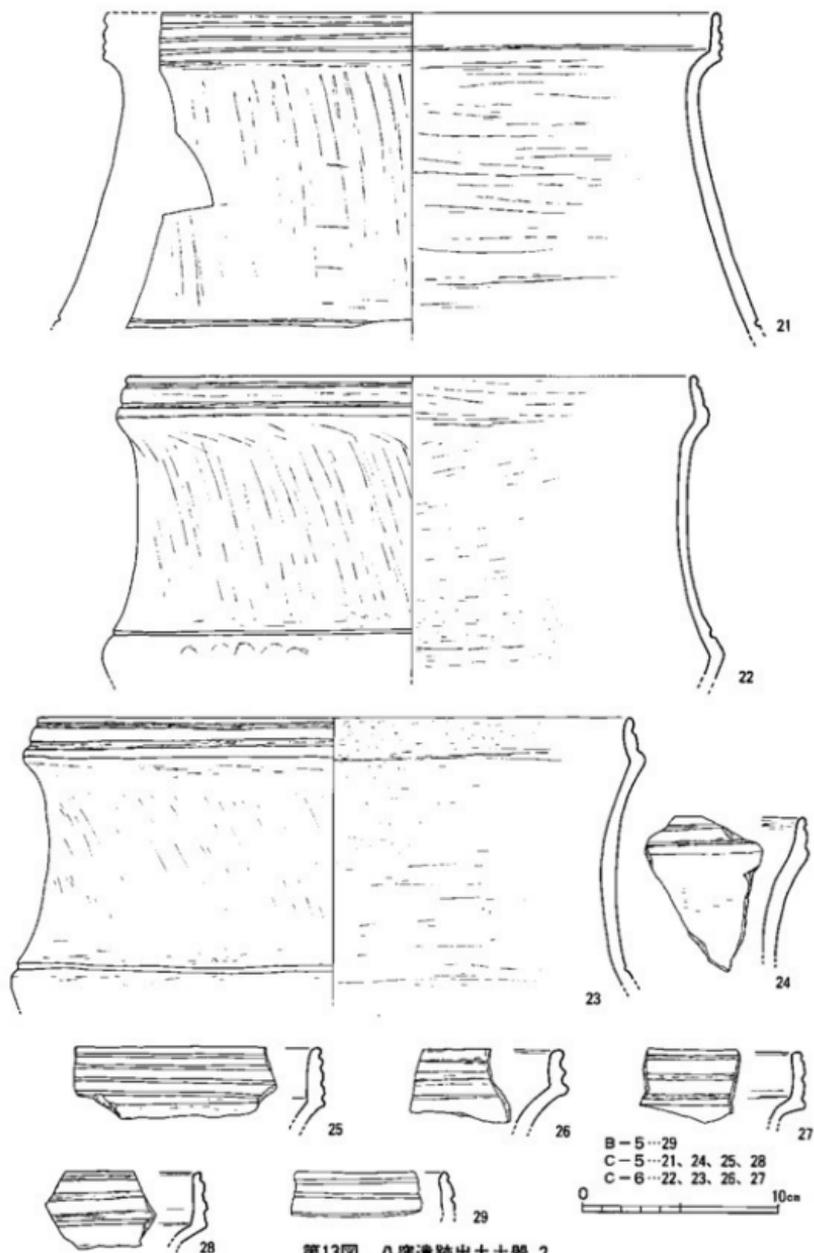
は貯蔵穴等から一括して発見されたのではなく、土器や石器と共にバラバラに出土したのでひとつぶ一粒採集した。発掘の際、潰れて取り上げ困難なものが少なくなかった。

採集したドングリは完好なもの500粒161.6g(1粒平均0.32g)で、破損品61.6gを含めると総重量222.8gであった。

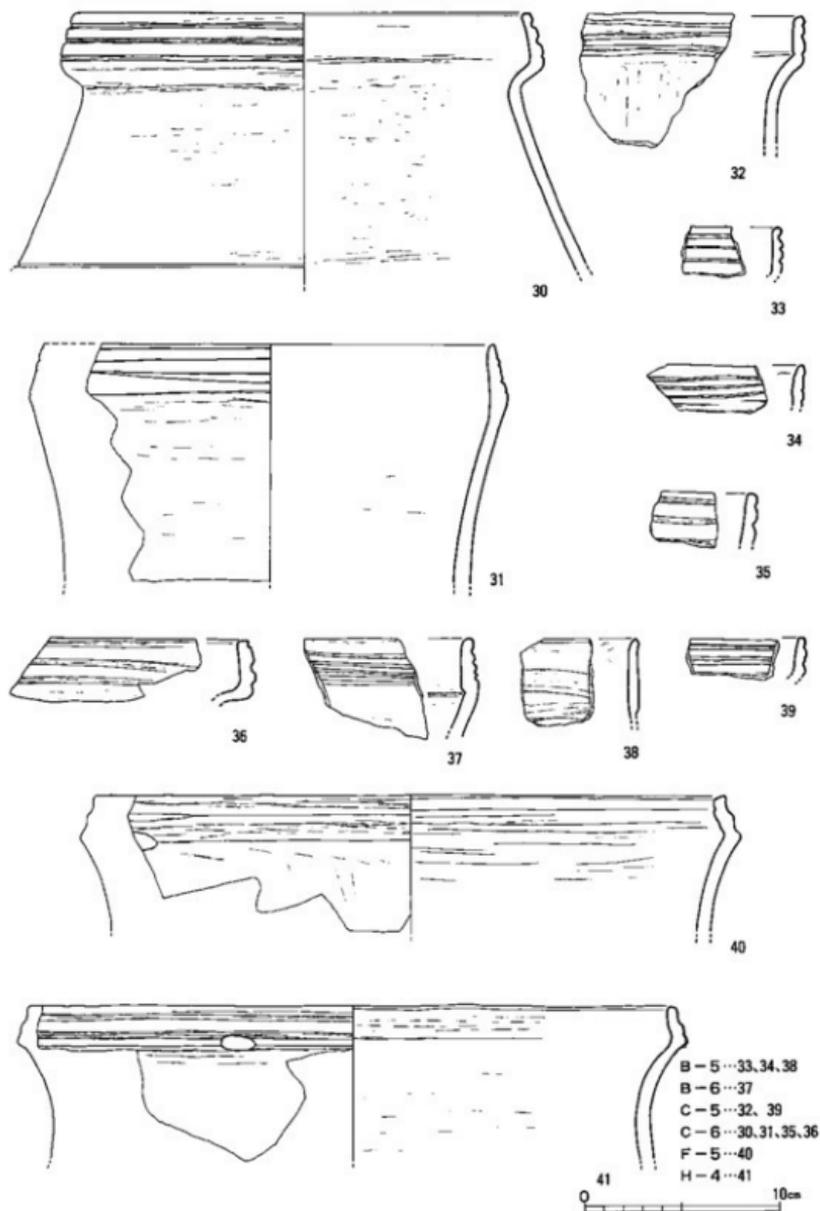
このドングリについて種の同定を熊本工業大学工業科学科の濱田善利助教授にお願いした。炭化して殻斗を失っており種の決定は難しいとのことであったが、粒の大きさ、周辺の現生種、食用になる等から「シリブカガシ」ということであった。



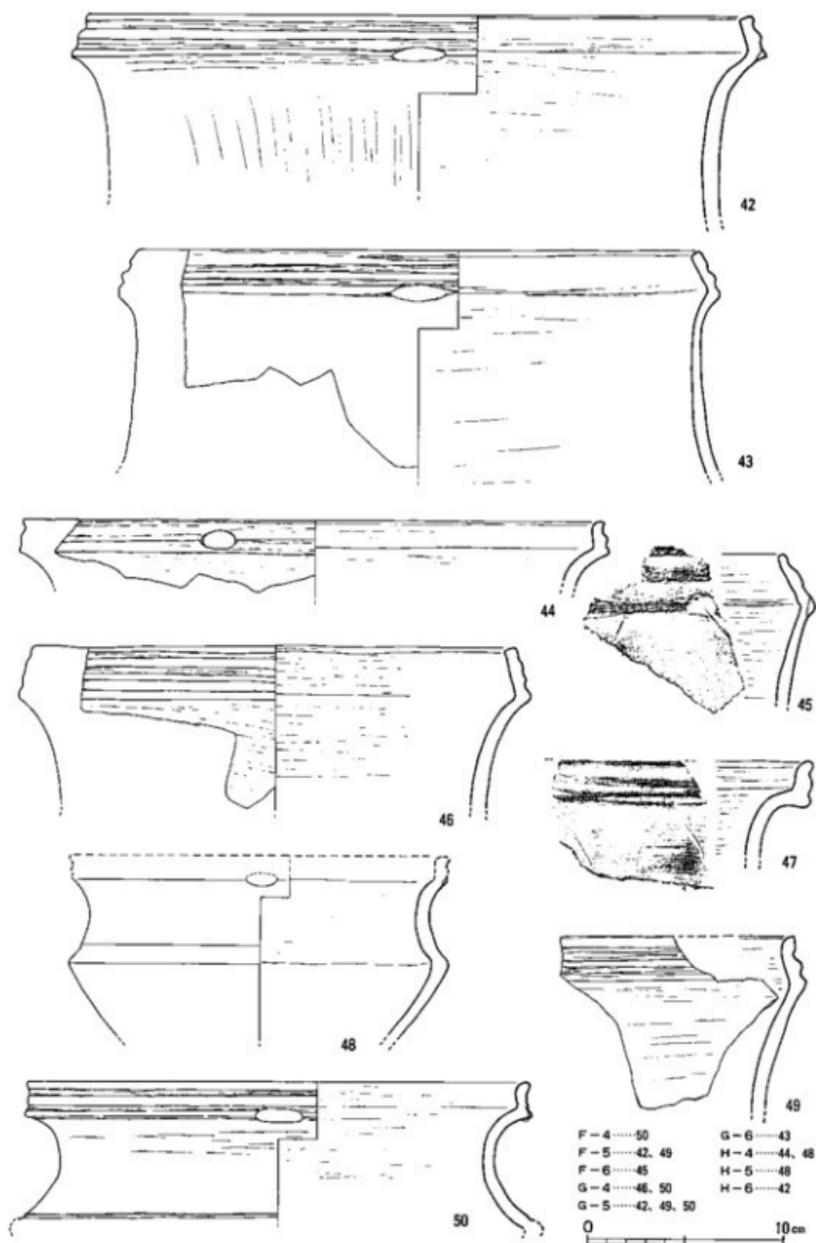
第12圖 八窪遺跡出土土器 1



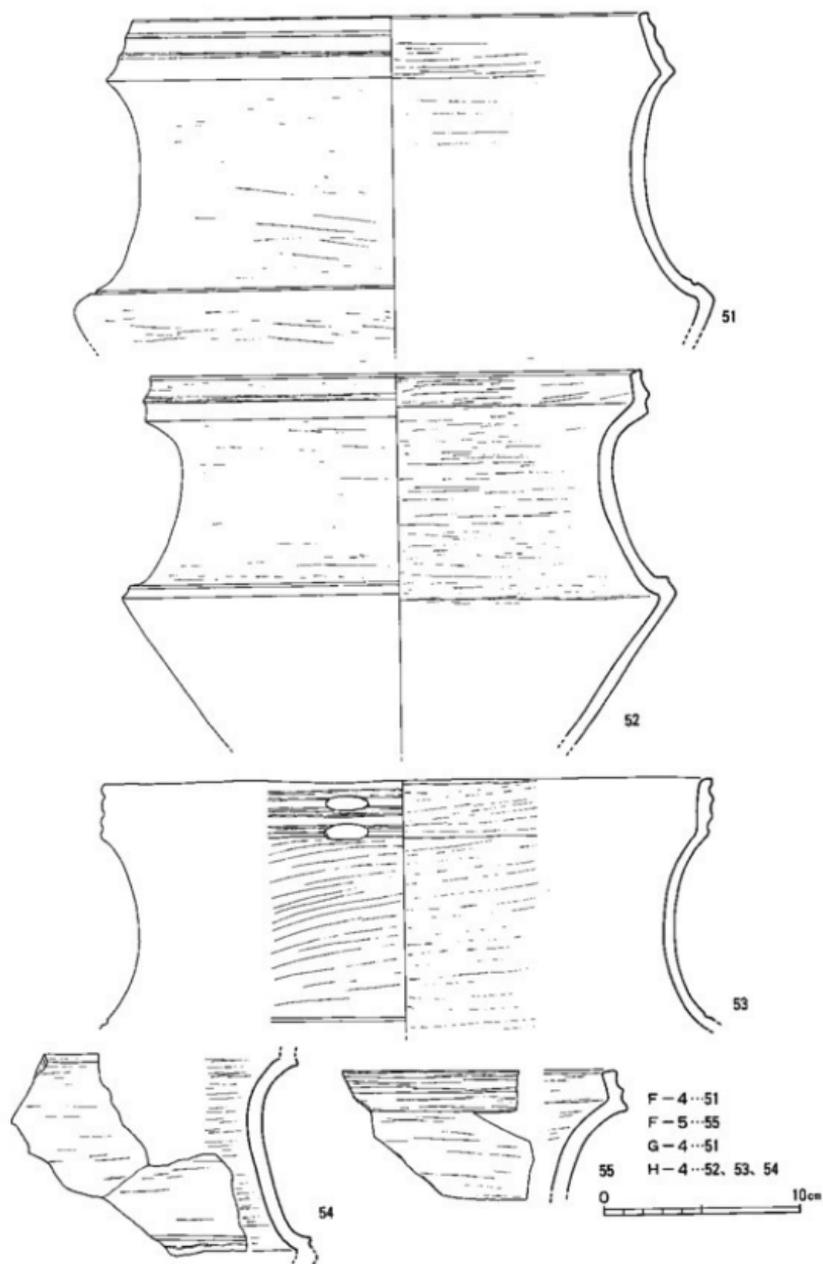
第13圖 八寶遺跡出土土器 2



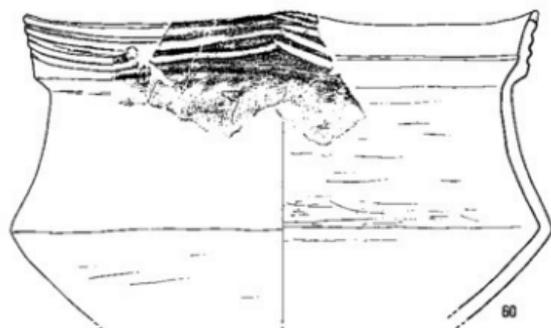
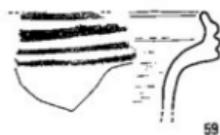
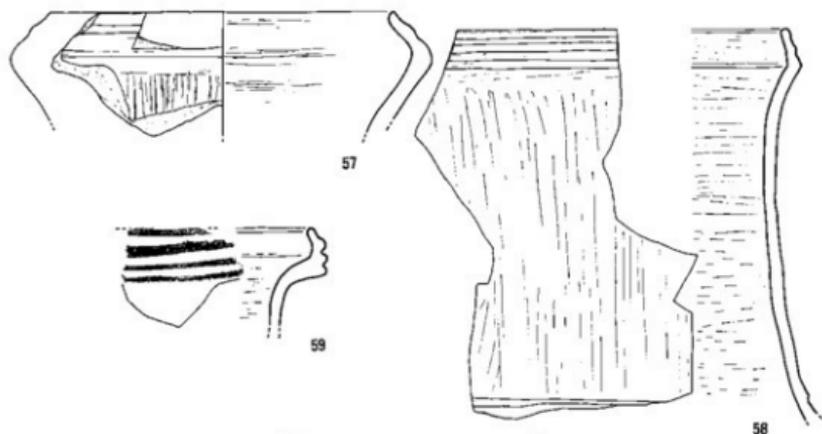
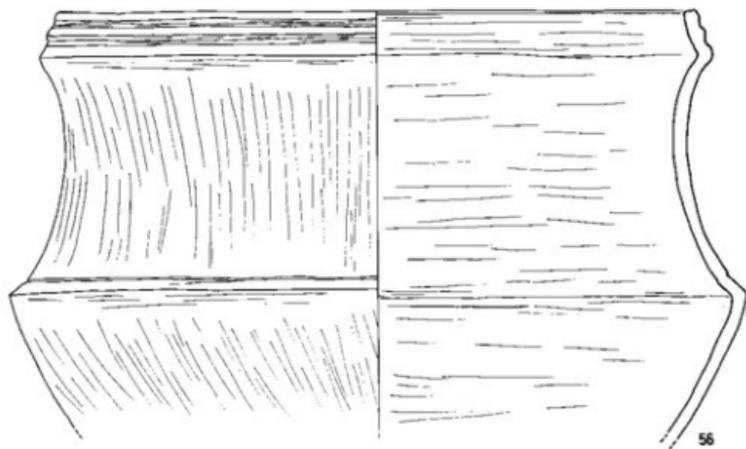
第14圖 八室遺跡出土土器 3



第15圖 八窪遺跡出土土器 4



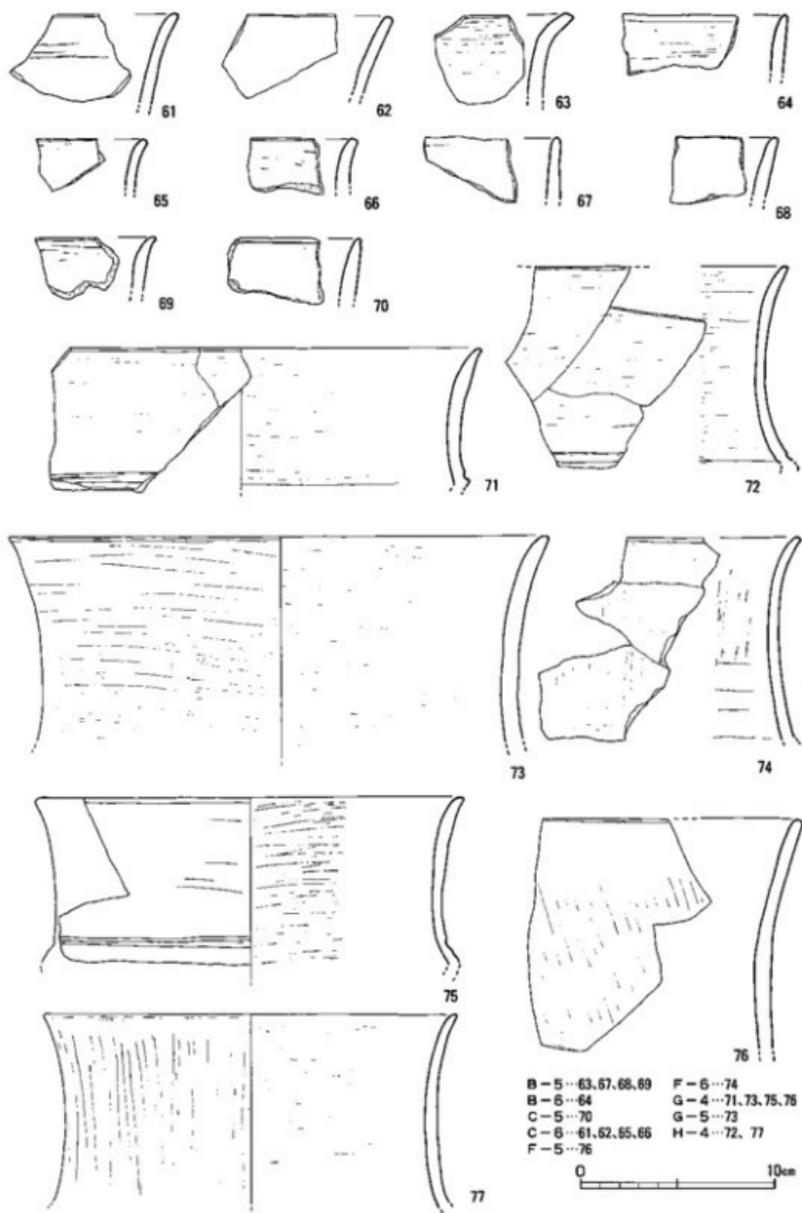
第16图 八窪遺跡出土土器 5



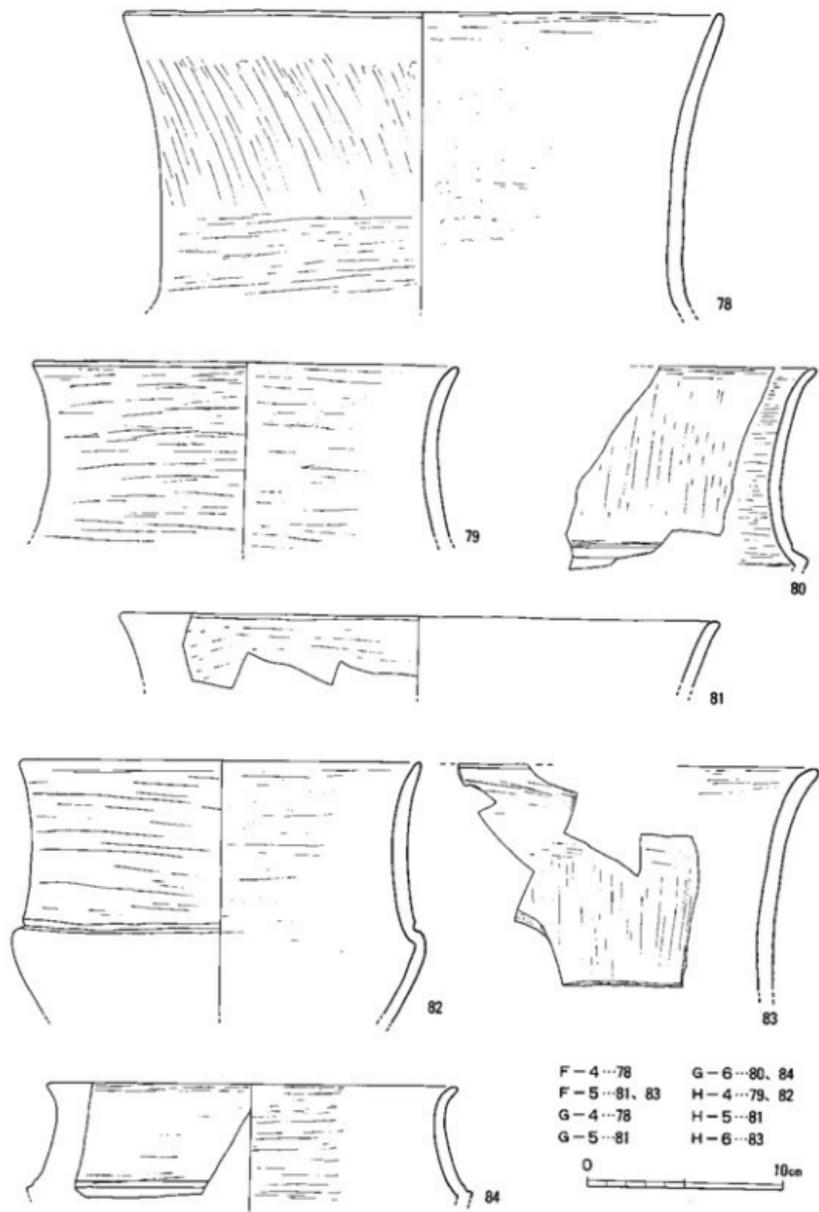
F-5.....56, 58  
 F-6.....56, 59  
 H-4.....57  
 H-6.....60

0 10cm

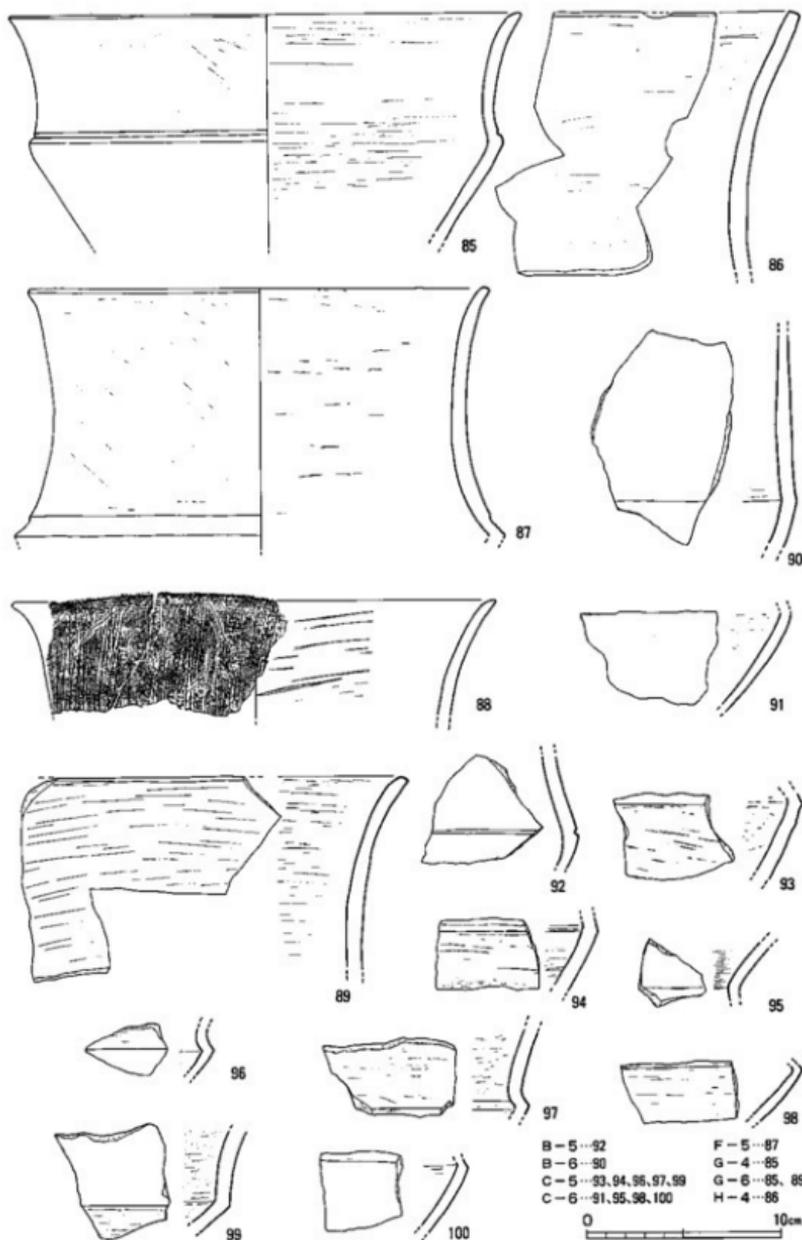
第17圖 八座遺跡出土土器 6



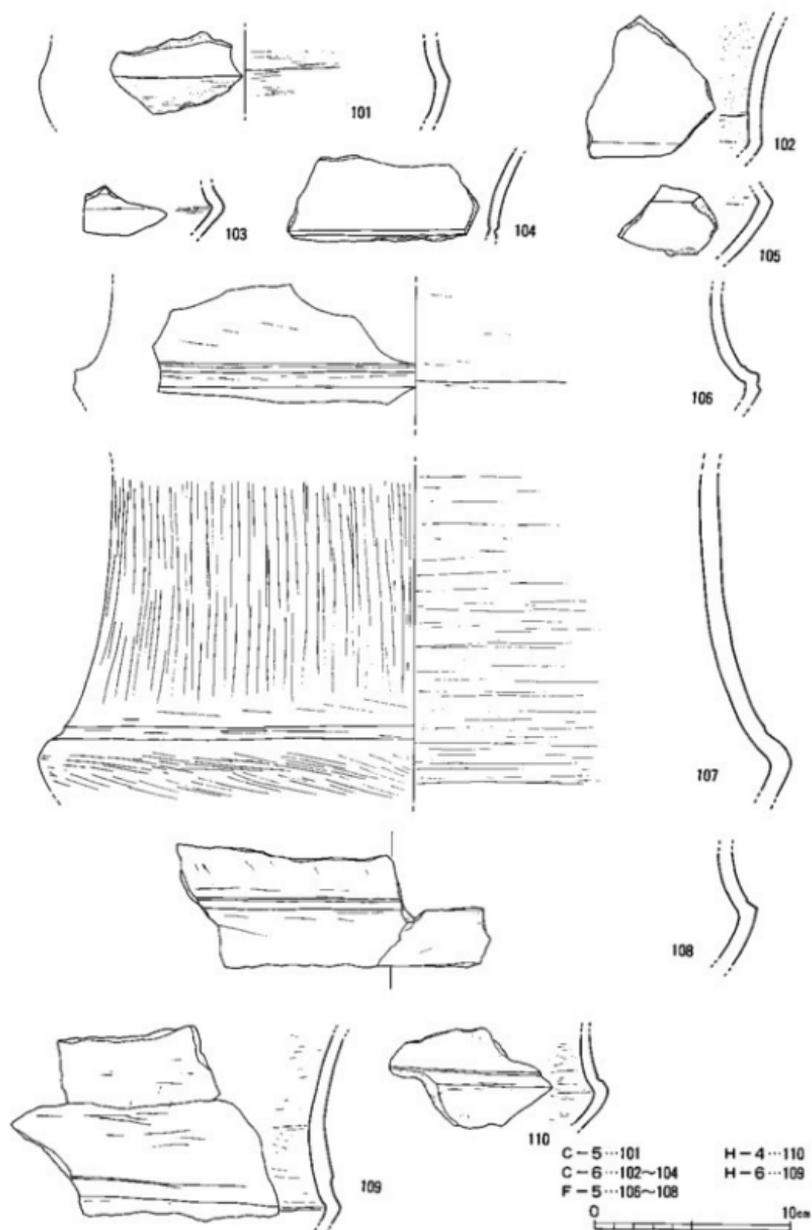
第18圖 八窪遺跡出土土器 7



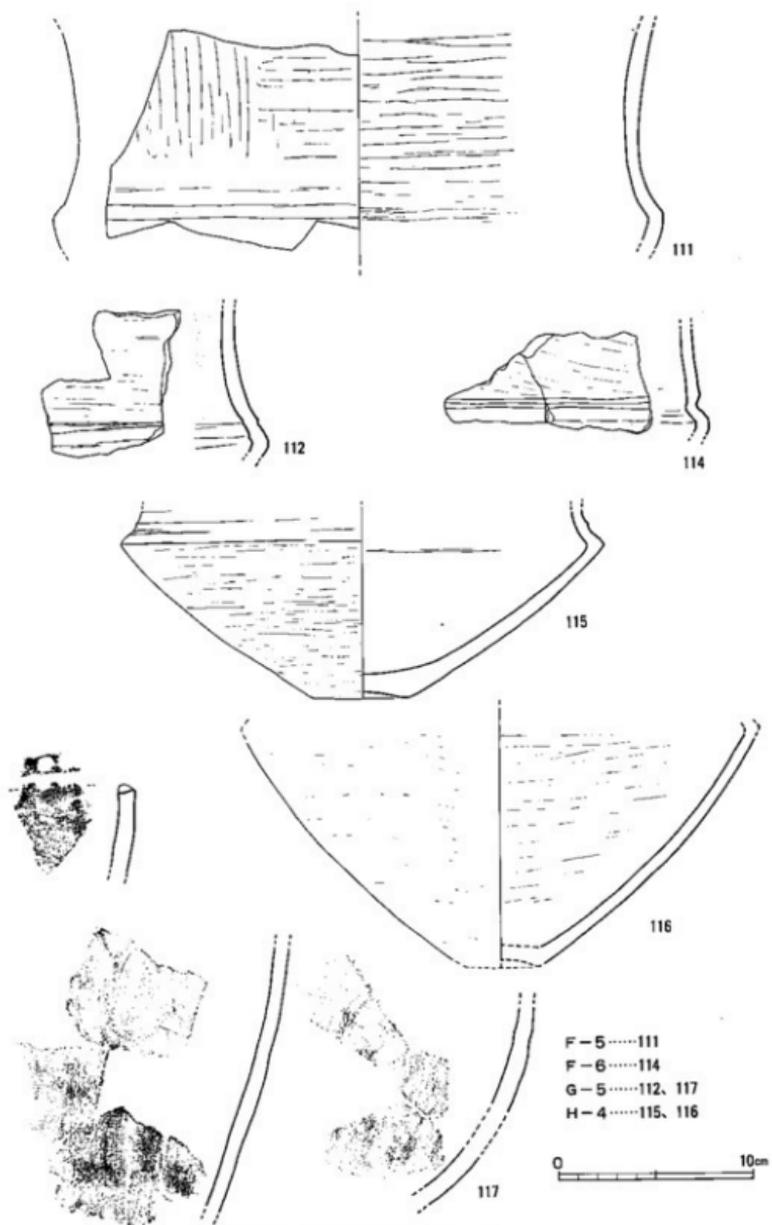
第19圖 八窪遺跡出土土器 8



第20圖 八寶遺跡出土土器 9



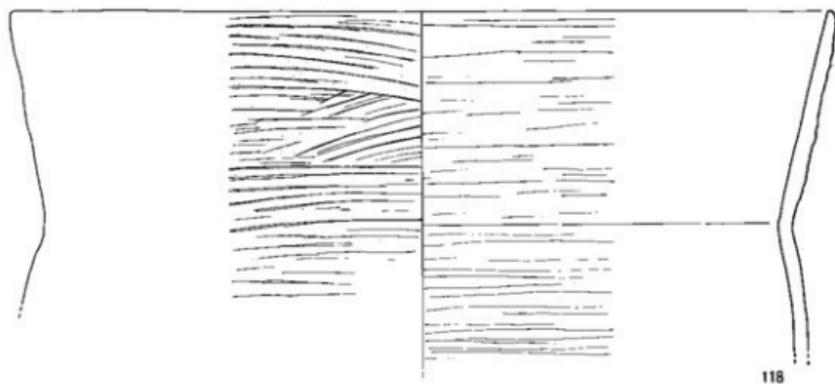
第21图 八宝遗址出土土器 10



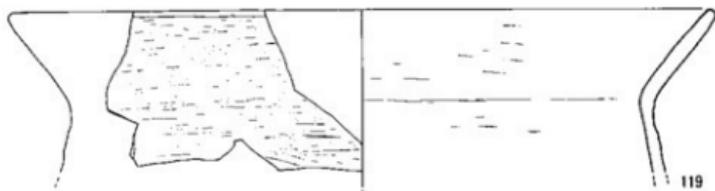
- F-5.....111
- F-6.....114
- G-5.....112、117
- H-4.....115、116

0 10cm

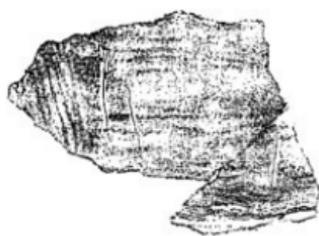
第22图 八窪遺跡出土土器 11



118



119



120



121



122



123



124

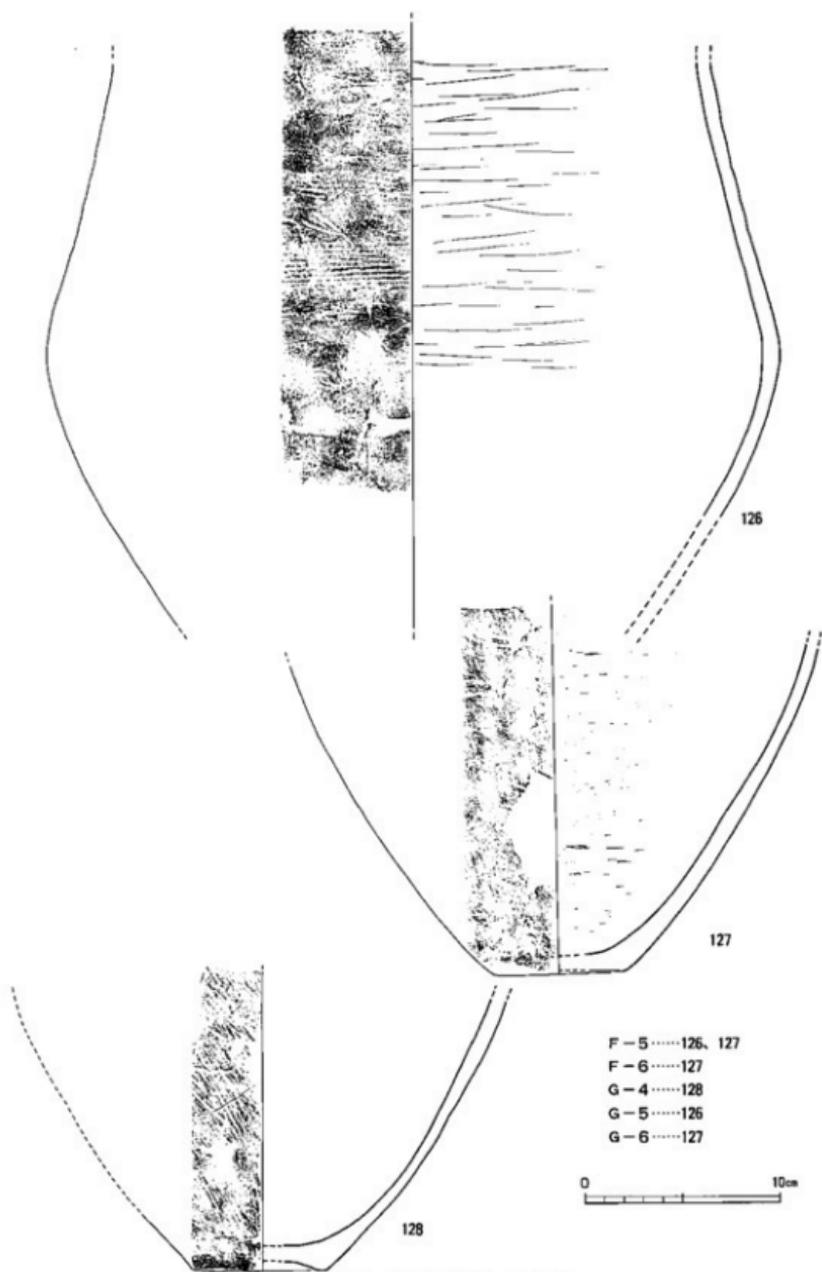


125

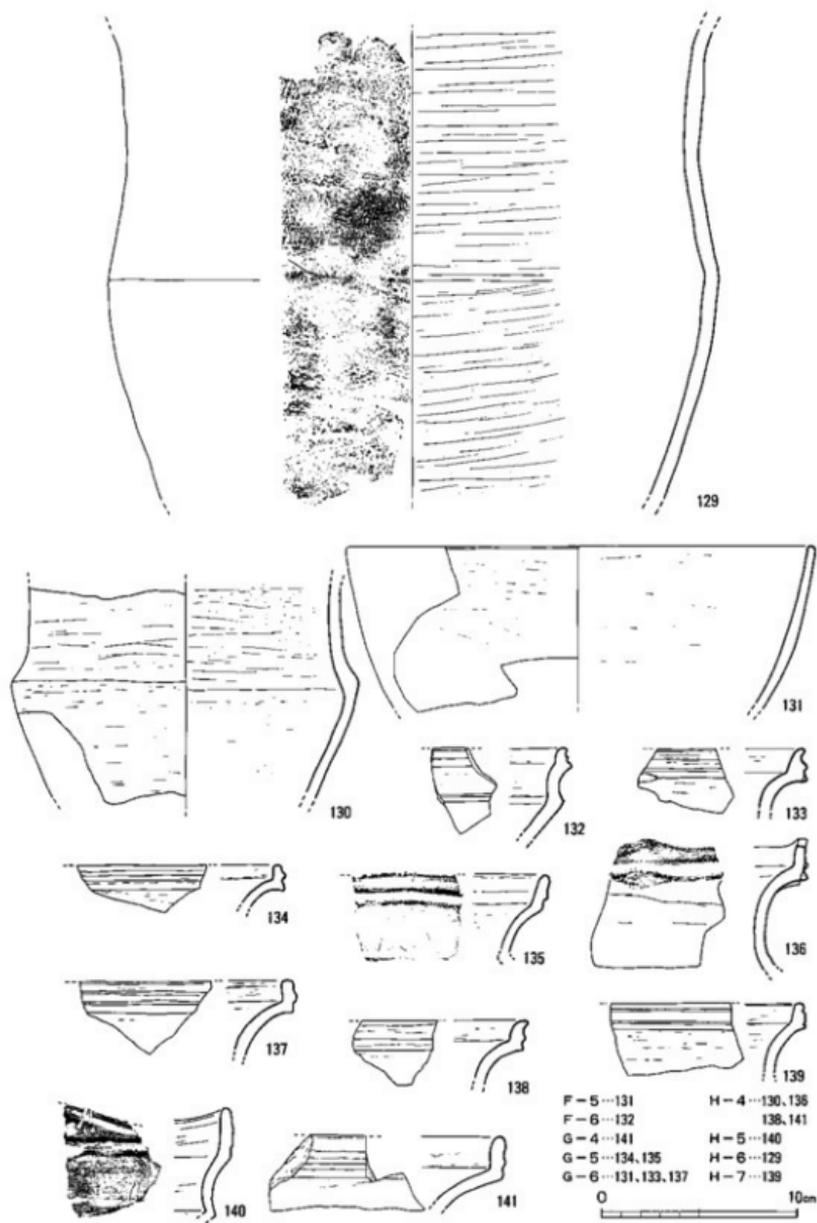
F-5...118, 120  
 G-4...121, 123, 124, 125  
 G-5...118, 119, 121, 122  
 G-6...118  
 H-5...123

0 10cm

第23图 八窪遺跡出土土器 12



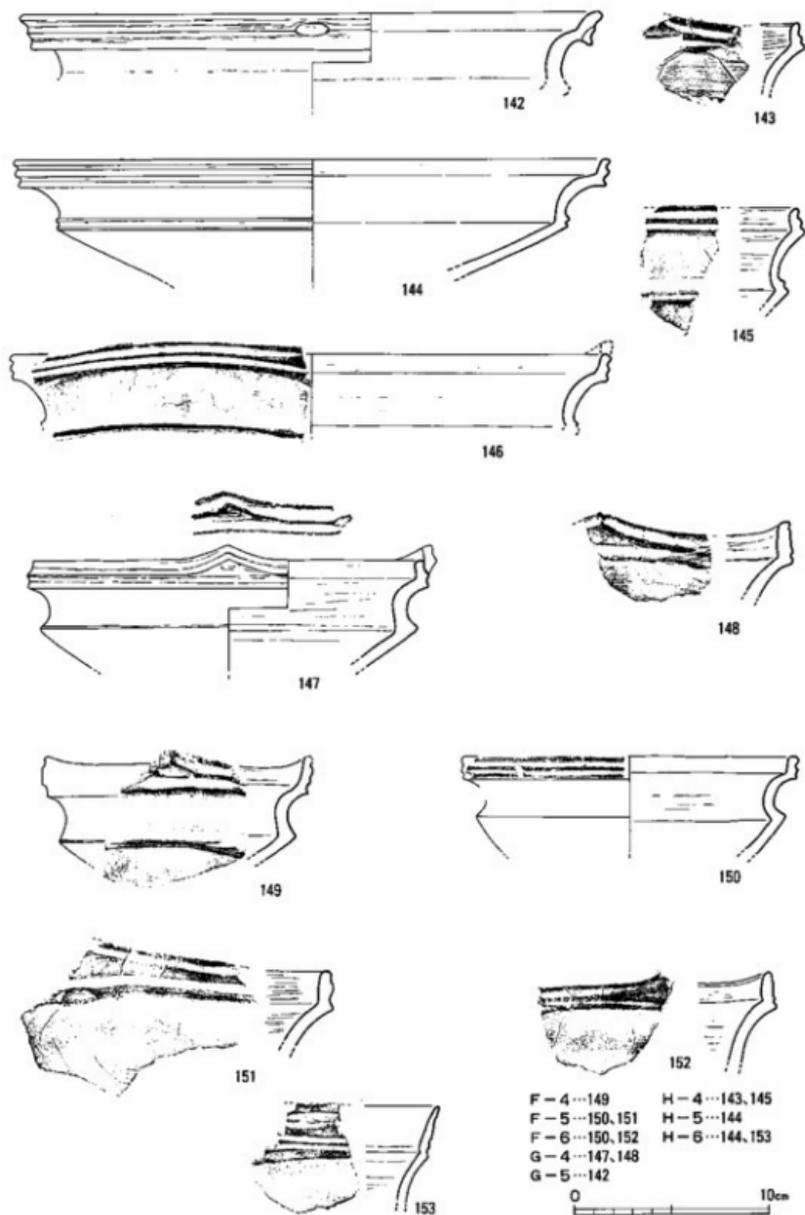
第24圖 八窪遺跡出土土器 13



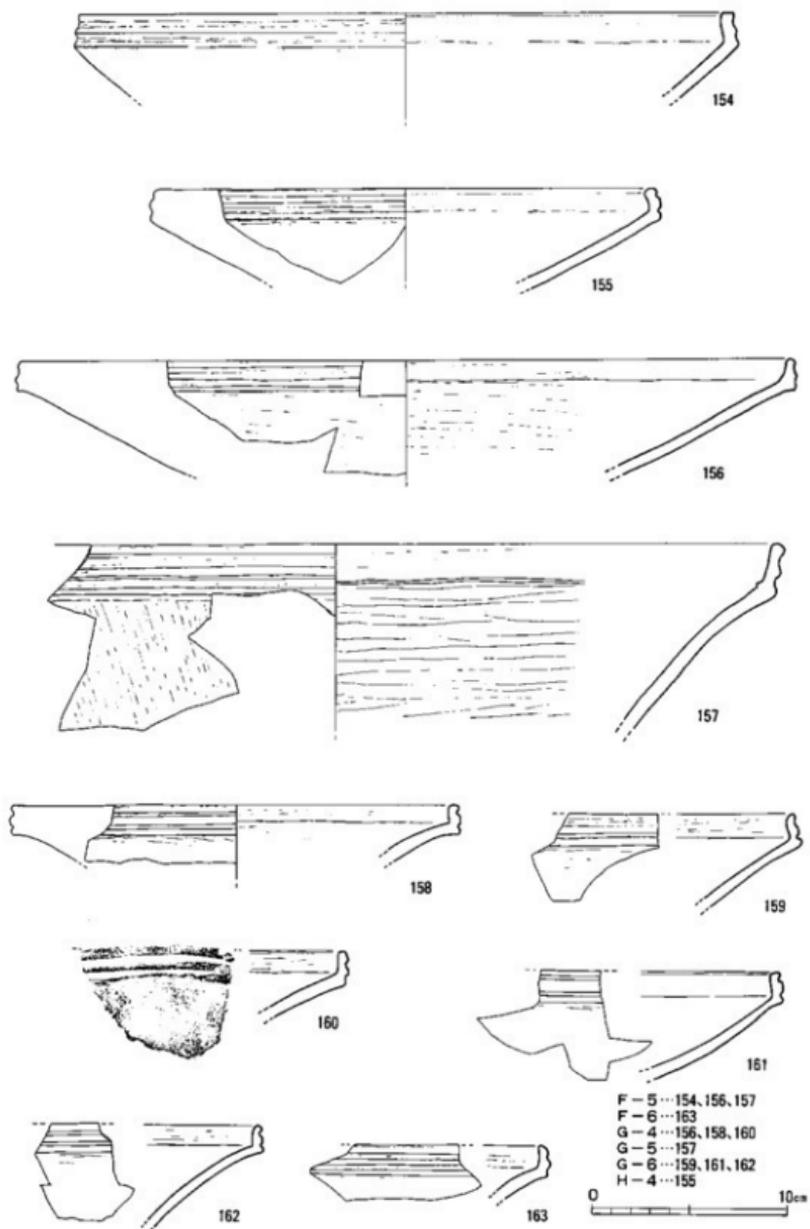
第25圖 八座遺跡出土土器 14

F-5...131	H-4...130, 136
F-6...132	138, 141
G-4...141	H-5...140
G-5...134, 135	H-6...129
G-6...131, 133, 137	H-7...139

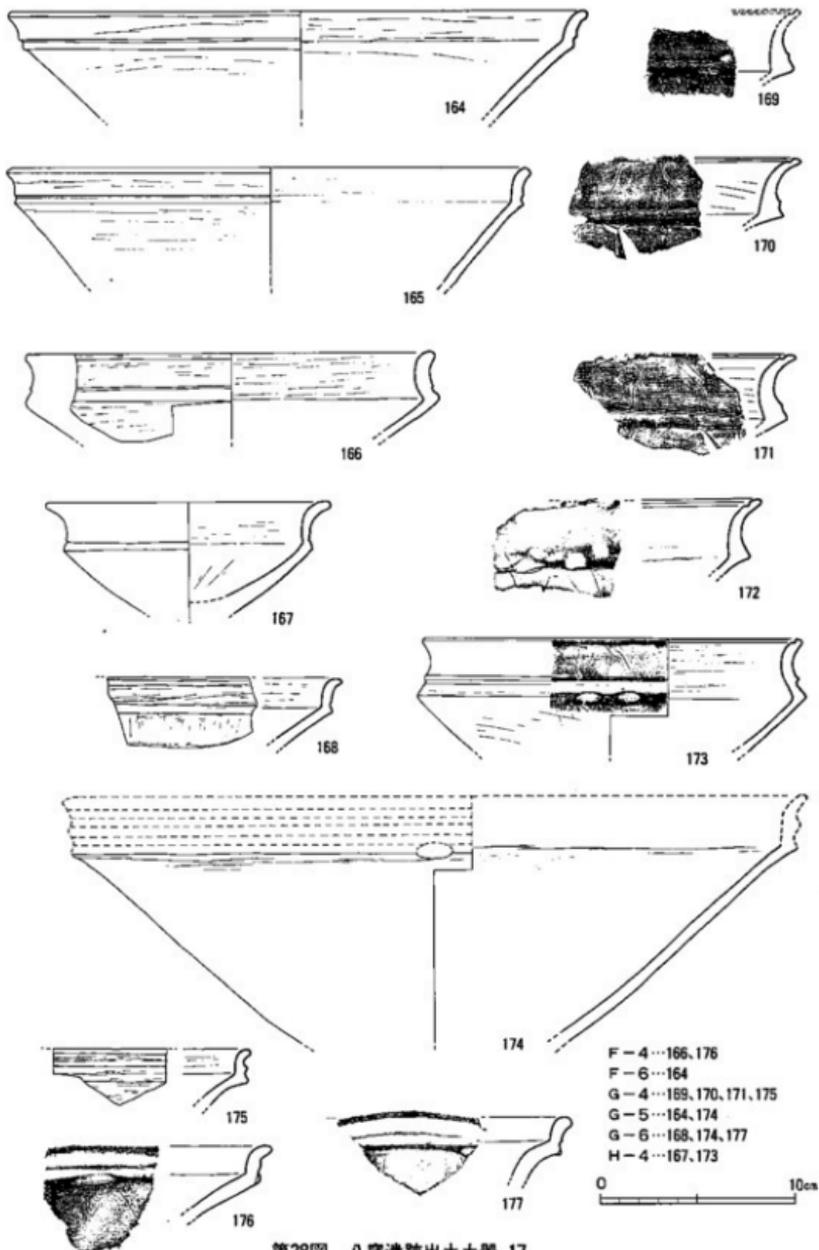
0 10cm



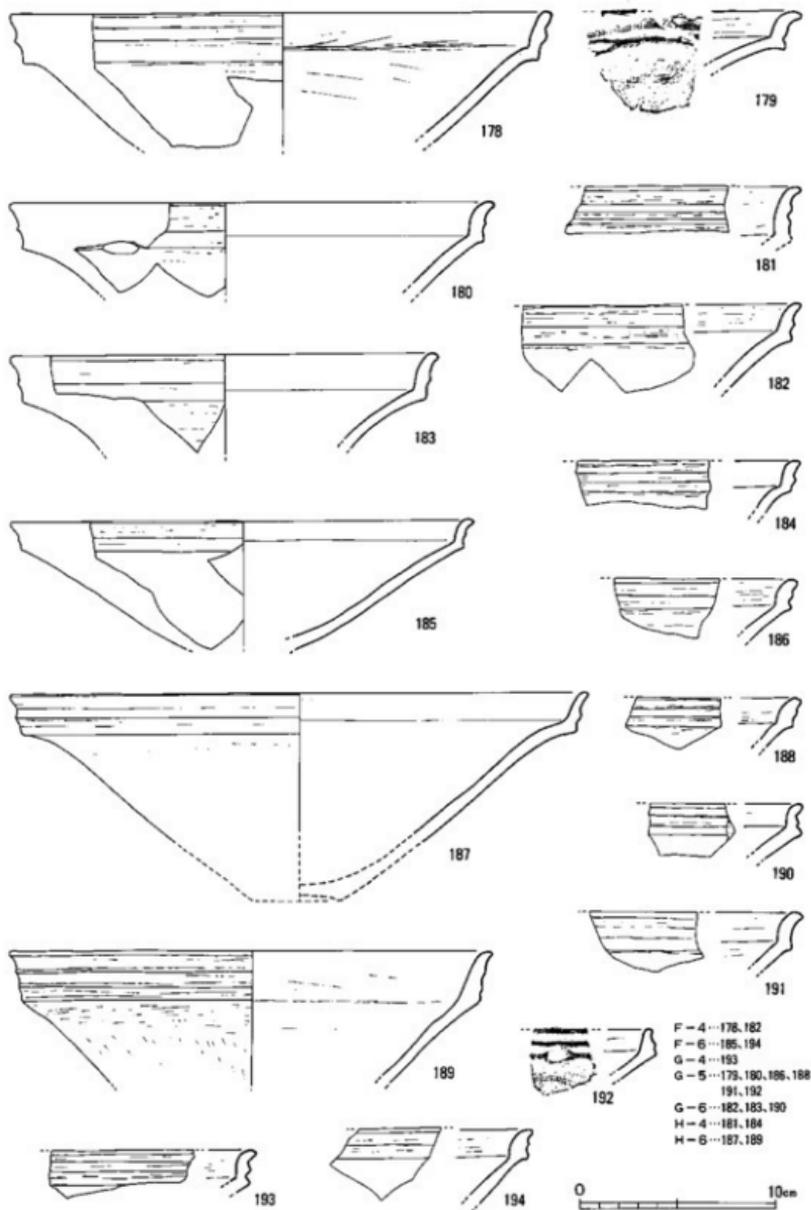
第26图 八窟遺跡出土土器 15



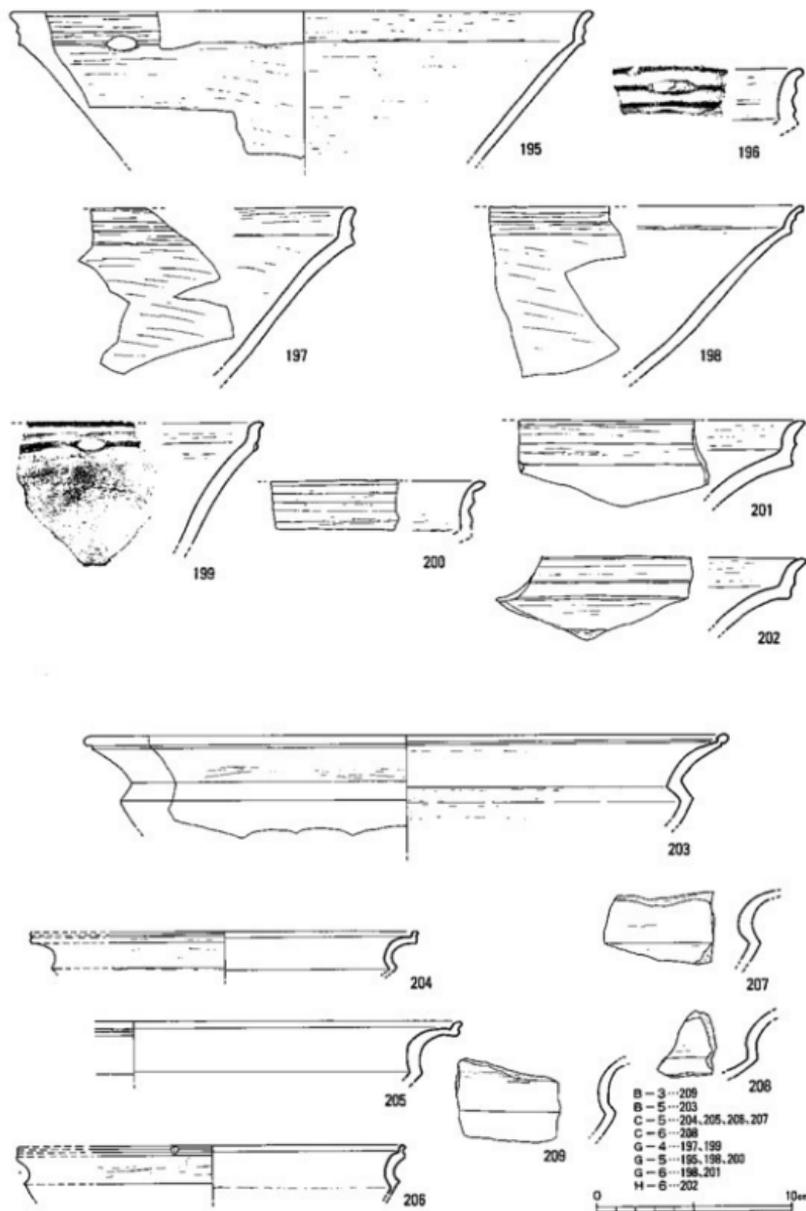
第27圖 八窪遺跡出土土器 16



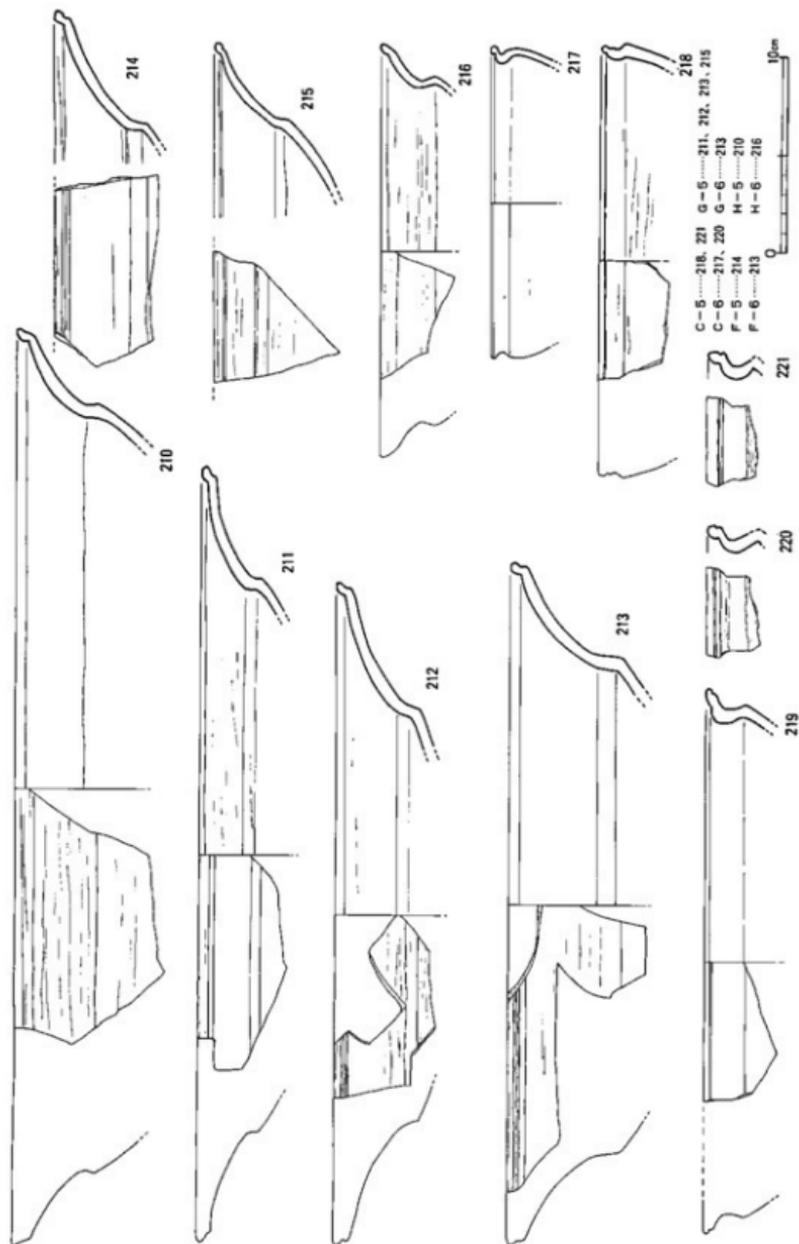
第28图 八堡遗址出土土器 17



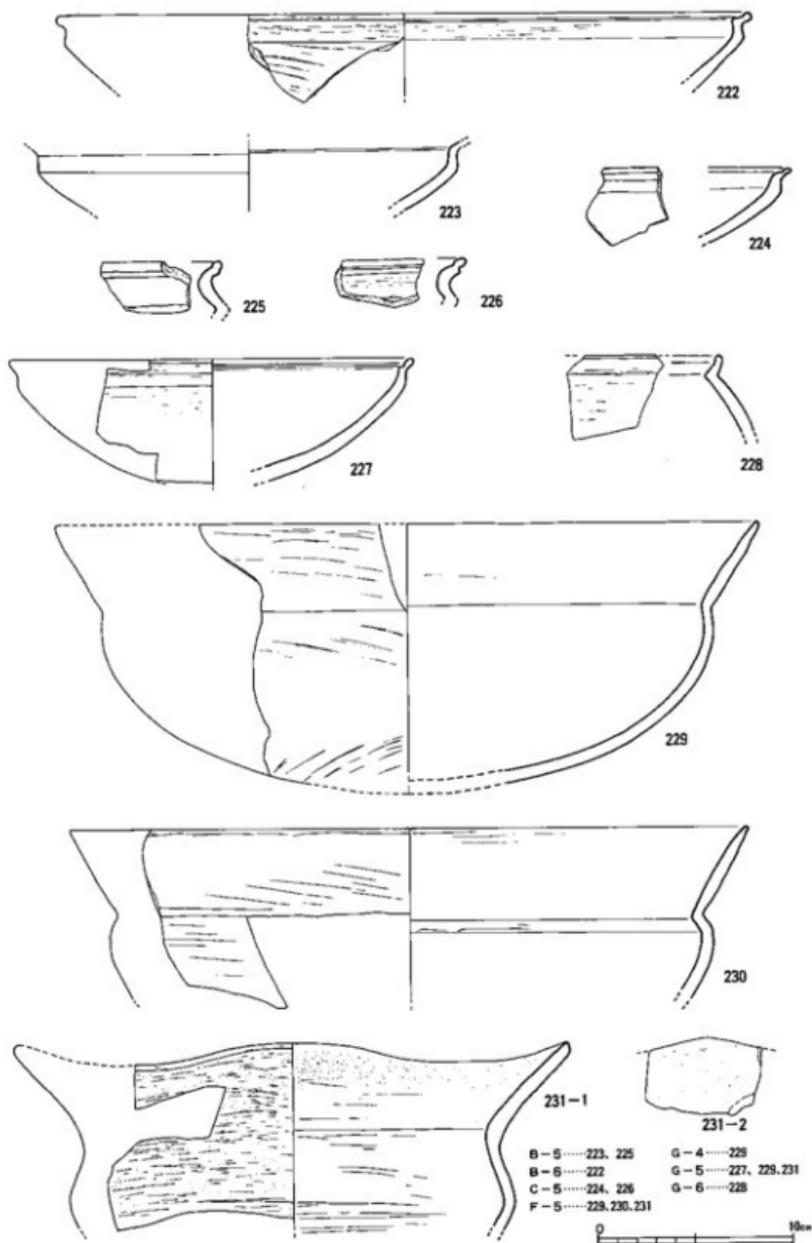
第29图 八座遗址出土土器 18



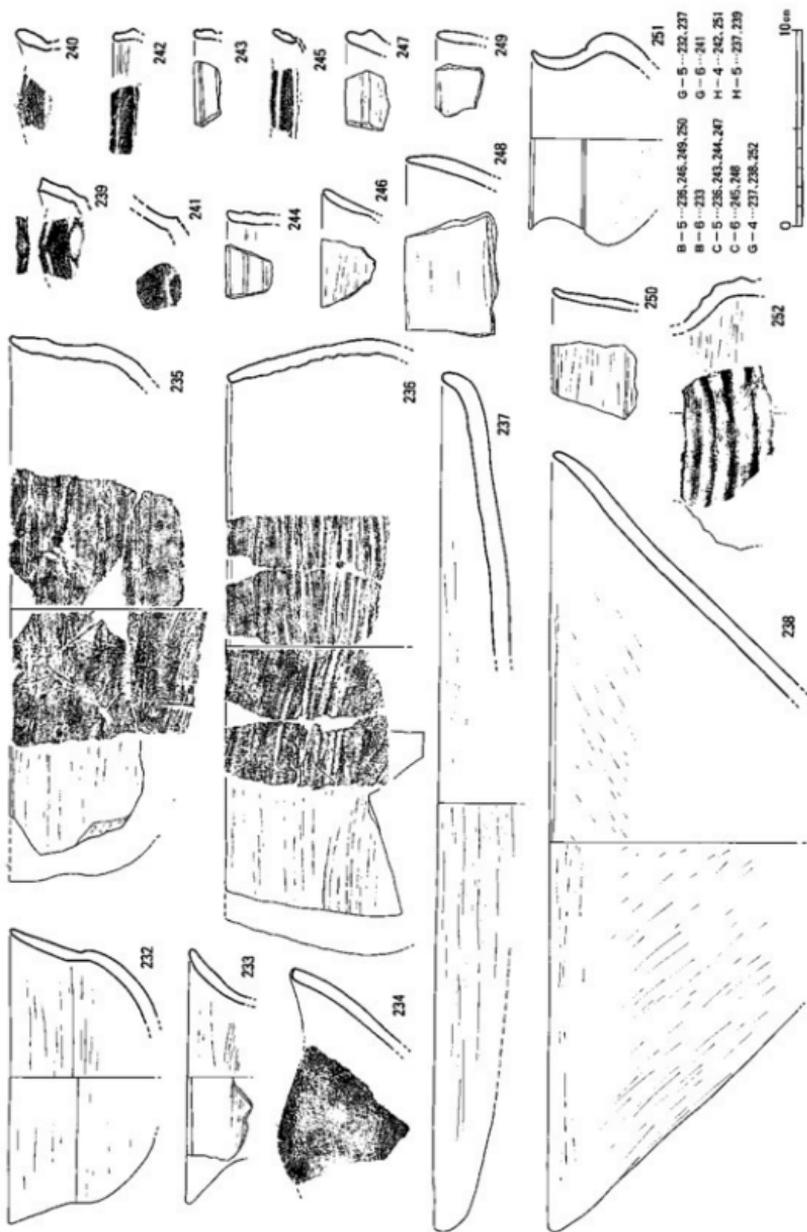
第30圖 八座遺跡出土土器 19



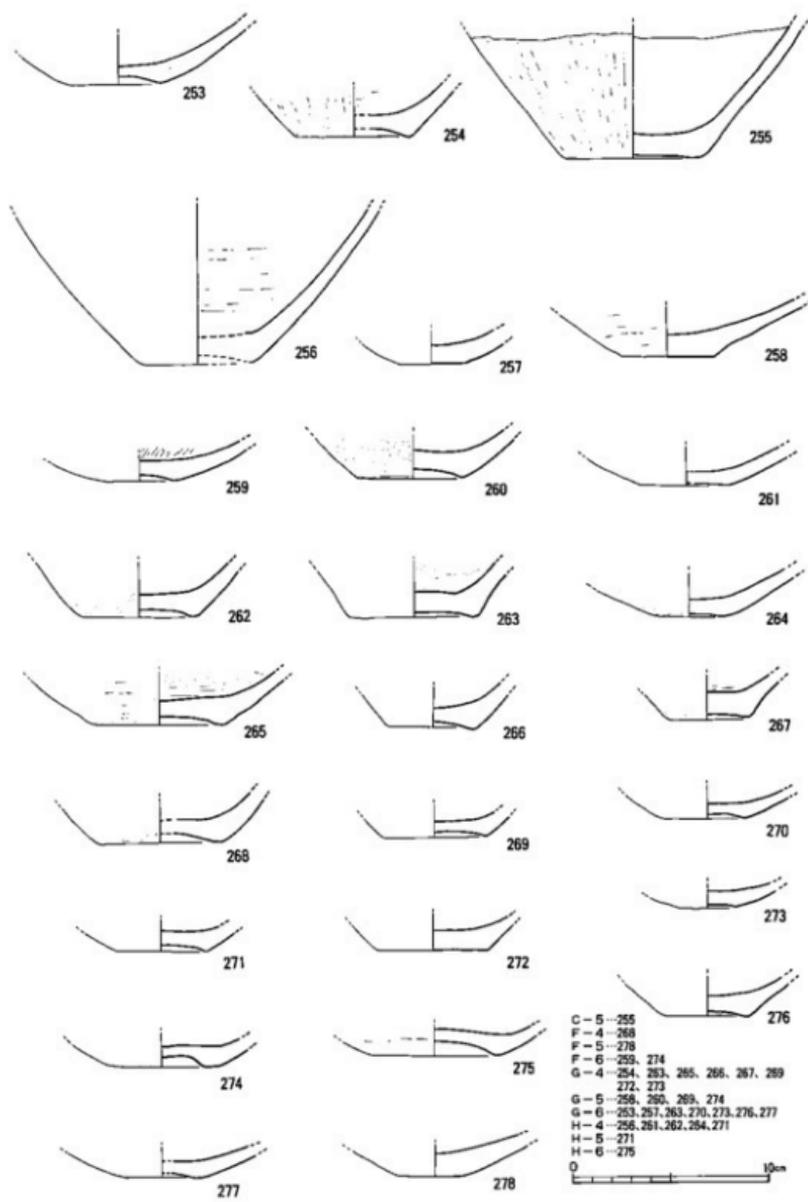
第31圖 八窪遺跡出土土器 20



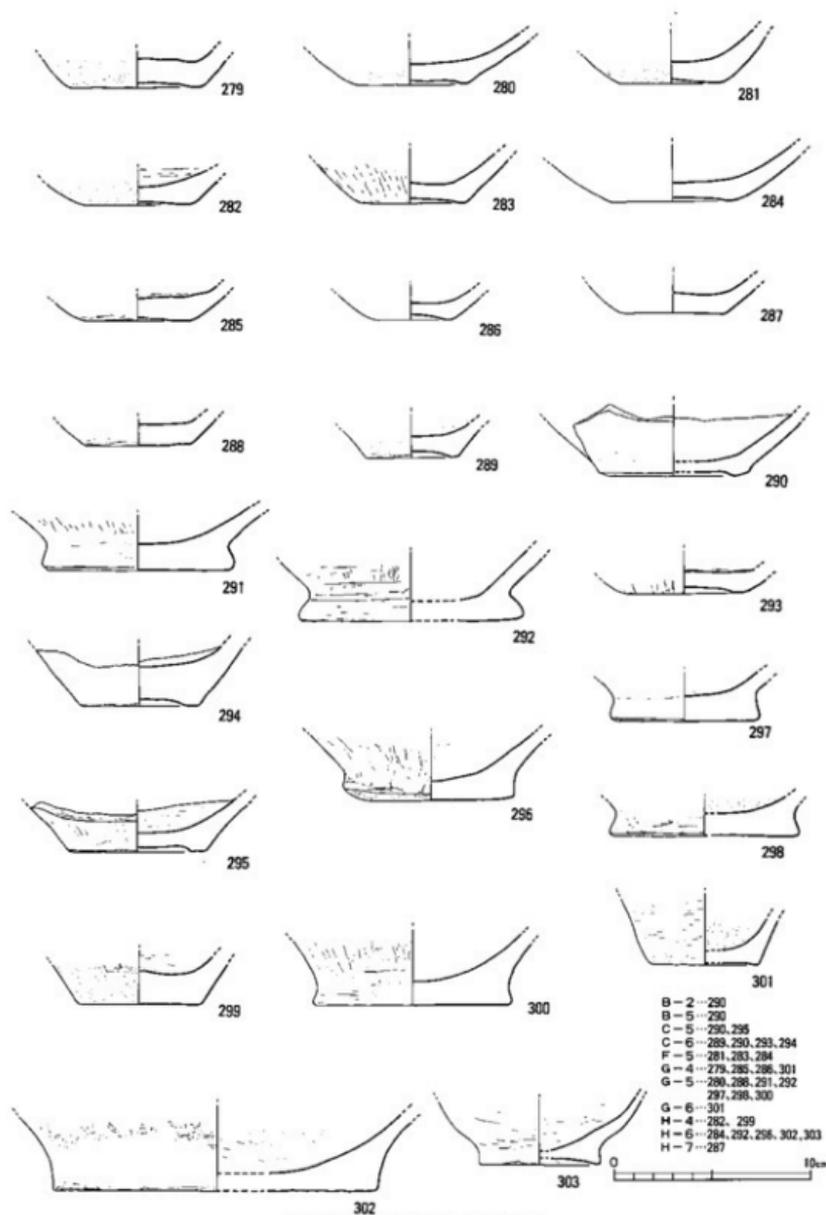
第32图 八宝遗址出土土器 21



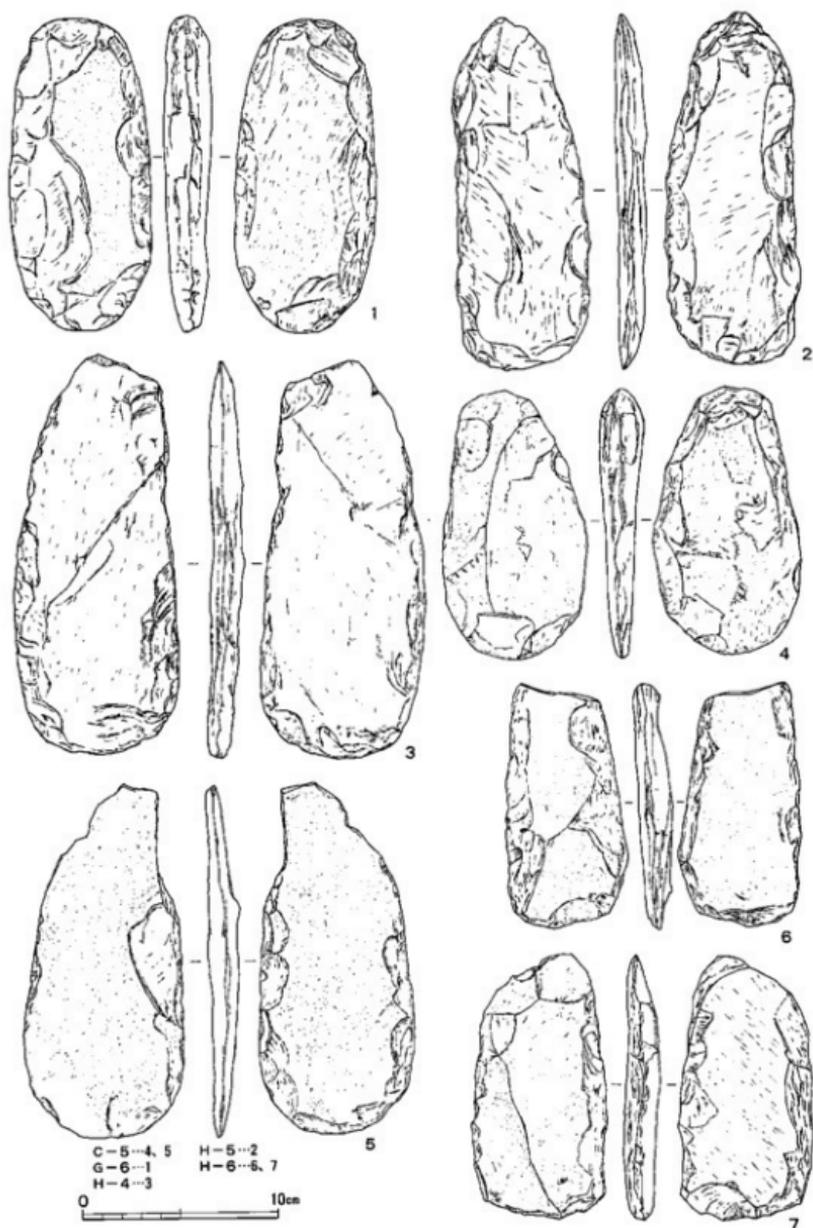
第33图 八渣遗址出土土器 22



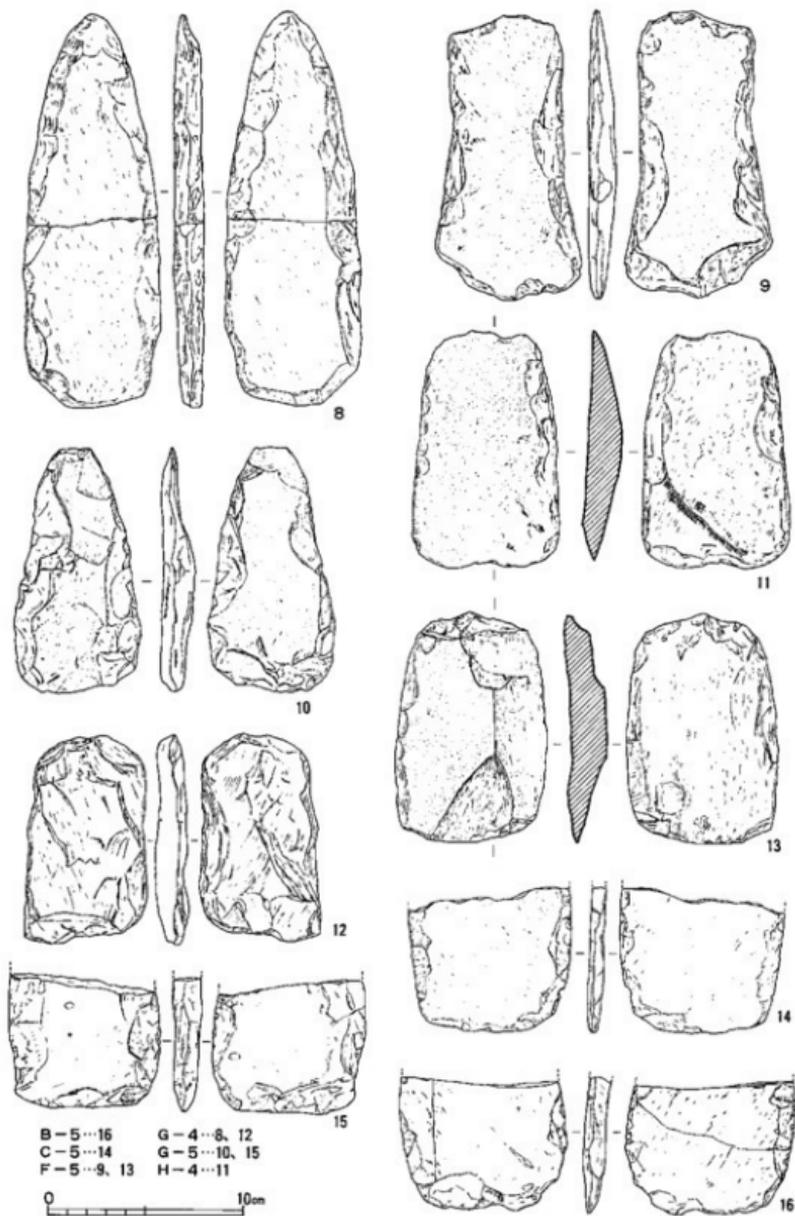
第34圖 八座遺跡出土土器 23



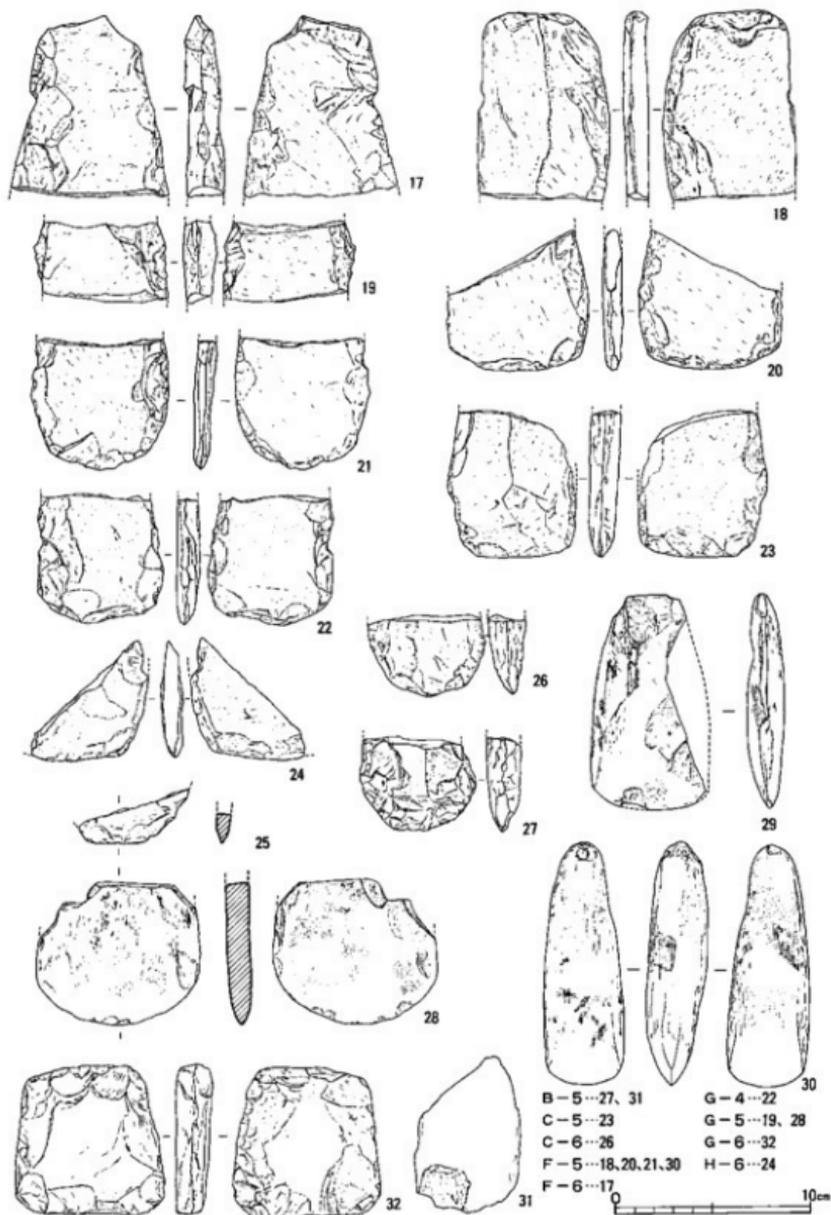
第35圖 八窪遺跡出土土器 24



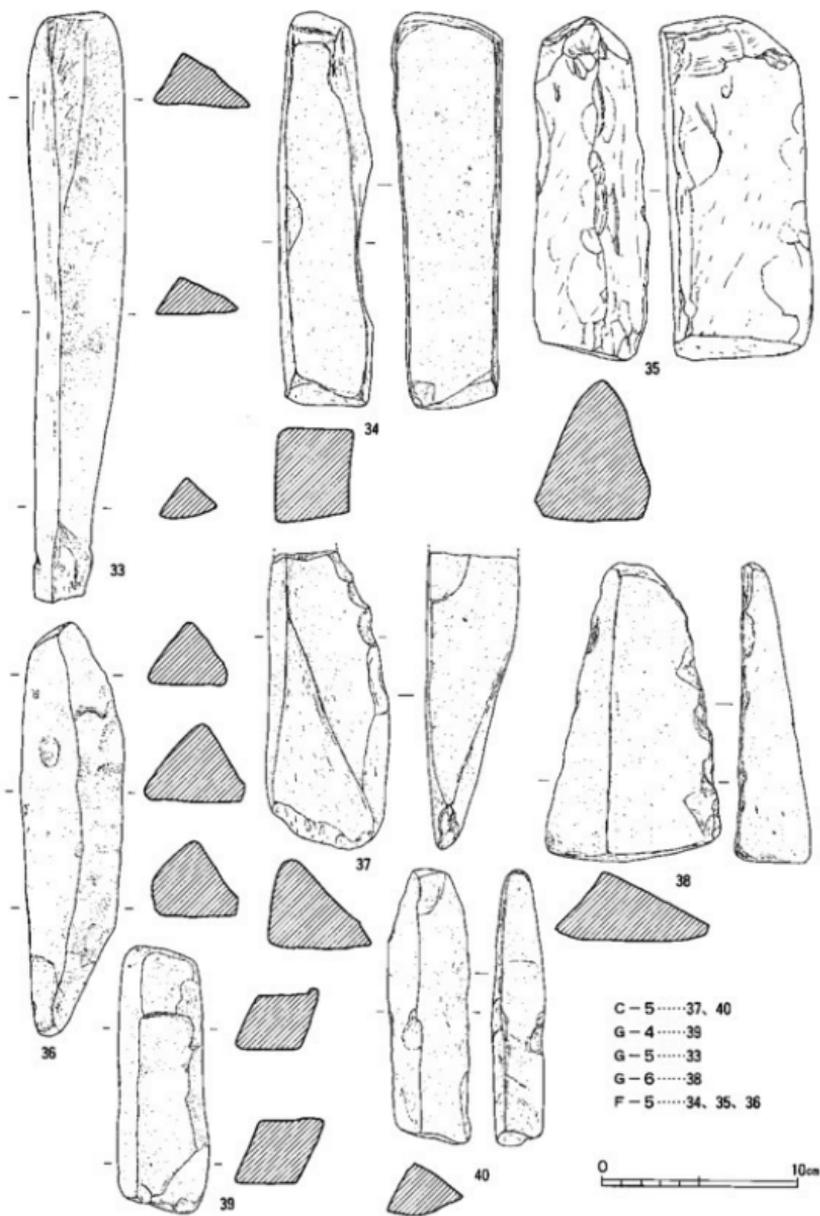
第36圖 八窪遺跡出土石器 1



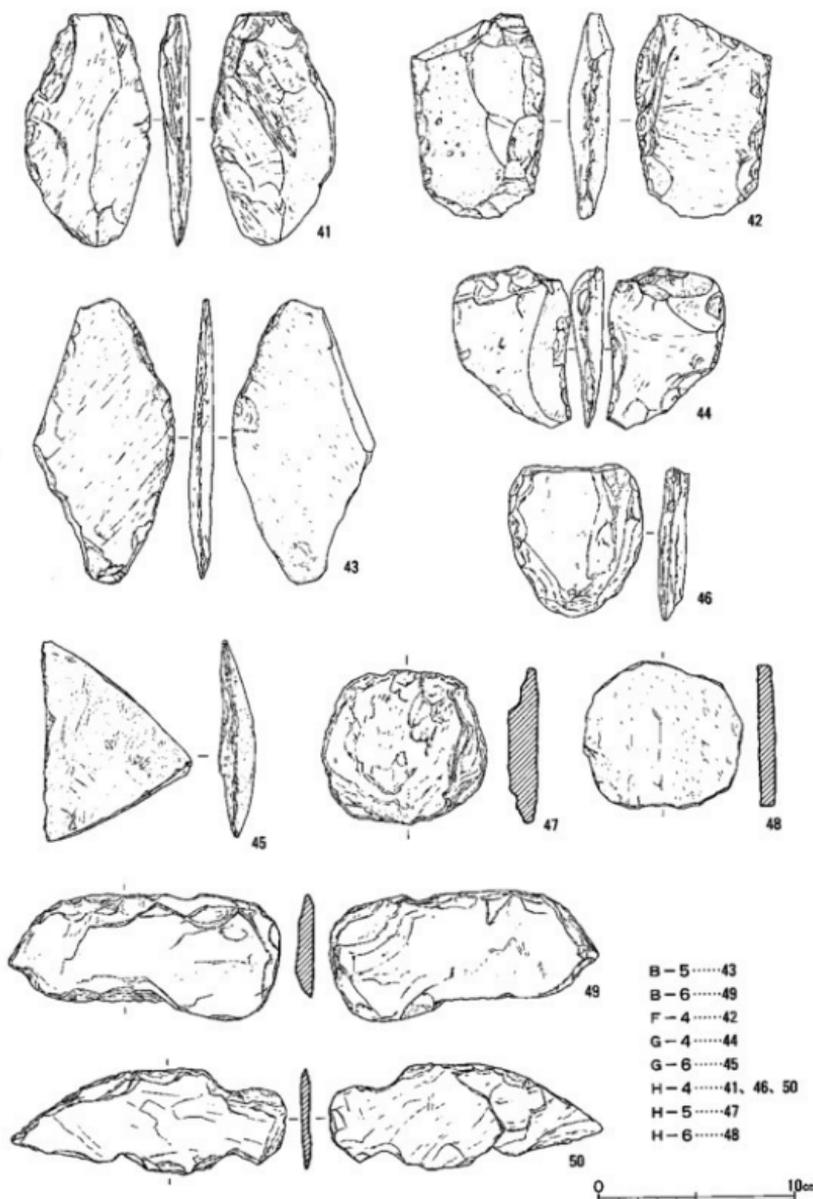
第37圖 八窪遺跡出土石器 2



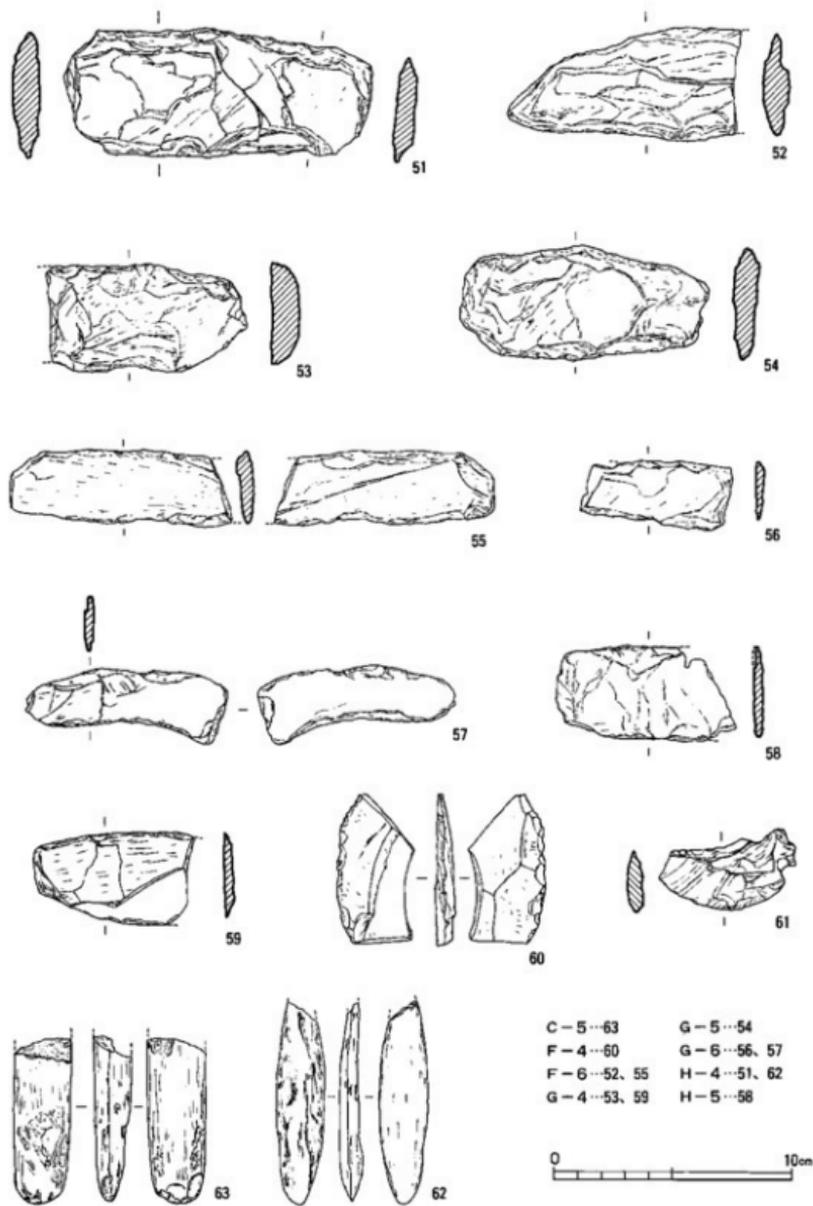
第38图 八座遺跡出土石器 3



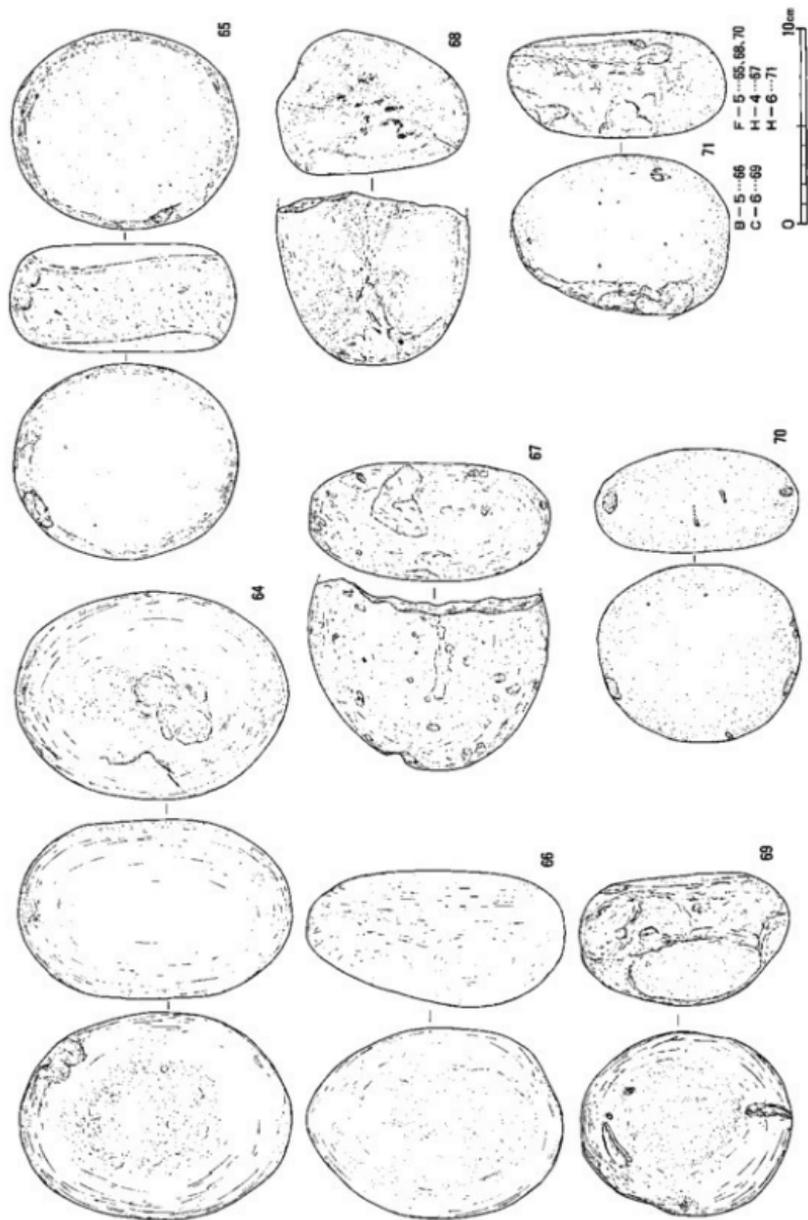
第39圖 八窪遺跡出土石器 4



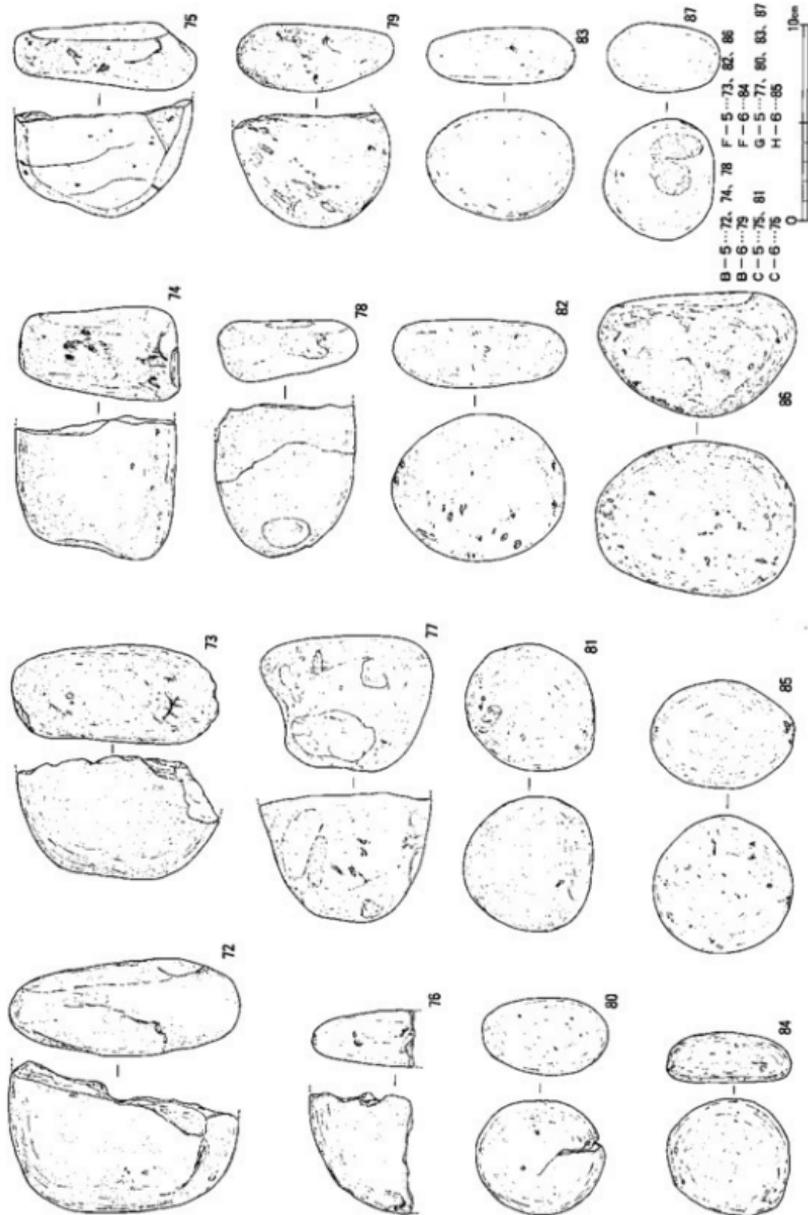
第40圖 八塵遺跡出土石器 5



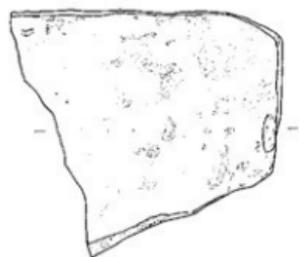
第41圖 八窪遺跡出土石器 6



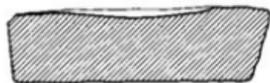
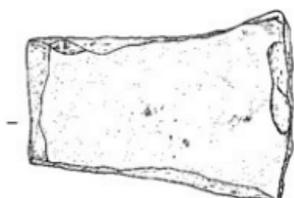
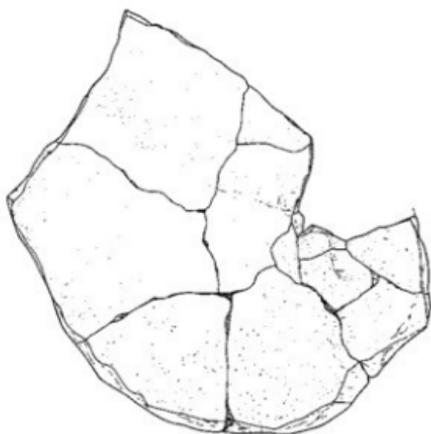
第42図 八窪遺跡出土石器 7



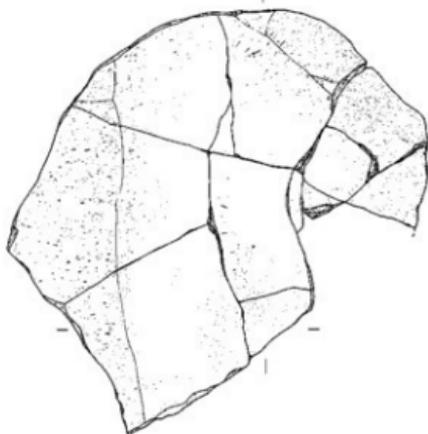
第43圖 八寶遺跡出土石器 8



89



90



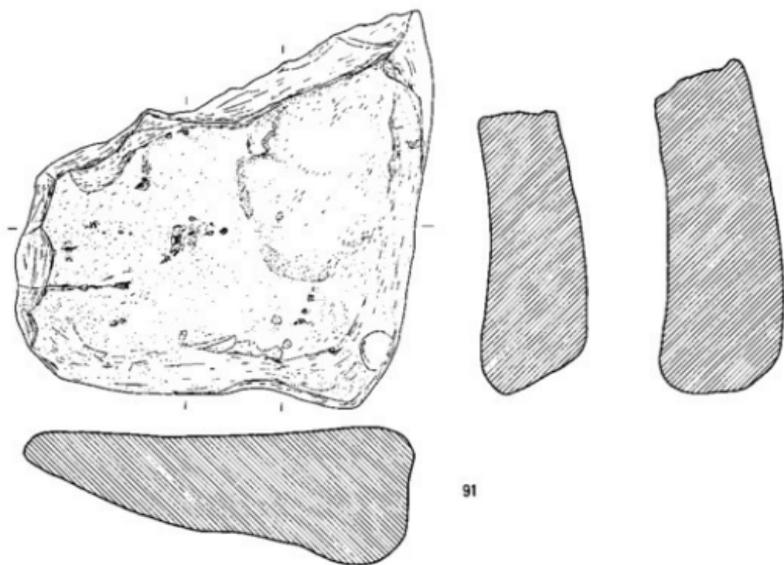
- B-5.....89
- F-5.....88
- G-4.....88
- G-5.....88
- G-6.....88、90
- H-4.....88
- H-6.....88



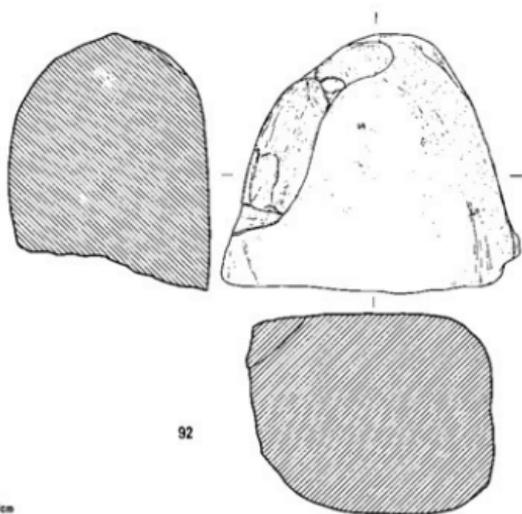
88



第44图 八座遺跡出土石器 9



91

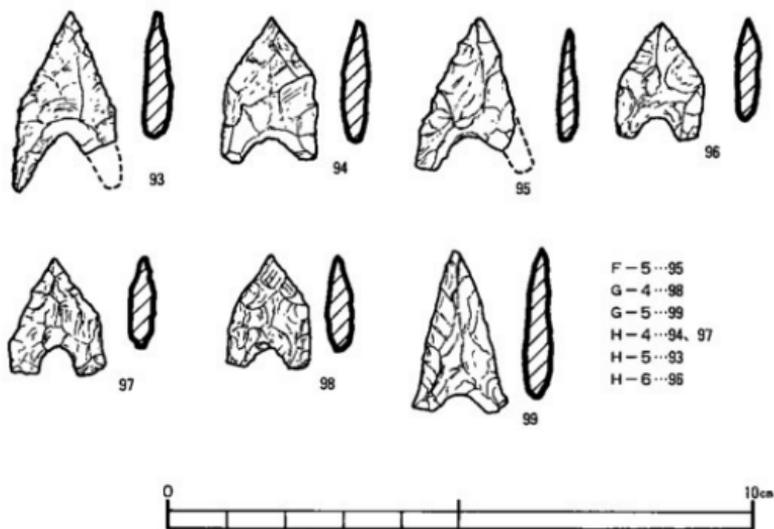


92

B-5.....91  
 F-5.....92  
 G-5.....92

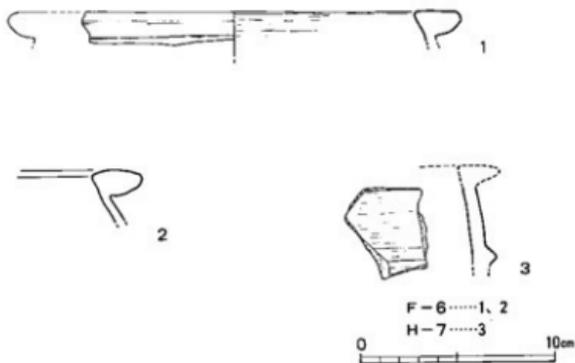
0 10cm

第45圖 八達遺跡出土石器 10



- F-5...95
- G-4...98
- G-5...99
- H-4...94、97
- H-5...93
- H-6...96

第46图 八窪遺跡出土石器 11



- F-6...1、2
- H-7...3

第47图 八窪遺跡出土土器 (弥生) 25

表1 八窪遺跡出土縄文土器

※出土地点のローマ字と次の数字は調査区  
あとの数字は遺物取上げ時の番号

遺物 番号	器種	分類	口径	器高	底径	出土地点	備考
1	深鉢	I	27.8	—	—	C-6-129	胎土に金髪母
2	同	I	—	—	—	C-6-122	
3	同	I	18.8	—	—	C-6-115	
4	同	I	—	—	—	C-6-133	
5	同	I	—	—	—	C-6	
6	同	I	—	—	—	B-5-10	
7	同	I	—	—	—	C-5-85	
8	同	I	—	—	—	B-5-9	
9	同	I	—	—	—	C-5-114	
10	同	I	—	—	—	B-5	
11	同	I	28.0	—	—	C-5-258	
12	同	I	—	—	—	C-5-277, 278	
13	同	I	—	—	—	C-6-126	
14	同	I	—	—	—	C-6-62	
15	同	I	—	—	—	C-6-56	
16	同	I	—	—	—	C-5-174	
17	同	I	—	—	—	F-5-552	
18	同	I	—	—	—	C-6-182	
19	同	I	—	—	—	C-5-40	
20	同	I	—	—	—	C-5-1	
21	同	IIa	31.6	—	—	C-5-114~116, 73, 250	
22	同	IIa	29.2	—	—	C-5-93	
23	同	IIa	—	—	—	C-6-92	
24	同	IIa	—	—	—	C-5-137	
25	同	IIa	—	—	—	C-5-66	
26	同	IIa	—	—	—	C-6-51	
27	同	IIa	—	—	—	C-6-170	
28	同	IIa	—	—	—	C-5-8	
29	同	IIa	—	—	—	B-5	
30	同	IIa	—	—	—	C-6-37, 39, 46, 148, 96, 71, 84, 86, 144, 91	
31	同	IIa	23.2	—	—	C-6-10, 37, 49, 125	
32	同	IIa	—	—	—	C-5-117	
33	同	IIa	—	—	—	B-5-14	
34	同	IIa	—	—	—	B-5-70	
35	同	IIa	—	—	—	C-6-123	
36	同	IIa	—	—	—	C-6-142	
37	同	IIa	—	—	—	B-6-14	

遺物 番号	器種	分類	口径	器高	底径	出土地点	備考
38	深鉢	IIa	—	—	—	B-5	
39	同	IIa	—	—	—	C-5-292	
40	同	IIa	32.2	—	—	F-5-478, 479	約1/6の破片
41	同	IIa	33.0	—	—	H-4-184, 185, 447	
42	同	IIa	29.5	—	—	F-5-136, 237, 264, 317, 391, 514, 515, G-5-207, H-6-210	約1/2の破片
43	同	IIa	28.7	—	—	G-6	
44	同	IIa	29.5	—	—	H-4-416, 423	約1/7の破片
45	同	IIa	—	—	—	F-6	
46	同	IIa	24.8	—	—	G-4-257, G-5-62	約1/4の破片
47	同	IIa	—	—	—		
48	同	IIa	19.4	—	—	H-4-547, 549H-5-111, 112, 185	
49	同	IIa	—	—	—	F-5, G-5-675	
50	同	IIa	25.5	—	—	F-4-60, G-4-112, G-5-618	
51	同	IIa	26.5	—	—	F-4-1, G-4-67, 151, 222	52は約1/2の破片
52	同	IIa	25.2	—	—	H-4-139, 145, 155, 159, 160~162, 166, 116, 141, 153, 164, 98, 142, 138, 158, 523, 157, 73, 150	
53	同	IIa	31.2	—	—	H-4-122~125	
54	同	IIa	—	—	—	H-4-130, 340	
55	同	IIa	—	—	—	F-5-461, 463,	
56	同	IIa	33.0	—	—	F-5-530~532, 582, 630, 432, 457, F-6-107	約1/3位の破片
57	同	IIa	17.7	—	—	H-4-463	
58	同	IIa	—	—	—	F-5-363~365	
59	同	IIa	—	—	—	F-6-125	
60	同	IIa	26.4	—	—	H-6-29, 80, 90, 184, 189	
61	同	IIb	—	—	—	C-6-173	
62	同	IIb	—	—	—	C-6-127	
63	同	IIb	—	—	—	B-5-39	
64	同	IIb	—	—	—	B-6-1	
65	同	IIb	—	—	—	C-6-166	
66	同	IIb	—	—	—	C-6-114	
67	同	IIb	—	—	—	B-5	
68	同	IIb	—	—	—	B-5	
69	同	IIb	—	—	—	B-5	
70	同	IIb	—	—	—	C-5-186	
71	同	IIb	12.3	—	—	G-4-283, 287	
72	同	IIb	—	—	—	H-4-72, 126, 439	
73	同	IIb	27.6	—	—	F-4-42, G-4-120, G-5-421, 675	

遺物 番号	器種	分類	口径	器高	底径	出土地点	備考
74	深鉢	IIb	—	—	—	F-6-112, 111	
75	同	IIb	21.6	—	—	G-4-341, 358	
76	同	IIb	—	—	—	F-5-3, G-4-384	
77	同	IIb	21.2	—	—	H-4-122	
78	同	IIb	29.7	—	—	F-4-27, G-4-415	約1/4の破片
79	同	IIb	21.5	—	—	H-4-541	約1/5の破片
80	同	IIb	—	—	—	G-6-205, 228	
81	同	IIb	30.6	—	—	F-5-450, G-5-273, H-5-80	
82	同	IIb	20.4	—	—	H-4-305, 372, 531	約1/5の破片
83	同	IIb	—	—	—	F-5-87, 103, 435, 569, H-6-203	
84	同	IIb	20.7	—	—	G-6-260	約1/7の破片
85	同	IIb	26.1	—	—	G-4-121, 2, 279, 282, 400, G-6-66, 185, 337	
86	同	IIb	—	—	—	H-4-75, 101	
87	同	IIb	23.4	—	—		約1/4の破片
88	同	IIb	24.8	—	—	F-4-85, G-6-210	約1/6の破片
89	同	IIb	—	—	—	G-6-180, 219	
90	同	II	—	—	—	B-6-13	
91	同	II	—	—	—	C-6-106	
92	同	II	—	—	—	B-5-26	
93	同	II	—	—	—	C-5-199	
94	同	II	—	—	—	C-5-146	
95	同	II	—	—	—	C-6-180	
96	同	II	—	—	—	C-5-47	
97	同	II	—	—	—	C-5-134	
98	同	II	—	—	—	C-6-138	
99	同	II	—	—	—	C-5-243	
100	同	II	—	—	—	C-6-5	
101	同	II	—	—	—	C-5-19	
102	同	II	—	—	—	C-6-119	
103	同	II	—	—	—	C-6(カクラン)	
104	同	II	—	—	—	C-6-38	
105	同	II	—	—	—	C-2	
106	同	II	—	—	—	F-5-117, 494	107は約1/3の破片
107	同	II	—	—	—	F-5-112, 421, 427, G-5-438, 627, G-6	
108	同	II	—	—	—	F-5-441	
109	同	II	—	—	—	H-6-192, 193	
110	同	II	—	—	—	H-4-45	
111	同	II	—	—	—	F-5-71, 82, 354~356, 360, 533	
112	同	II	—	—	—	G-5-663, 666	

遺物 番号	器種	分類	口径	器高	底径	出土地点	備考
113							No.50と接合その 為欠番
114	同	II	—	—	—	F-6-94、97	115は約1/6の破片
115	同	II	—	—	4.9	H-4-113~116、121、126、445	
116	同	II	—	—	3.6	H-4-51、74、77、79、80、147、330、 430、480	
117	同	III	—	—	—	G-5-235、271、549~552、316	
118	同	III	41.9	—	—	C-6-167、F-5-192、516、G-5-27、 139、185、220、341、467、468、480、 507、508、537、547	約1/3の破片
119	同	III	35.8	—	—	G-5-414、415、495、496	
120	同	III	—	—	—	F-5-407、408	
121	同	III	—	—	—	G-4-38、403、G-5-341、462、533	
122	同	III	27.8	—	—	G-5-333、545	
123	同	III	—	—	—	G-4-463、H-5-3	
124	同	III	—	—	—	G-4-142、143	
125	同	III	—	—	—	G-4-8	126は1/3~1/4の 破片
126	同	III	—	—	—	F-5-489、G-5-372~374、310、 351、354、363、384、424、433、434、 474、476、477、489、538、588、370、 298	
127	同	III	—	6.6	6.8	F-5-476、F-6-68、G-5-205、366、 G-6-15、280、296、375、H-4-274、 490	
128	同	III	—	—	6.8	G-4-8	
129	同	III	—	—	—	H-6-52、57、140~143、145、146	
130	同	III	—	—	—	H-4-50~52	
131	同	IV	—	23.9	—	F-5-444、G-6-177、337	
132	浅鉢	I	—	—	—	F-6-130	
133	同	I	—	—	—	G-6-301	
134	同	I	—	—	—	G-5-457	
135	同	I	—	—	—	G-5-626	
136	同	I	—	—	—	H-4-111	
137	同	I	—	—	—	G-6-223	
138	同	I	—	—	—	H-4-200	
139	同	I	—	—	—	H-7-2	
140	同	I	—	—	—	H-5	
141	同	I	—	—	—	G-4-197、H-4-265	
142	同	I	—	29.6	—	G-5-299、612	
143	同	I	—	—	—	H-4-205	

遺物 番号	器種	分類	口径	器高	底径	出土地点	備考
144	浅鉢	I		30.2	—	H-5-170、H-6-122、195	
145	同	I		—	—	H-4-189	
146	同	I		30.2	—	H-7-172	約1/8の破片
147	同	I		21.0	—	G-4-111	
148	同	I		—	—	G-4-370	
149	同	I	13.4	—	—	F-4-57	約1/7の破片
150	同	I	17.0	—	—	F-5-56、F-6-71	約1/5の破片
151	同	I	—	—	—	F-5-137	
152	同	I	—	—	—	F-6-117	
153	同	I	—	—	—	H-6-137	
154	同	IIa	33.3	—	—	F-5-95、G-5、F-6採集	約1/4の破片
155	同	IIa	25.8	—	—	H-4-205、360、361、514	約1/8の破片
156	同	IIa	39.9	—	—	F-5-470、G-4-268、284	
157	同	IIa	45.8	—	—	F-5-247、G-5-249、559	
158	同	IIa	22.7	—	—	G-4-393、410	
159	同	IIa	—	—	—	G-6	
160	同	IIa	—	—	—	G-4-145	
161	同	IIa	—	—	—	G-6-251	
162	同	IIa	—	—	—	採集	
163	同	IIa	—	—	—	F-6-90、93	
164	同	IIb-1	29.4	—	—	F-6-62、63、G-5-90、328、489、 522、597	
165	同	IIb-1	26.2	—	—	G-5-489、522	164と同一個体か
166	同	IIb-1	20.6	—	—	F-4-30、31	165は約1/5の破片
167	同	IIb-1	14.8	—	—	H-4-94、149	166は約1/6の破片
168	同	IIb-1	—	—	—	G-6-83、187	167は約1/2の破片
169	同	IIb-1	—	—	—	G-4-123	
170	同	IIb-1	—	—	—	G-6-216、G-4-385?	
171	同	IIb-1	—	—	—	採集	
172	同	IIb-1	—	—	—	採集	
173	同	IIb-1	19.0	—	—	H-4-205、254、257	
174	同	IIb-1	37.5	—	—	G-5-304、G-6-200、201、99	
175	同	IIb-1	—	—	—	G-4-78	
176	同	IIb-1	—	—	—	F-4-40	
177	同	IIb-1	—	—	—	G-6-217	
178	同	IIb-2	27.6	—	—	F-4-51~53	
179	同	IIb-2	—	—	—	G-5-326、327、598	
180	同	IIb-2	24.6	—	—	G-5-594、720	
181	同	IIb-2	—	—	—	H-4-23	
182	同	IIb-2	—	—	—	F-4-64、G-6-107	
183	同	IIb-2	21.3	—	—	G-6-93、227	

遺物 番号	器種	分類	口径	器高	底径	出土地点	備考
184	浅鉢	IIb-2	—	—	—	H-4-56	
185	同	IIb-2	23.5	—	—	F-6-72	
186	同	IIb-2	—	—	—	G-5-616	
187	同	IIb-2	29.4	—	—	H-6-201、202	
188	同	IIb-2	—	—	—	G-5-341	
189	同	IIb-2	24.5	—	—	H-6-204~205	
190	同	IIb-2	—	—	—	G-6-173	
191	同	IIb-2	—	—	—	G-5-382	
192	同	IIb-2	—	—	—	G-5-599	
193	同	IIb-2	—	—	—	G-4-7	
194	同	IIb-2	—	—	—	F-6-108	
195	同	IIb-2	29.5	—	—	G-5-353、586、587、589	
196	同	IIb-2	—	—	—		
197	同	IIb-2	—	—	—	G-4-126、127	
198	同	IIb-2	—	—	—	G-5-377、G-6-151	
199	同	IIb-2	—	—	—	G-4-166	
200	同	IIb-2	—	—	—	G-5-683	
201	同	IIb-2	—	—	—	G-172	
202	同	IIb-2	—	—	—	H-6-224	
203	同	IIIa	32.7	—	—	B-5-68	約1/5の破片
204	同	IIIa	19.8	—	—	C-5-129	
205	同	IIIa	33.6	—	—	C-5-90	
206	同	IIIa	19.9	—	—	C-5-126	
207	同	IIIa	—	—	—	C-5-108	
208	同	IIIa	—	—	—	C-6-16	
209	同	IIIa	—	—	—	B-3-32	
210	同	IIIa	46.8	—	—	H-5-121	約1/11の破片
211	同	IIIa	39.1	—	—	G-5-31、302、339、357	約1/9の破片
212	同	IIIa	33.6	—	—	G-5-497、499、501	
213	同	IIIa	34.4	—	—	F-6-66、G-5-18、503、G-6-144	
214	同	IIIa	—	—	—	F-5-417	
215	同	IIIa	—	—	—	G-5-424、447	
216	同	IIIa	20.8	—	—	H-6-132	約1/12の破片
217	同	IIIb	15.6	—	—	C-6-175	約1/9の破片
218	同	IIIb	21.7	—	—	C-5-187	約1/14の破片
219	同	IIIb	27.5	—	—	C-246	約1/12の破片
220	同	IIIb	—	—	—	C-6-27	
221	同	IIIb	—	—	—	C-5-124	
222	同	IIIb	35.5	—	—	B-6-8	約1/14の破片
223	同	IIIb	—	—	—	B-5	約1/12の破片
224	同	IIIb	—	—	—	C-5-189	

遺物 番号	器種	分類	口径	器高	底径	出土地点	備考
225	浅鉢	IIIb	—	—	—	B-5-20	
226	同	IIIb	—	—	—	C-5-171	
227	同	IIIb	20.6	—	—	G-5-337, 358	
228	同	IIIb	—	—	—	G-6-35	
229	同	IV	36.0	—	—	F-5-294, G-4-33, G-5-220, 331, 332, 432, 573, 635, 686	
230	同	IV	34.9	—	—	F-5-98	
231	同	IV	28.4	—	—	F-5-21, 242, 374, G-5-453	約1/6の破片
232	同	IV	15.0	—	—	G-5-208	約1/3の破片
233	同	IV	12.5	—	—	B-6-25	約1/8の破片
234	同	—	—	—	—	F-5-234	
235	同	VI	27.8	—	—		
236	同	VI	27.9	—	—	B-5-17, C-5-254, 256, 257	
237	同	V	43.6	—	—	F-5-476, 455, 468, 279, 295, 300, 395, F-6-13, 75, G-4-206, 309, G-5-669, G-6-74, H-5-31	
238	同	V	49.8	—	—	G-4-57, 86, 295, G-5-450	約1/2の破片
239	同	—	—	—	—	H-5-48	
240	同	—	—	—	—	F-5-227	
241	同	—	—	—	—	G-6	
242	同	—	—	—	—	H-4-442	
243	同	—	—	—	—	C-5	
244	—	—	—	—	—	C-5	
245	浅鉢	—	—	—	—	C-6	
246	—	—	—	—	—	B-5-5	
247	—	—	—	—	—	C-5-141	
248	—	—	—	—	—	C-6-163	
249	—	—	—	—	—	B-5	
250	—	—	—	—	—	B-5-22	
251	壺?	—	9.0	—	—	F-5-204, 229, H-4-251, 530	
252	注口 土器	—	—	—	—	G-4-212	
253				—	4.4	G-6-256	
254				—	5.8	G-4-409	
255				—	6.9	C-5-149, 165, 169	
256				—	5.6	H-4-108, 110, 131, 350, 501	約1/2の破片
257			—	—	3.5	G-6-237	
258			—	—	4.7	G-5-290, 426, 638, 688	
259			—	—	3.6	F-6	
260			—	—	5.0	G-5-663	
261			—	—	4.4	H-4-387, 586	約1/2の破片

遺物番号	器種	分類	口径	器高	底径	出土地点	備考
262			—	—	5.8	H-4-561	
263			—	—	6.5	G-4-70、G-6-220	
264			—	—	3.4	H-4-209、210	
265			—	—	6.6	G-4-362	
266			—	—	4.4	G-4-64	
267			—	—	4.1	G-4-129	
268			—	—	6.2	F-4-33	
269			—	—	5.3	G-4-186、G-5-183	
270			—	—	4.2	G-6-24	
271			—	—	4.6	H-4-261、374、H-5-105	
272			—	—	5.7	G-4-39	
273			—	—	3.5	G-4-102、G-6-342	
274			—	—	4.5	F-6-123、G-5-289	
275			—	—	6.4	H-6-94、156、159	
276			—	—	4.2	G-6-247	
277			—	—	3.9	G-6-58	
278			—	—	3.2	F-5-426	
279			—	—	3.8	G-4-345	
280			—	—	5.4	G-5-581、582、691、693	
281			—	—	4.9	F-5-235、346、499	
282			—	—	5.5	H-4-117	
283			—	—	5.4	F-5-282	
284			—	—	6.2	F-5-297、H-6-196	
285			—	—	5.4	G-4-285	
286			—	—	3.9	G-4-266、267	
287			—	—	5.3	H-7-6	
288			—	—	5.4	G-5-330	
289			—	—	4.7	C-6-130	約1/4の破片
290			—	—	7.7	C-5-259、130、C-6-184、B-2、B-5	約1/6の破片
291			—	—	9.4	G-5-469、716	
292			—	—	11.0	G-5-405、H-6-170	約1/2の破片
293			—	—	6.0	C-6-109	約1/2の破片
294			—	—	6.0	C-6-107	
295			—	—	7.0	C-5-147	
296			—	—	8.7	H-6-98~100	
297			—	—	7.1	G-5-491	
298			—	—	9.5	G-5-314	
299			—	—	6.2	H-4-90	
300			—	—	10.1	G-5-313	
301			—	—	5.4	G-4-433、G-6-75、194	
302			—	—	16.6	G-6-152、318	約1/5の破片
303			—	—	6.1	H-6-64	

表2 八窪遺跡出土石器

※出土地点のローマ字と次の数字は調査区  
あとの数字は遺物取上げ時の番号

遺物番号 (実測図)	種別	石質	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	出土地点	備考
1	打石斧	安山岩	16.1	7.3	2.4	390.9	G-6-315	完形
2	打石斧	安山岩	17.9	6.8	1.6	233.9	H-5-180	完形
3	打石斧	安山岩	20.3	8.8	1.6	367.9	H-4-503	完形
4	打石斧	安山岩	13.7	7.4	2.2	192.2	C-5-193	完形
5	打石斧	安山岩	17.8	8.1	1.6	253.3	C-9-192	完形
6	打石斧	安山岩	現長12.0	6.1	1.8	169.7	H-6-134	完形
7	打石斧	安山岩	13.6	7.0	1.7	214.3	H-6-13	完形
8	打石斧	安山岩	19.9	7.0	1.6	303.1	G-4-234、442	完形
9	打石斧	安山岩	14.5	7.3	1.4	177.5	F-5-352	完形
10	打石斧	安山岩	12.5	6.5	1.6	145.6	G-5-439	完形
11	打石斧	安山岩	11.9	7.6	1.7	190.9	H-4-244	完形
12	打石斧	緑泥片岩	現長10.2	6.2	1.6	150.8	G-4-258	折損
13	打石斧	安山岩	11.7	7.8	1.8	188.9	F-5-437	完形
14	打石斧	安山岩	現長7.4	8.4	0.8	71.2	C-5-138	上半折損
15	打石斧	安山岩	現長6.7	7.8	1.5	96.8	G-5-431	上半折損
16	打石斧	安山岩	現長6.9	8.4	1.1	74.7	B-5-35	上半折損
17	打石斧	安山岩	現長9.2	7.9	1.9	157.0	F-6-134	刃部折損
18	打石斧	安山岩	現長9.6	6.7	1.3	116.3	F-5-100	刃部折損
19	打石斧	安山岩	現長3.7	6.7	1.7	63.1	G-5-144	両端折損
20	打石斧	安山岩	現長7.1	7.3	1.0	63.4	F-5-505	上半折損
21	打石斧	安山岩	現長6.5	7.0	1.0	69.2	F-5-326	上半折損
22	打石斧	安山岩	現長6.4	6.4	1.2	72.6	G-4-148	上半折損
23	打石斧	安山岩	現長7.3	6.5	1.5	99.1	C-5-83	上半折損
24	打石斧	安山岩	現長5.8	5.0	1.1	39.3	H-6-101	刃部破片
25	打石斧	安山岩	-	-	1.5	8.6	H-4一括	刃部破片
26	打石斧	凝灰岩	現長3.8	5.9	1.9	51.8	C-6-105	上半折損
27	打石斧	安山岩	現長4.7	6.0	1.8	61.2	B-5-66	上半折損
28	磨石斧	安山岩	現長7.4	8.3	1.2	120.9	G-5-647	折損
29	磨石斧	頁岩	10.9	5.7	1.9	141.5	採集	欠損
30	磨石斧	片麻岩	12.4	4.6	3.0	250.3	F-5-410	完形
31	磨石斧	片麻岩	-	-	-	63.0	F-5-92	破片
32	打製石器	安山岩	7.7	7.6	1.8	148.6	G-6-163	完形
33	敲打器	安山岩	30.0	4.9	2.6	408.8	G-5-425	完形
34	敲打器	安山岩	20.1	4.8	3.9	435.2	F-5-209	完形
35	敲打器	安山岩	17.2	7.2	5.9	966.8	F-5-2	完形
36	敲打器	安山岩	21.0	5.2	4.0	524.3	F-5-416	完形

遺物番号 (実測図)	種別	石質	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	出土地点	備考
37	敲打器	安山岩	現長14.8	6.3	3.9	490.0	C-5-93	上半折損
38	敲打器	安山岩	15.3	7.8	3.5	438.7	G-6-119	完形
39	敲打器	安山岩	13.3	3.4	3.3	353.9	G-4-88	完形
40	敲打器	安山岩	13.8	4.0	2.7	204.8	C-5-268	完形
41	打石器	安山岩	11.8	6.3	1.5	99.0	H-4-533	完形
42	スクレーパー	安山岩	10.4	6.8	2.1	162.1	F-4-19	完形
43	スクレーパー	安山岩	14.6	7.2	1.2	107.3	B-5-23	完形
44	スクレーパー	安山岩	8.0	6.0	1.7	75.1	G-4-273	完形
45	スクレーパー	安山岩	10.2	7.5	1.8	105.0	G-6-208	完形
46	打石器	片岩	7.8	6.9	1.4	103.4	H-4-532	完形
47	円盤形石器	片岩	7.9	8.5	1.5	142.2	H-5-137	完形
48	円盤形石器	安山岩	7.2	8.0	0.8	103.7	H-6-85	完形
49	石鎌	片岩	5.2	13.8	0.9	123.9	B-6-3	完形
50	石鎌	片岩	5.4	13.9	0.5	49.0	H-4-564	ほぼ完形
51	石鎌	片岩	5.5	13.0	1.2	123.6	H-4-493、G-4-28	完形か
52	石鎌	片岩	4.7	現幅9.6	1.1	71.7	F-6-78	折損
53	石鎌	片岩	4.4	現幅8.3	1.2	74.2	G-4-128	折損
54	石鎌	片岩	4.8	10.4	1.0	81.7	G-5-309	完形
55	石鎌	片岩	3.0	9.8	0.7	31.7	F-6-80	完形
56	石鎌	片岩	2.7	現幅6.1	0.4	10.4	G-6-305	折損
57	石鎌	頁岩	2.4	8.5	0.4	11.7	G-6-209	完形
58	石鎌	片岩	3.9	現幅7.1	0.4	21.5	H-5-12	折損
59	石鎌	片岩	3.8	現幅6.5	0.4	15.8	G-4-225	折損
60	スクレーパー	安山岩	6.4	3.2	0.8	19.4	F-4-43	完形
61	石匙	安山岩	5.9	2.8	0.7	12.7	採集	完形
62	盤形石器	片麻岩	現長8.3	2.0	1.0	23.5	H-4-95	上部折損
63	盤形石器	片麻岩	現長6.9	2.4	1.6	42.6	C-5-100	上端折損
64	磨石	安山岩	13.9	10.7	9.1	1899.0	採集	
65	磨石	安山岩	11.5	10.2	5.5	1095.1	F-5-315	
66	磨石	安山岩	13.2	10.0	6.9	1205.4	B-5-4	
67	磨石	安山岩	12.4	8.5	6.1	810.1	H-4-461	
68	磨石	安山岩	10.0	8.6	7.4	831.6	F-5-586	
69	磨石	安山岩	10.8	10.5	6.7	905.7	C-6-174	
70	磨石	安山岩	10.3	9.1	5.3	764.7	F-5-214	
71	磨石	安山岩	10.3	7.8	5.2	708.8	H-6-115	
72	磨石	安山岩	11.7	6.2	4.8	561.9	B-5-4	
73	磨石	安山岩	10.0	6.4	5.0	491.6	F-5-186	
74	磨石	安山岩	8.3	7.4	3.7~4.7	472.2	B-5-65	

遺物番号 (実測図)	種別	石質	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	出土地点	備考
75	磨石	安山岩	9.0	5.4	2.5~3.4	228.7	C-5-224	
76	磨石	安山岩	5.3	6.1	2.9	128.8	C-6-132	
77	磨石	安山岩	8.9	6.6	6.7	533.9	G-5-137	
78	磨石	安山岩	7.3	7.6	2.2~3.1	271.0	B-5-57、58	
79	磨石	安山岩	7.7	5.8	3.5	196.9	B-6-9	
80	磨石	安山岩	6.6	5.9	4.0	191.4	G-5-640	
81	磨石	安山岩	6.7	6.9	6.5	424.5	C-5-106	
82	磨石	安山岩	8.9	7.5	3.5	303.5	F-5-388	
83	磨石	安山岩	7.6	5.7	3.0	172.6	G-5	
84	磨石	安山岩	6.2	6.1	2.6	123.4	F-6-134	
85	磨石	安山岩	7.1	7.0	5.6	296.7	H-6-212	
86	磨石	安山岩	10.2	7.8	6.4	546.7	F-5-83	
87	磨石	安山岩	5.7	6.2	3.5	191.3		
88	石皿	安山岩	42.0	38.7	5.5	10.82kg	H-6-63、135F-5-303、G-5-352、371、265、G-4-133、G-6-120、273、276、H-4-564、H-6-163	両面使用
89	石皿	安山岩	28.0	24.0	7.3	7.94kg	B-5-27	
90	石皿	安山岩	26.4	19.8	7.7	7.68kg	G-6-258	
91	石皿	安山岩	40.0	33.0	11.0	30.5kg	B-5-60	
92	石皿	安山岩	28.4	26.4	20.6	23.0kg	F-5-16、G-5-368、492、498	
93	石鉄	サヌカイト	3.1	1.7	0.4	1.1	H-5-147	欠損
94	石鉄	サヌカイト	2.5	1.6	0.4	1.5	H-4-一括	完形
95	石鉄	サヌカイト	2.6	1.6	0.3	0.9	F-5-250	欠損
96	石鉄	サヌカイト	2.0	1.5	0.3	0.8	H-6-10	完形
97	石鉄	サヌカイト	1.9	1.6	0.4	0.9	H-4-576	完形
98	石鉄	黒曜石	1.9	1.4	0.4	0.7	G-4-460	完形
99	石鉄	黒曜石	2.7	1.4	0.4	1.4	G-5-286	完形

(注) 遺物番号 1~7 第36区 遺物番号 8~16 第37区  
17~32 第38区 33~40 第39区  
41~50 第40区 51~63 第41区  
64~71 第42区 72~87 第43区  
88~90 第44区 91~92 第45区  
93~99 第46区

## 第五章 調査の成果と課題

八窪遺跡の調査により多くの資料を得た。その内容については、第三章・第四章に述べた通りであるが、調査成果を集約するまえに調査での問題点、課題とうについて触れることにする。

### 第1節 遺物包含層と遺物

問題を進めるまえに、先ず県内における最近の縄文後・晩期の調査報告書では遺跡と遺物・包含層と遺物の関係をどう考え、またどの様に処理しているかを取り上げて見たい。

- (1) 鳥井原遺跡 熊本市健軍町鳥井原に所在する遺跡で、昭和51年熊本市社会教育課が東部市民センター建設に先立ち発掘調査を実施した。このなかで、調査主任の富田紘一氏は土層層序について「西区・中央区では後期前半（～中期？）の土器と後期末の土器と、ほぼ同レベルで混在した。東区では後期末の土器の出土する下部に後期前半の土器がみられたが、混在したのもあった」として、遺物の混在という表現を用い状況の説明をしておられる。
- (2) 上南部遺跡 熊本市上南部町所在の遺跡群のうちC地点にあたる部分を、熊本市が国庫補助をうけて発掘調査をした。この遺跡の土層について「この層（第2層）中には下の層から浮遊したとみられる縄文土器細片が存在する」とし、さらに第3層については「やや黄味を帯びた黒褐色土であるが、厚さ25～30cmで暗黒褐色の土に自然移行する。恐らく両者合わせて1層となるであろう。その厚さは40～50cmである。この層の上部に縄文後期末から晩期初期の包含層がある。包含層は一般的な部分で10～15cm程度」としている。また出土遺物の整理にあたり、「層位的に区部（区分）が出来ない本遺跡では」として土器の類別による分類をしている。
- (3) 古閑遺跡 熊本県上益城郡益城町古閑に所在する縄文晩期主体の遺跡。この遺跡は九州縦貫自動車道の工事に先立ち、昭和48年熊本県文化課が調査を実施し、その整理を別府大学考古学研究室がしている。報告のなかに賀川光夫氏は「調査者の勘違いによって整理中にあやまって投入されたとみられる。」とか、「遺物を観察するための現地実測に手違いがあったとみえ」と述べ苦悩のありさまがうかがえる。包含層については遺物出土状況の平面図をもとに判断して「安定した土器の包含は3層上面と」みて、さらに「層序的な不安定は、実測図断面でもわかるが、土器そのものも細部に変化が多い」として、土器の細部の変化の様相から層序の安定、不安定を導き出されているとも受け取れる。
- (4) 天城遺跡 熊本県菊池市大字赤星宇天城に所在する遺跡。県営圃場整備事業による畑地の整理により露出、昭和49年県文化課が調査を実施した。報告は「出土縄文土器の報告」とし

てまとめられ、天城遺跡調査全体の報告とはなっていない。このなかで扱われた土層の項で「第3層の上へ～中位部分が遺物包含層であるが、包含層内の文化層を分離することはできなかった」と、この報告者は述べている。

- (5) 伊坂上原遺跡 熊本県菊池郡旭志村大字伊坂上原（一部は小原字西原）に所在する遺跡で、昭和57年夏から昭和58年正月にかけ、護川地区県営畑地帯総合改良事業実施に伴い県文化課が発掘調査をした。この報告書では第Ⅰ・Ⅱ調査区出土の縄文土器が、遺構に伴わない土器、遺構内検出土器など多量に報告されている。ここで遺物包含層の層序にかかわりのある事柄として、分類にあたり「包含層が薄いため、層位的識別はできなかったので器種の形状等で分類した」として処理されている。また報告書の中の表現を借りれば、縄文土器の包含層を「貝のない貝塚」として理解し、「包含層の厚さは20数センチメートルであり、層位を別けることが出来るような土色の差異はなかった」とも述べている。

以上の五つの事例は、何れも比較的新しい熊本県内の縄文後期、縄文晩期の遺物が出土する遺跡の報告である。遺物の包含状態の表現として用いられる言葉として、「混在」（鳥井原）、「層位的に区分が出来ない」（上南部）、「層序的不安定」（古閑）、或いは「文化層を分離することができない」（天城）、さらに「層位的識別はできなかった」（伊坂上原）の表現をとり、各遺跡における遺物が本来的な状態でないことを言いあらわしているように思える。

では混在でない遺跡、層位的に区分出来る遺跡とは、以下層序的安定、層位的識別・分離化が可能な遺跡（包含層）とは一体どういった状態を示すのであろうか。それが仮に、調査者の型式観念（研究史）に一致した状態の表現であるとするならば、発掘調査は単に従来の型式観念を追認するだけのことになりはしないだろうか。

ここにひとこと付言すれば、各遺跡における遺物が混在などの表現をとりながら、資料の型式学的一観念的（或いは、積み木細工的とでもいうか）処理することにより、いつのまにか「鳥井原式」・「天城式」・「古閑式」という型式名にまで高められているのはどういうことであろうか。報告者も恐らく、それらの調査資料は単に「混在」したものとのみ考えていないのは確かであろう。

八窪遺跡調査資料の整理にあたり「遺跡空間をどう処理するか」ということを念頭においた。遺跡理解のたぐいとして、付図1・2には出土遺物の平面分布とともに幅1米の透視断面図を傾斜面に沿って作成した。図によると2層下面から3層中位にかけて、20～35種の範囲に遺物の拡がりがある。遺物が調査時の状態に定着安定するには、人の動き、雨露・霜柱等の自然現象に影響されることはいうまでもない。雨天での人の行動を例にとらずとも、そこに10種程度の生活面の上下、遺物の浮き沈みのあることは当然であろう。それでは、不断の生活の場をどのレベルに求めたらよいのだろうか。

付図2の透視断面図をもとにして考えれば、石皿等のある大きさをもった隙がある高さ（2

層下10～20層)に横に面的に拡がっていることが知れる。また土器片もほぼそのラインにそって拡がる傾向が認められる。そのように遺跡の包含層を捉えた場合、遺跡形成時の生活面を濼の面と見立てることが可能ではなかろうか。土器片の集積・分散、それが前記の⑤の報告者が指摘するように、「貝のない貝塚」土器塚の可能性もあろう。遺跡解釈には未解決の問題があまりにも多い。

出土した土器の器種ごとの分布・集散状態を図化すれば八窪遺跡理解の手だてがえられる可能性もあろう。しかし、今となつては整理の時間的ゆとりを見出すことは困難である。ここで次節に、遺物整理・復元の際接合した主な土器片、石皿の分散状態を図示し遺跡理解の手助としたい。

注1 『鳥井原遺跡発掘調査報告書』熊本市健康町鳥井原遺跡調査団昭和52年3月

注2 『上南部遺跡発掘調査報告書』熊本市教育委員会発行昭和56年3月

注3 『古保山・古岡・天城』熊本県教育委員会昭和55年3月

注4 注3と同じ

注5 『伊坂上原遺跡石佛遺跡』熊本県教育委員会昭和61年3月

## 第2節 八窪遺跡における遺物の分布(第48～52図)

遺物を整理・復元することにより土器や石器の接合の状態が明らかになった。それをもとに、現地調査で得た遺物の分布図とつきあわせることにより同一個体の分散状況が判明した。土器や石器の出土地点は「表」の中に記したとおりであるが、その主なものについて図示したのは第48～52図である。以下この図をもとに説明したい。

図により同一破片の散乱の状況は一見して明らかであるが、離間距離が10米を超える土器を抽出すれば(土器番号離間距離の順)

遺物番号	距離	遺物番号	距離	遺物番号	距離	遺物番号	距離
42	19.5m	150	11.7m	198	13.1m	273	15.3m
56	10.2	156	14.4	236	10.1	274	18.0
81	11.5	157	11.9	237	15.8	284	19.5
85	21.2	164	10.1	251	14.9	292	14.5
118	16.8	174	10.9	263	19.5	301	20.1
127	37.4	182	22.4	267	13.1		

図示したとおり、同一個体の破片が広域に散乱していることが一目してわかる。分布の距離が10米を超えるものが確認されただけで23点に達した。土器はもともと完形であるということ

を基本に置いて、後世の攪乱・調査中誤って排除したこと等を考慮にいれるとしたら、分散の範囲はさらに拡がることは確実である。土器よりも比重の重い石器は、その意味からより層中に安定しているようにみられる。しかし、ここで第52図にあげた石皿は破片となり20米余にわたり散乱していた。

このような現象をどのように解釈したらよいのだろうか。これまでの報告事例には、しばしば「混在」、「層位的に区分が出来ない」、或いは「層位的に識別できなかった」等の表現をつかって異型式の土器の出土を説明している。調査の手違いによる遺物の混入は論外として、解釈の前提には、本来同一型式の遺物（土器）は当然同層序に存在する筈だという予断が含まれているように思える。

幾多の調査事例が示すように、複数型式の土器が同一層序から検出されることを、単に「混在」といった表現で処理することに危惧の念を抱く者であるが、型式を優先させ、それのみに頼って遺跡を解釈するのは、遺跡の発掘調査の意味を減殺し、調査の成果を徒に研究史の中に埋没することになりはしないだろうか。

問題解決のために越えなければならない多くのハードルがあるのも事実である。視点を変えて、遺物の単純型式による人の生活というのは観念の世界、純粹形式としての学問の分野においてのみ存在するのではなからうか。どんな未開社会でも、動きのない人の生活など考えられないからである。同一層序のなかに数形式の土器が出土するということを、今の段階では、時間の長さとして捉えることも可能であろう。それと同時に、或る時点における土器文化のバリエーションとして捉えることも出来よう。

前者の考えの上に立つ場合、土器形式の遷移過程に、文化の継承が否定され断絶を想定しなくてはならなくなり、また後者の考えに立つとすれば、様式の多様さは土器文化の豊かさを意味し、様式変化の動的な面を説明するのに好都合である。

今の考古学界の現状では、土器形式を時間の尺度としているのは周知の事実である。時代とともに土器様式に変化がみられ、土器の形態・文様・製作技法に時代精神とでもいうべきものが受け継がれ、それぞれの特色があらわれていることも事実である。そこで、或る時間帯の断面（時間幅は有るにしても遺跡の中に表現されることもあろう）にあらわれた土器様式に幅があるのは至極当然であろう。私は土器の形式分類に異を唱えるものではないが、土器の様式変化に応じた土器形式の年代配列をすることにより、例えば、全体像の中から縄文土器を5期に、或いは6期とするのもよからう。それは主体的条件に基づく研究者判断の領域であるからである。

ついでながら付言すれば、八雲遺跡類似の遺跡年代表示に「後晩期」の言葉がつかわれる。それが後・晩期の意味なのか、それとも後期に次いで後晩期、そして晩期といった一つの時期区分の意なのかははっきりしない。この言葉が示すように、この種の遺跡には従来縄文後期とさ

れる土器と晩期とされる土器が一括出土するのが普通である。

話をもとに戻そう。同一遺物が広域に分散しているのが事実として確かめられ、遺物が包含層として土層中に安定するまでには遺物にいろんな動きがあるのもわかった。これらの事象を説明するには関連科学の協力をまわって、遺物包含層、即ち、ここでは火山灰の土層の形成のメカニズム、さらに進んで遺跡の継起・継続についてもっと突っ込んだ論議を重ね解明する必要がある。

### 第3節 調査のまとめ

八窪遺跡の調査により縄文時代の遺構を検出、多数の縄文土器・石器が出土した。しかし、弥生土器は僅か数点の発見にとどまった。古墳時代、古代、中世の遺構遺物はとくに目新しい発見はなかった。近世遺構として天保11年(1840)の「猿田彦太神」、近代～近世とみられる道路遺構(踏み分け道)1条を検出した。ここでは、主な出土遺物である縄文土器の年代観について触れることにする。

九州熊本県での縄文後期及び縄文晩期の土器編年として、従来、西平・三万田・御領・さらに黒川・夜臼などの形式名によって分類されている。八窪遺跡出土遺物には深鉢Ⅰとした磨消縄文が西側の調査区から出土しており、はっきり磨消縄文を施文した土器は東側の各調査区(F-5区出土の17には施文なし)から発見されていない。施文帯の文様構成の違いから西平式と三万田式とを区別しているが、そういった考えにたてば、6にあげたX形の沈線文様の状態から三万田式ということになろう。

三万田式土器の標式遺跡である泗水町三万田東原の三万田遺跡について、筆者は地元の坂本経堯氏(元肥後考古学会長)らと昭和43年夏、発掘調査をした経験がある。現場でしばしば坂本氏から「三万田東原には西平式、西原式、三万田式、それに御領式土器がある」との指摘をうけた。委細について尋ねることをしなかったが、西原式はともかく、磨消縄文を施文した土器を西平式、羽状文のつづきを三万田式、黒色磨研の器面調整の土器を御領式とされていたようだ。またその頃には三万田K式・三万田B式の形式名が使用されていた。Kとは後期、Bとは晩期の意味とみられ、詳細は定かでないが黒色磨研の土器を三万田Bと呼んでいたものとみられる。土器の形式名にK(後期)とかB(晩期)を用いることが土器型式名として適切でないのは当然として、いつの頃かこの呼称も使用されなくなったのも時の流れであろう。

そういうことで、いろいろ経緯はあるにしろ羽状文施文による土器や凹線文、凹点のある土器を三万田式として理解されていたように思う。八窪遺跡ではⅡbとした浅鉢、さらに252の注口土器には凹線文や凹点がみられ、Ⅱaとした深鉢のなかにも同種の施文がみられる。羽状文のある土器は4点出土しており、Ⅱb-1とし浅鉢(169～171)及び242がそれである。

ついで御領式土器についてふれることにする。

御領式土器については、その標式遺跡である御領貝塚の調査報告<sup>註2</sup>がある。その報告の中では出土資料をもとにして浅鉢形土器をA～Dに、また深鉢形土器をE～Hとに分類している。その他の土器として、遊離した土器として発見された押型文土器を除き、層位的に先行することが確認された西平式土器、及び三万田式土器などがあり、「A、X地点で一七個の三万田式土器を検出」の記載があるが詳細は定かでない。そこでこのことを念頭において八窪遺跡出土の土器を考えた場合、深鉢では本報告のII aが御領式のEに相当し（以下同）、II bがFになる。また同じく浅鉢ではIがCまたはDに、IIとしたのがBに当たるものとみられる。御領式土器のなかでAとして分類された皿または碗形の土器は幾分様相を異にしているが、232、237、238（何れも第33図）がこれに近い。

黒川洞穴（鹿児島県）出土の資料をもとに縄文晩期の黒川式の土器型式が設定されている。八窪遺跡から同類の土器が出土しており、浅鉢のIII a・III bとしたのがそれである。八窪遺跡では以上にあげた土器の他、図示した粗製土器などがある。

そこで、これらの同一層序から出土した遺物の解釈、理解ということになる。同一個体の拡がりから、或る時間帯のなかでの移動があることは明らかであるが、その空間領域をどこで区切り、どの範囲をまとまりのあるものとして捉えるかについては俄に決めがたい。これはあくまで人為的ではあるが、八窪遺跡の南北の農道をはさんで西のB・Cの各区と東のF～Hの各区とを比較した場合、出土資料のなかで比較的古くみられている磨消縄文が、東の各区から出土しなかったのは注目する。このように西と東を比較した場合、浅鉢Iとしたのが東にあって西に無い、また同じくIIとした浅鉢についても同様である。しかし、IIIとした土器（黒川式）は東西の各区から出土している。興味ある現象といえる。

ここで前に事例としてあげた各遺跡の出土遺物を一瞥することにする。熊本市鳥井原遺跡の報告<sup>註3</sup>では鉢形土器を2類に、深鉢形を3類に、そして浅鉢形を2類、さらに皿形の都合8類に類別している。同市の上南部遺跡の報告<sup>註4</sup>では浅鉢形4、深鉢形3のほかには鉢形・注口土器・碗形・捏鉢形に分けられている。

ついで古閑遺跡では、調査者と整理者が別々に分担したという事情から多少の問題はあるが、報告の中から「晩期の土器」をみることにする。ここでは粗製深鉢土器と精製浅鉢土器に大別し、前者をA～Fに分け、この中をさらに細分しBをBa～Beの5別している。またDをDa、Dbに、EをEa、Ebに二別している。天城遺跡<sup>註6</sup>では深鉢・浅鉢・鉢・注口土器その他に分け、深鉢をA～Dとに分け、AをA-1・A-2にBをB-1～B-4にし、CをC-1～C-5とに細別している。また浅鉢をA～Dと分け、さらにAをA-1～A-4とし、この中のA-3をさらにa～eに細分している。浅鉢BはB-1・B-2とに2別している。注口土器・その他ではa～dとし、ついで脚台について述べている。

八窪遺跡に距離的に近い伊坂上原遺跡<sup>注7</sup>では浅鉢形土器をⅠ～Ⅲとに大別し、ⅠをⅠ-A～Ⅰ-D類に、ⅡをⅡ-A～Ⅱ-C類、ⅢをⅢ-A～Ⅲ-E類とにそれぞれ細分している。また深鉢形土器はⅠ～Ⅲとに大別し、ⅠをⅠ-A～Ⅰ-E類に、ⅢをⅢ-A～Ⅲ-C類とに細分している。注口土器はⅠ-A～Ⅰ-C類に、高杯形土器をⅠ-A～Ⅰ-D類に、碗形土器をⅠ類、鉢底部についてもⅠ～Ⅳとにそれぞれ分類している。

八窪遺跡出土の縄文土器とほぼ同類の遺物を出土した各遺跡の例として、その分類項目だけあげた。ここでその子細にわたって述べる余裕がなく、またそれが、八窪遺跡調査報告の本旨ではない。同一層中に「混在した」とか、遺物「包含層内の文化層を分離することができない、土器群の「層位的識別ができない」といった現象についても、それらの各遺跡の出土遺物等を比較検討することにより新たな視座が開けるかもしれない。

最後に八窪遺跡にたち帰り、多少の問題点を述べて締め括りしたい。八窪遺跡では焼土、竪穴、土器・石器、或いは食料とみられるドングリが多量に出土していることから縄文後期～晩期にいたる生活の場であることに違いない。生活の拠点としてどれくらいの期間使用されたかについては必ずしも明瞭でない。型式を優先させ、縄文人の非定着性を考慮して、三万田式の時期にまず生活の場ができ、一旦断絶の後、御領式の時期の同じ場が再び生活の場となり、断絶・再開を繰り返し晩期に至ると考えるのは、あまりにも場当たりの解釈である。現状打開のためには個々の各遺跡での状況を的確に把握し、それらを解釈検討することにより様式変化の方向を模索するしかなかろう。

注1 報告事例として『三万田東原』一調査概報一がある。1972 泗水町教育委員会

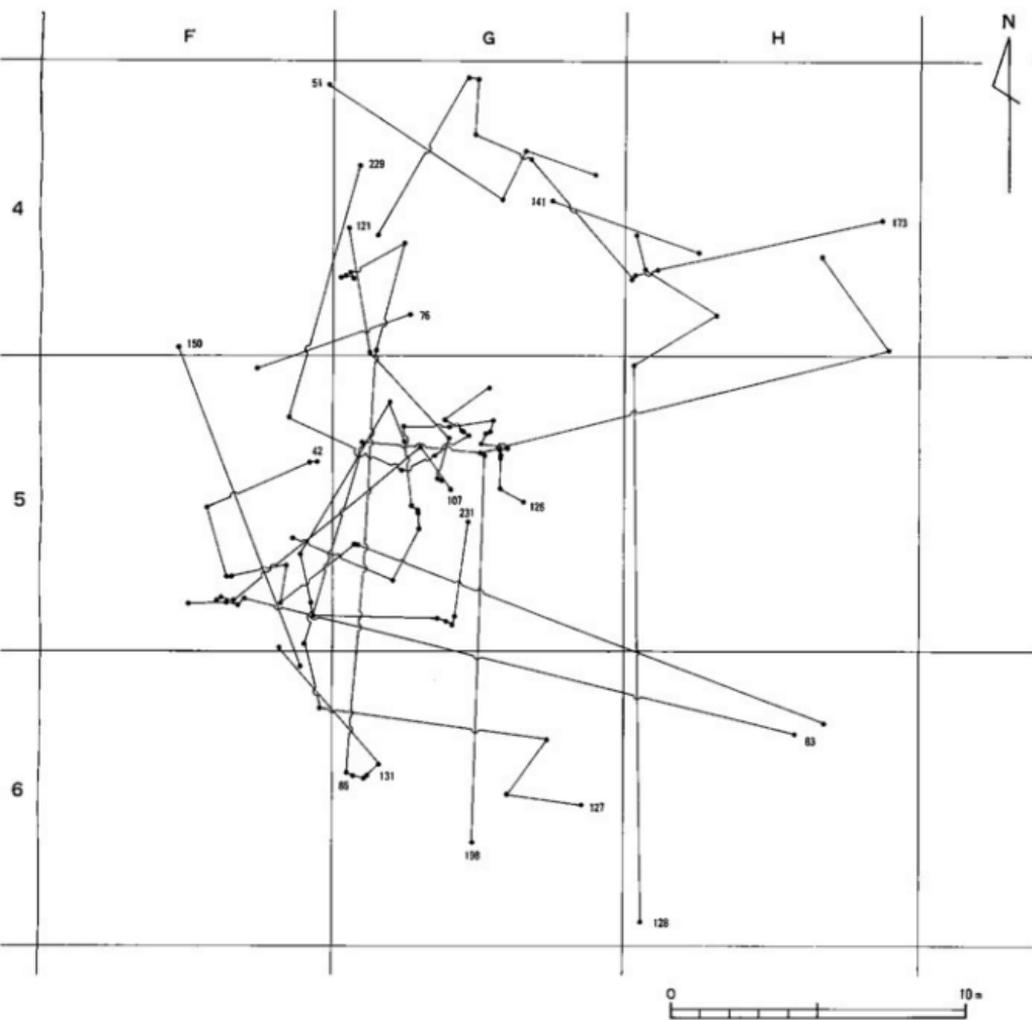
注2 「御領貝塚の発掘調査」として『城南町史』のなかに収録。1965 城南町

注3 「烏井原遺跡発掘調査報告書」昭和52年

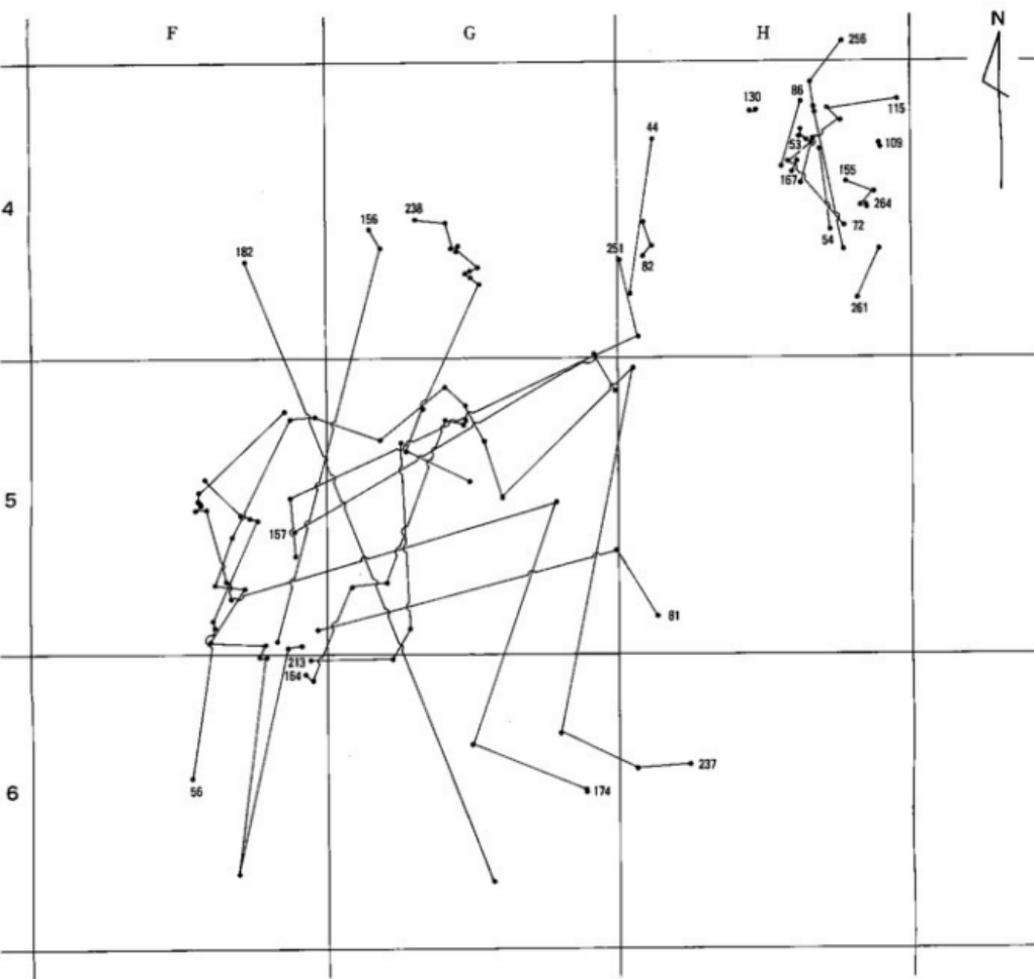
注4 「上南部遺跡発掘調査報告書」1981 熊本市教育委員会

注5、注6 「古保山・古閑・天城」1980 熊本県教育委員会

注7 「伊坂上原遺跡・石佛遺跡」1986 熊本県教育委員会

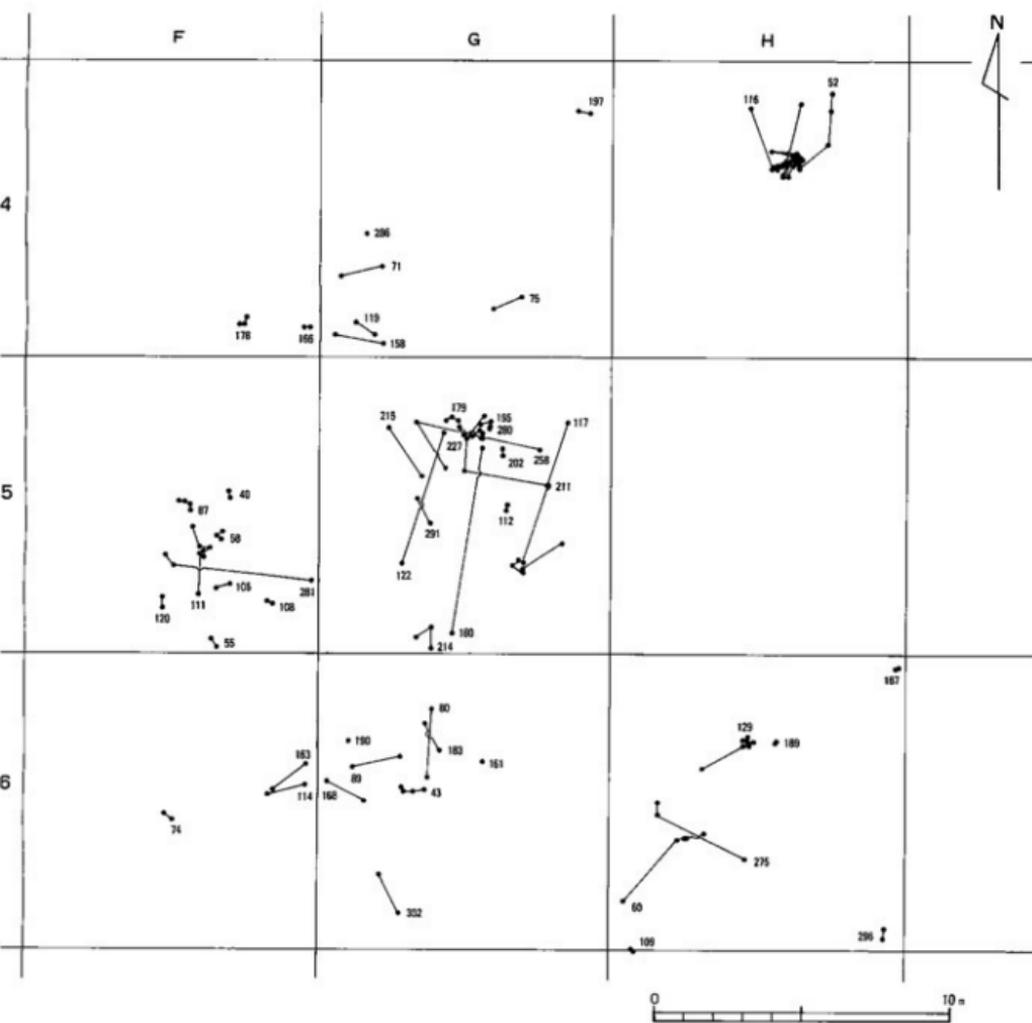


第48図 接合破片の分布 (土器) 1

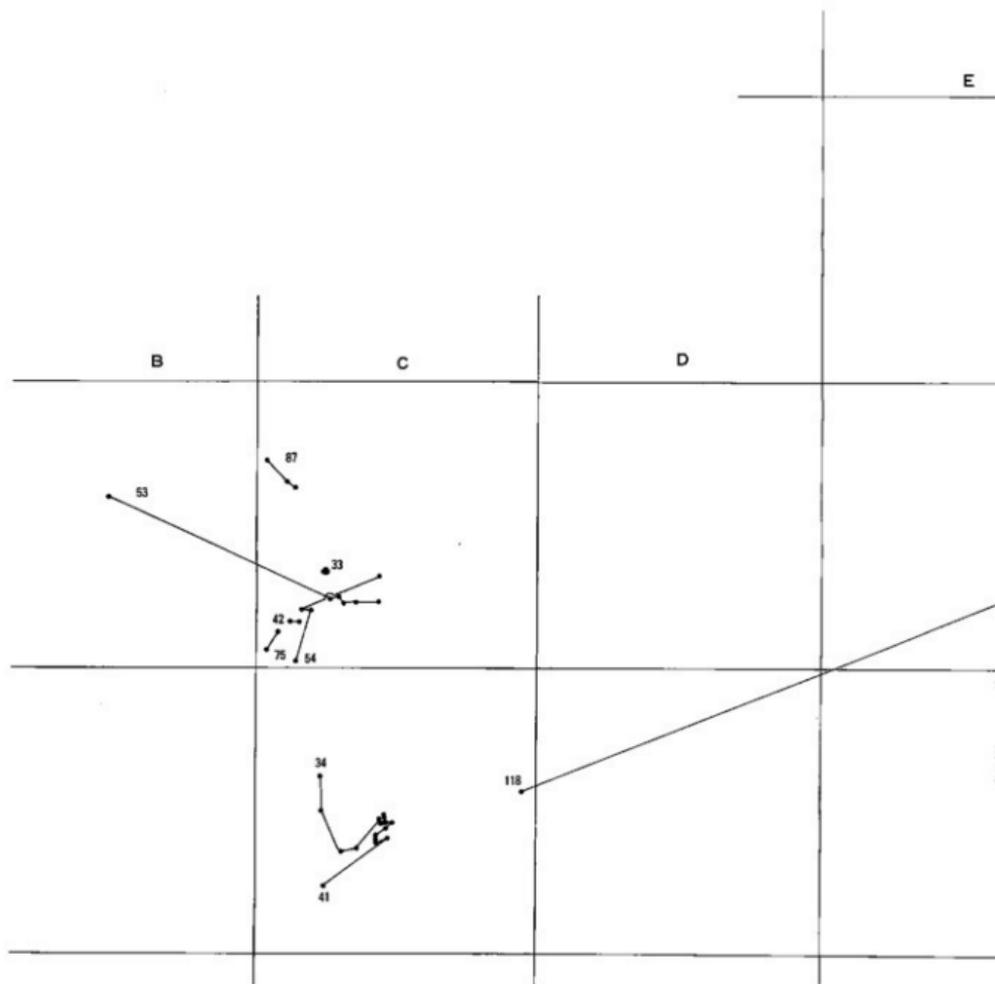


第49図 接合破片の分布 (土器) 2

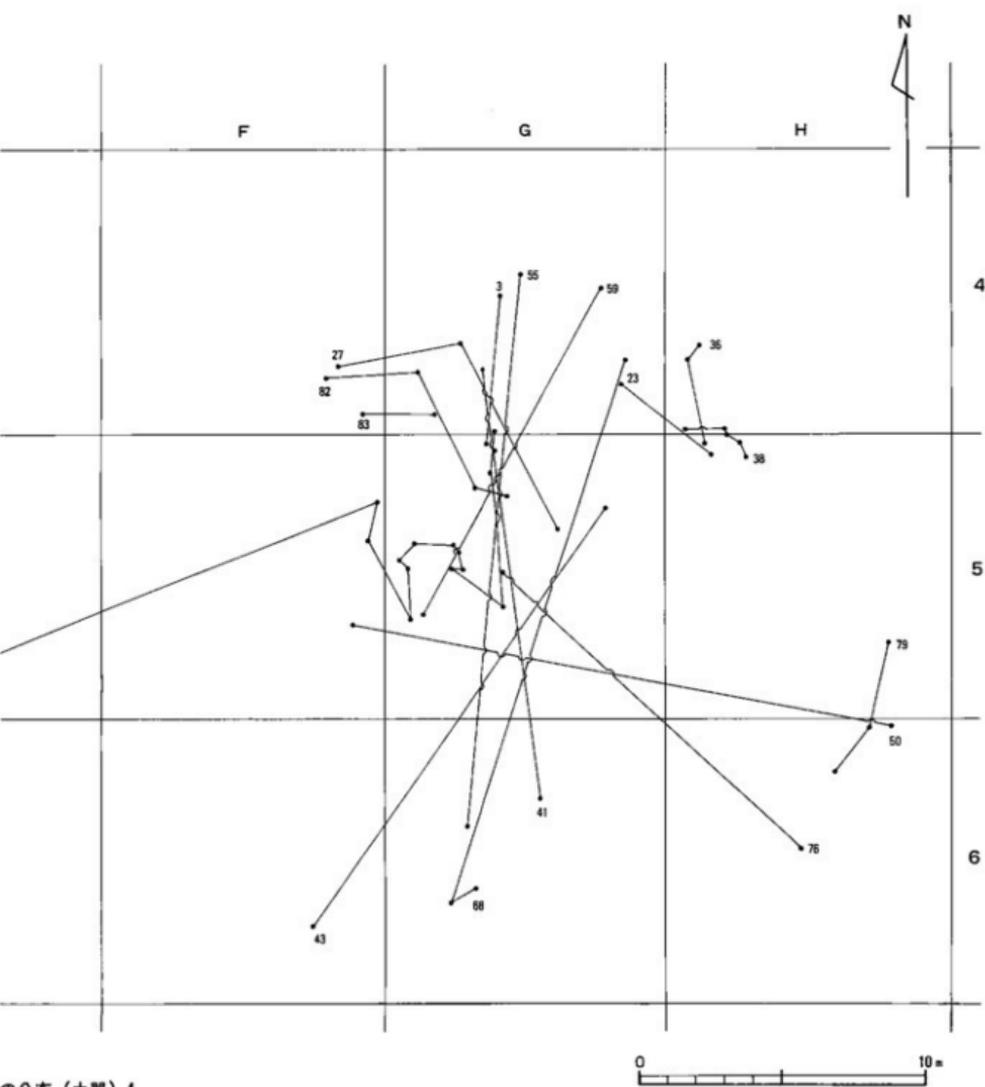




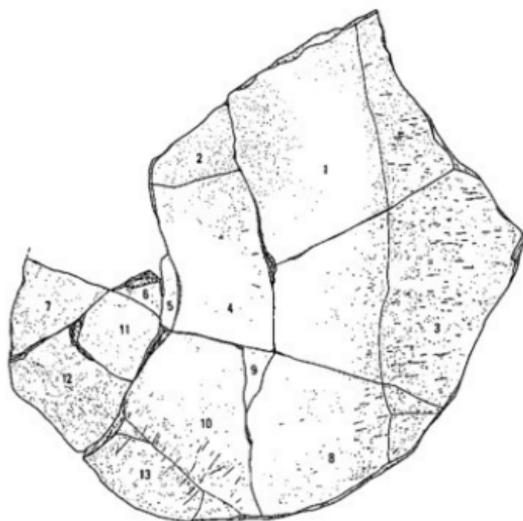
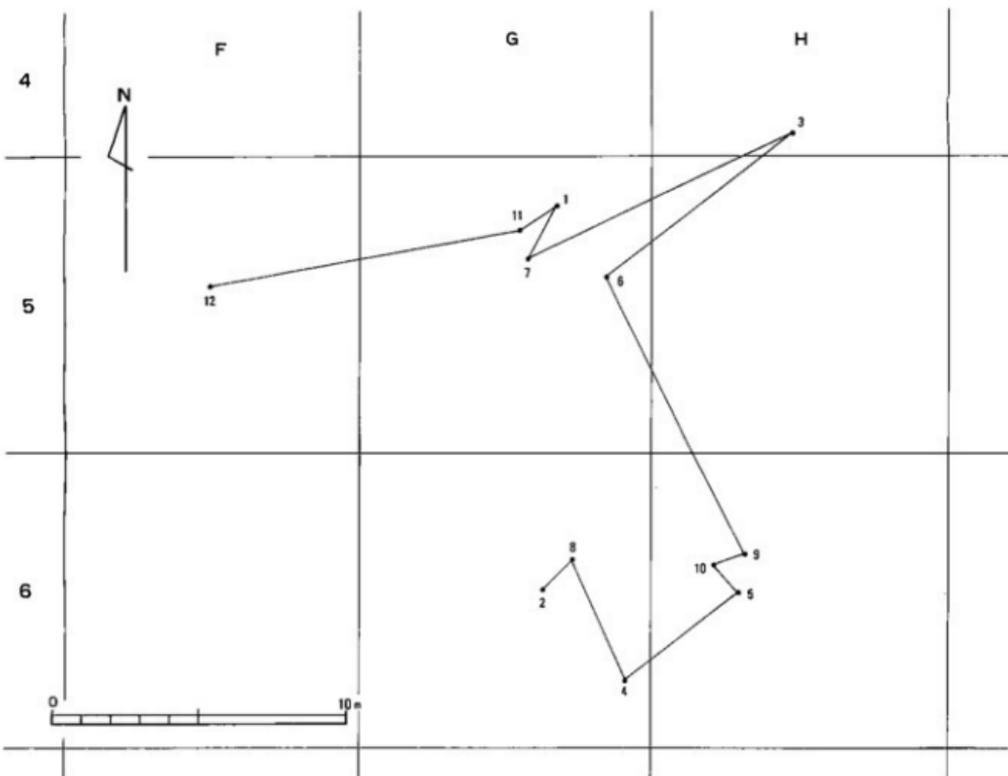
第50図 接合破片の分布 (土器) 3



第51图 接合破片



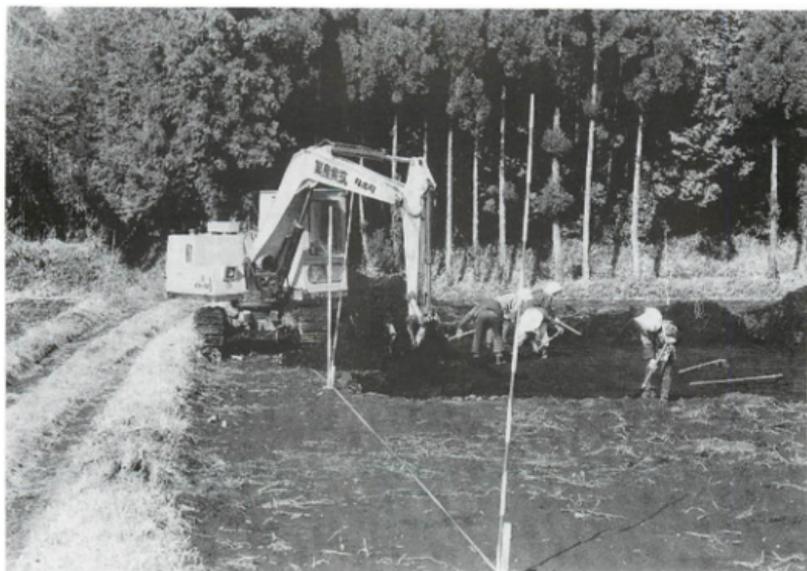
の分布 (土器) 4



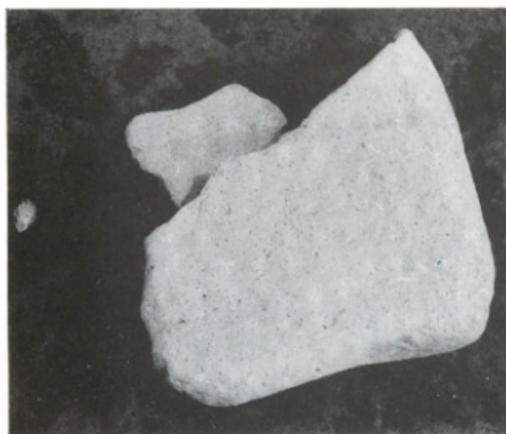
第52図 接合破片の分布 (石皿) 5

圖

版



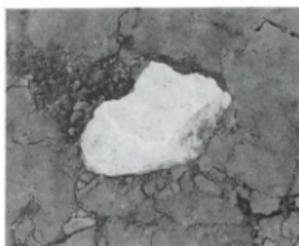
表土はき



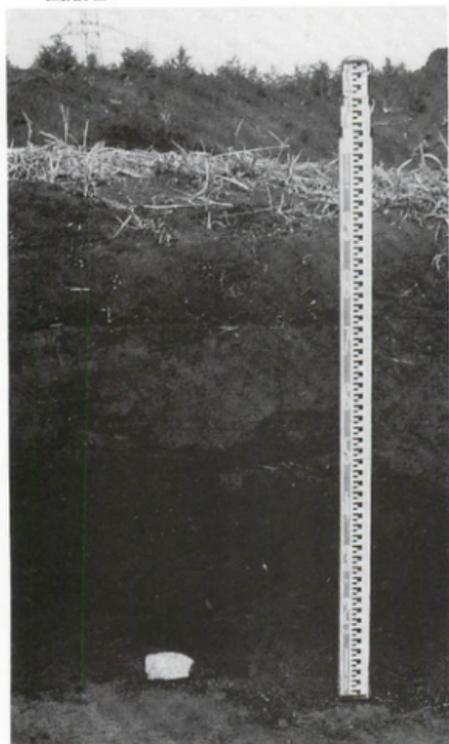
B-5区 石皿



F-7区



G-7区



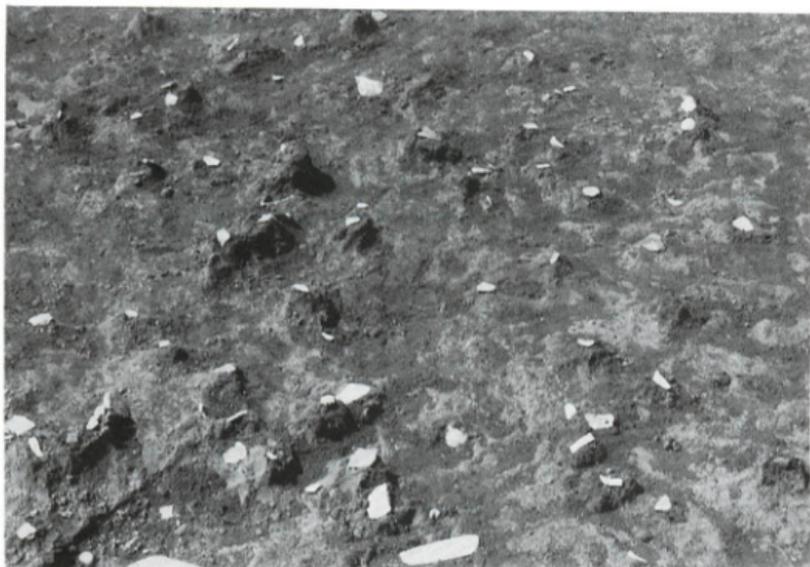
B-5区西断面



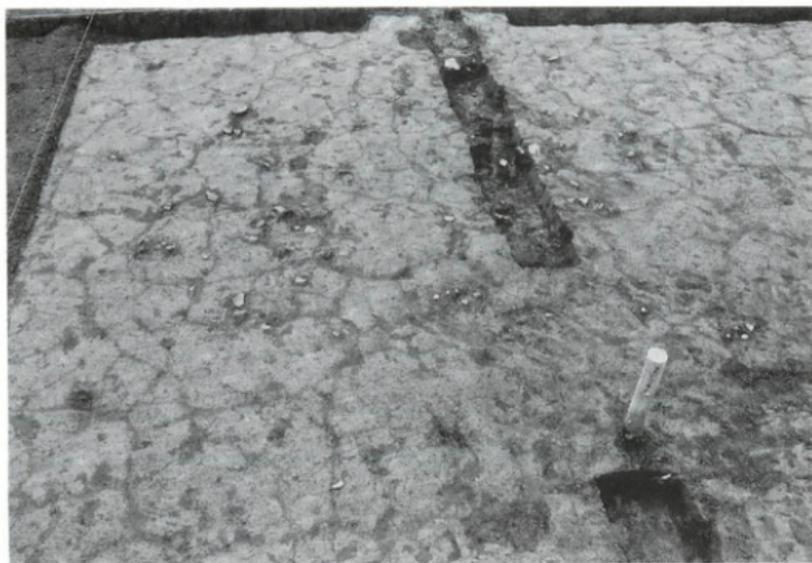
試掘坑西断面



F-6・G-6区 3層断面 (F-7区から)



G-5区



G-5区 填土周辺

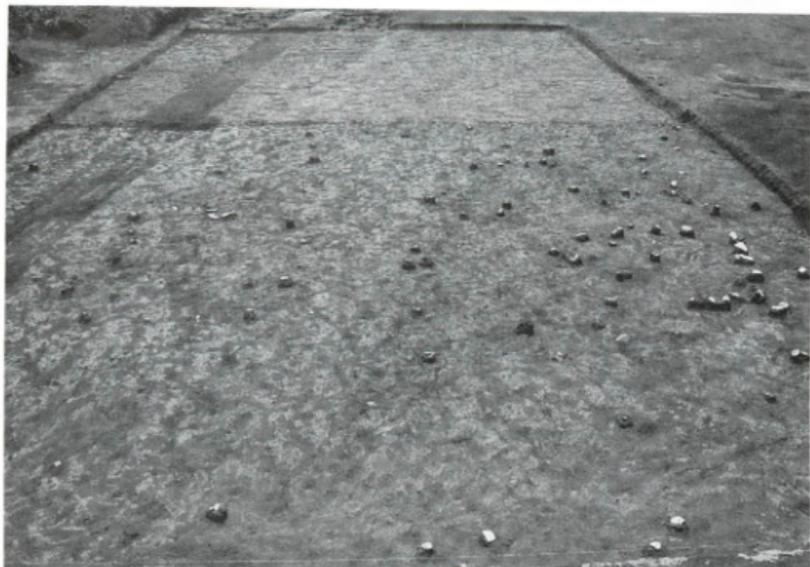
图版 4



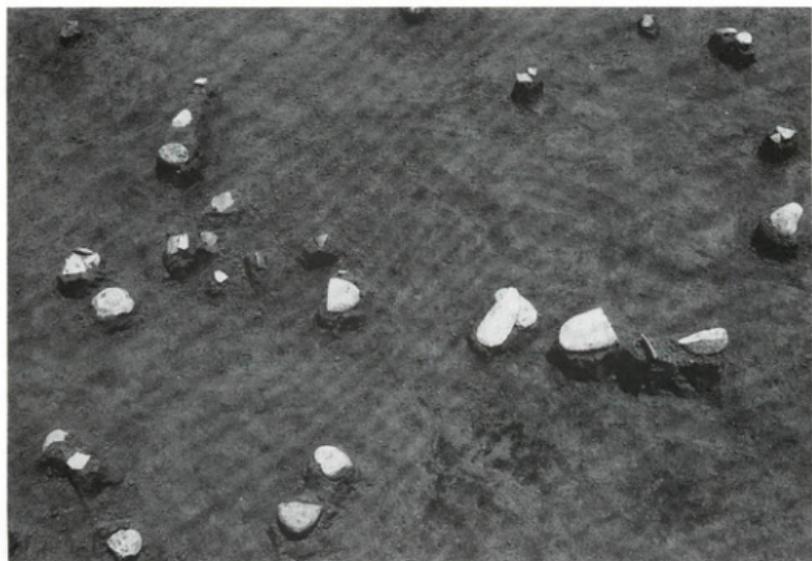
G-6区



F-5区



C-5区 (北から)



C-5区

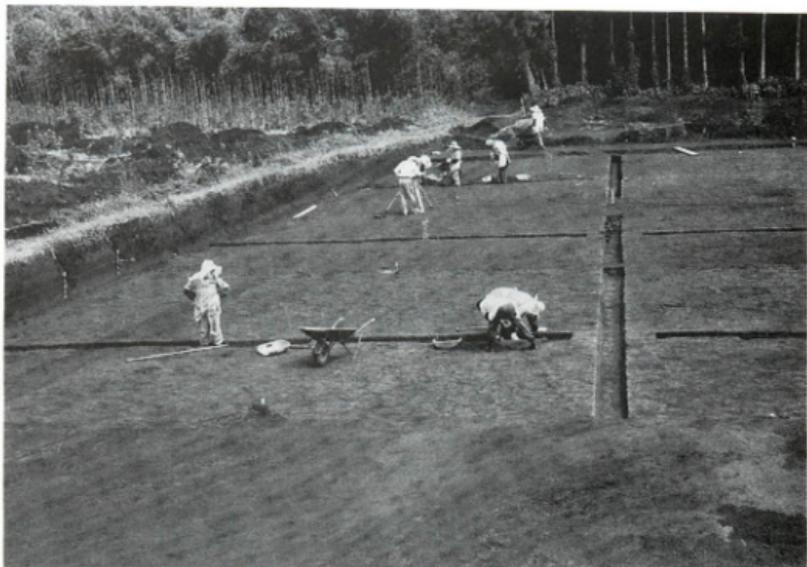
図版6



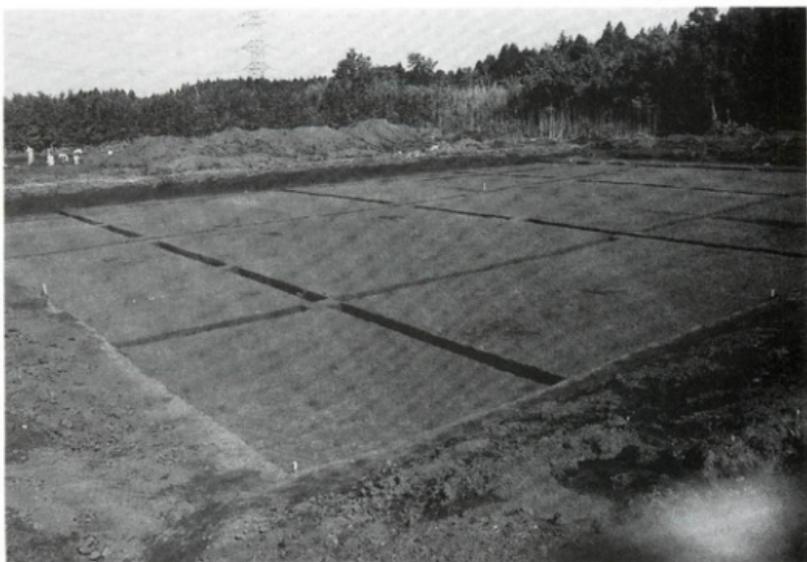
H-6区 竪穴 (発掘作業)



H-6区竪穴



遺構確認作業 (F-5・6区付近)



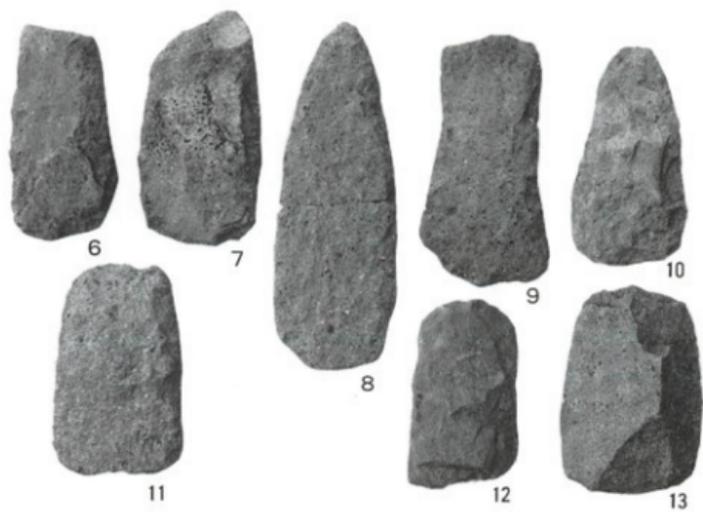
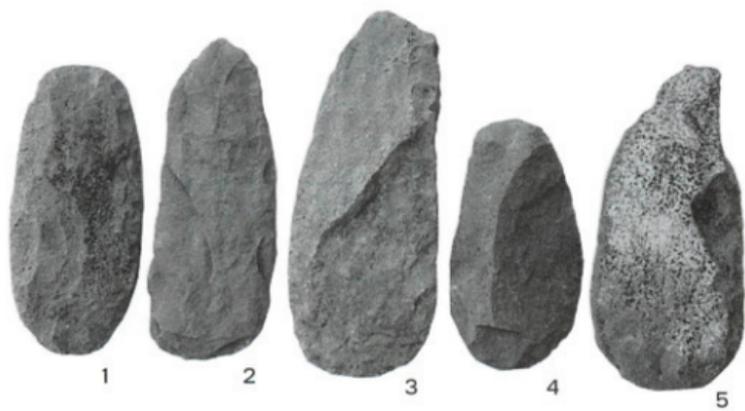
調査終了時の確認作業 (東南から)

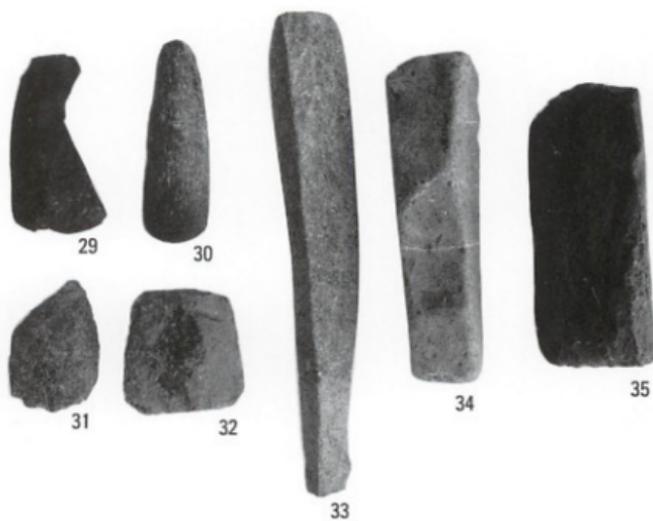
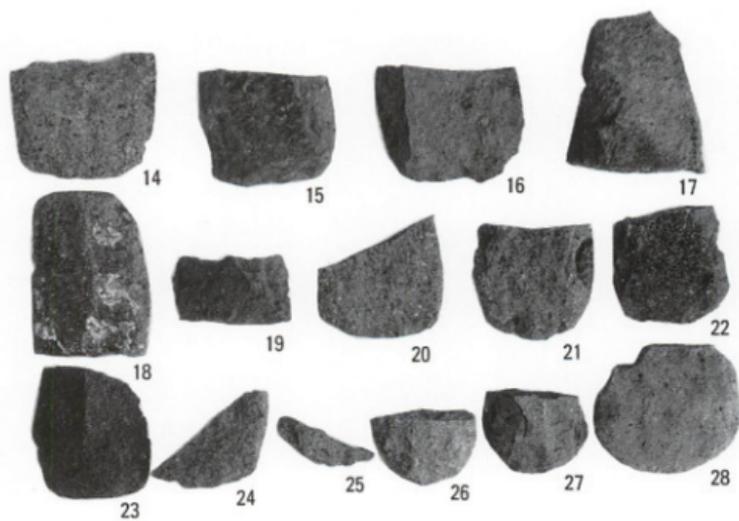


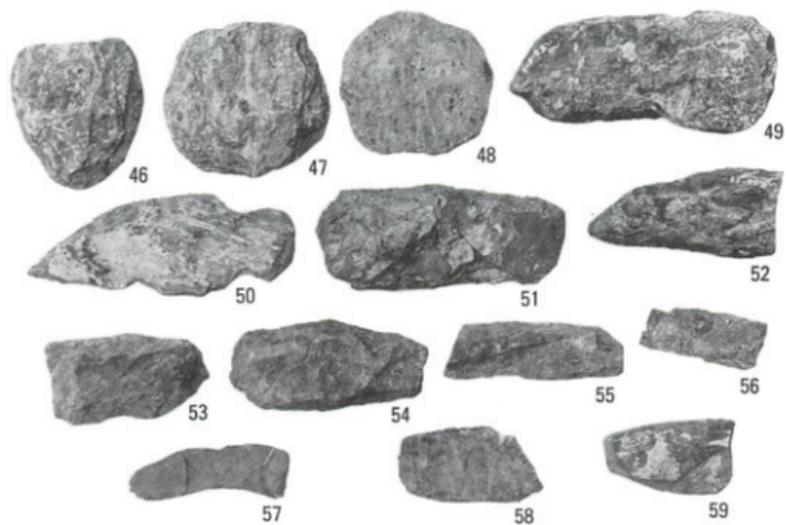
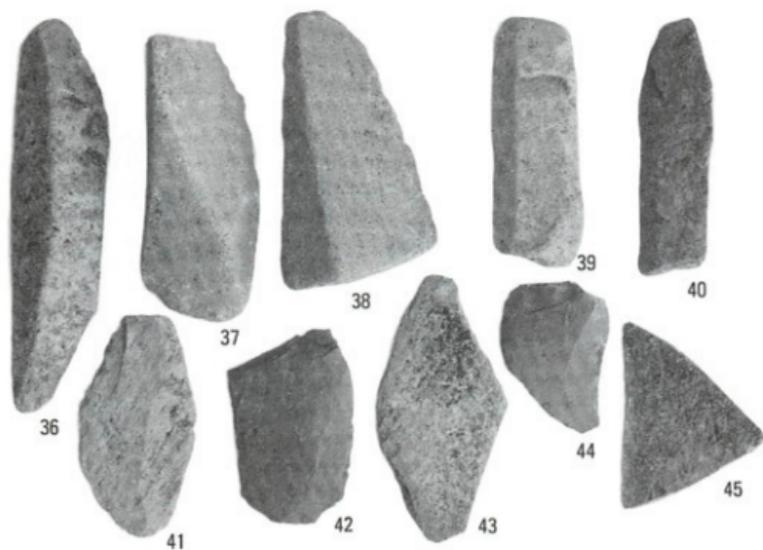
猿田彦太神周辺

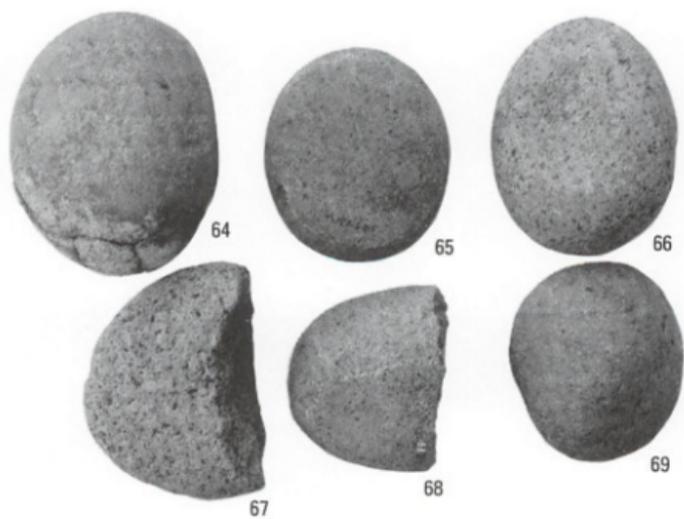
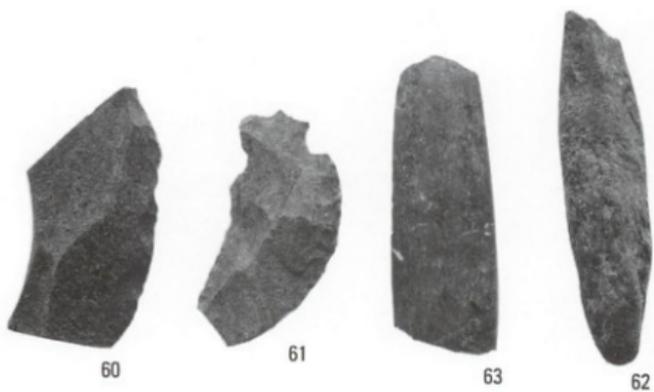


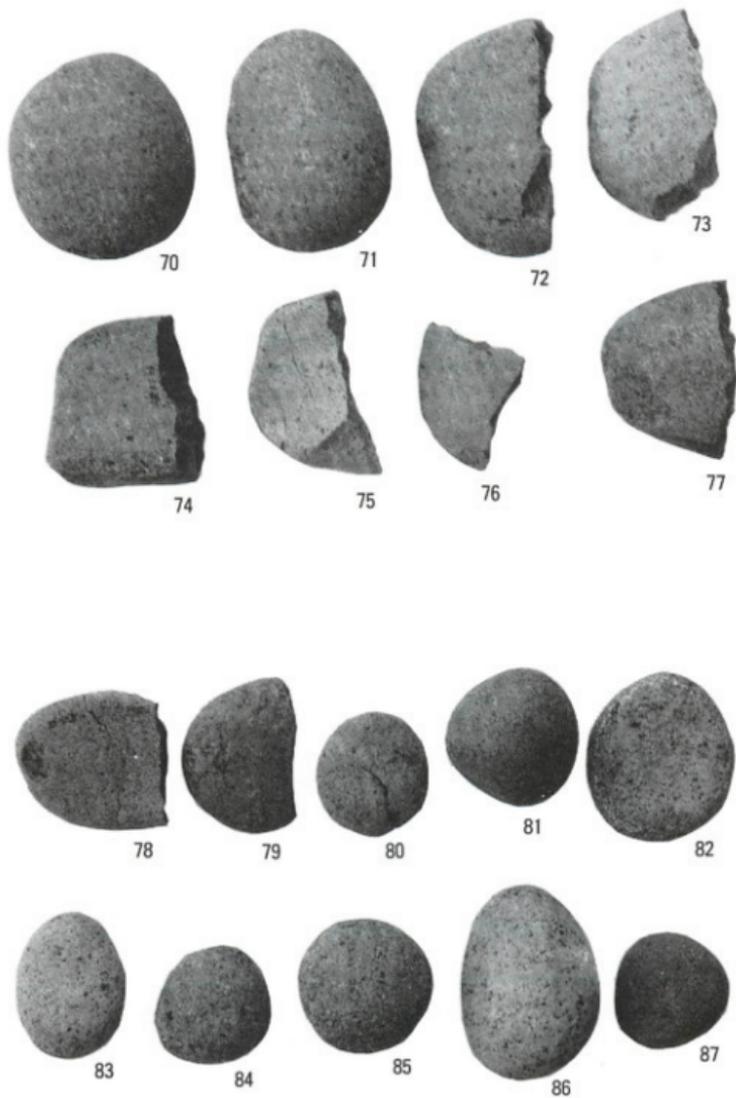
猿田彦太神（南から）

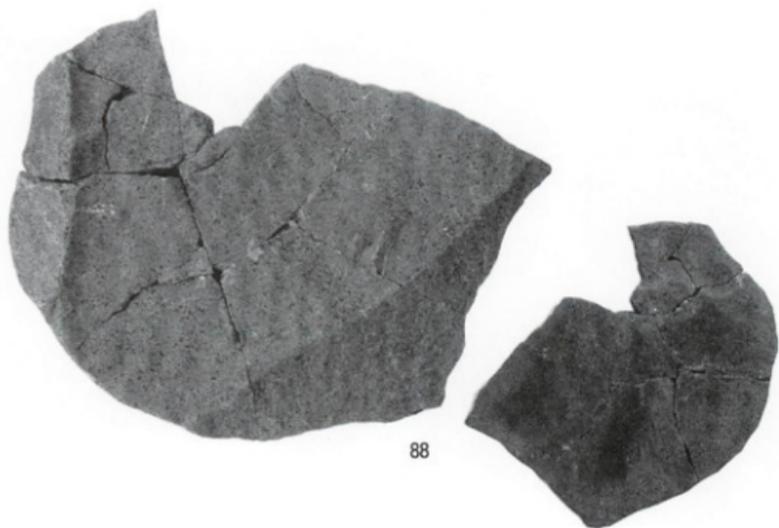












88



89



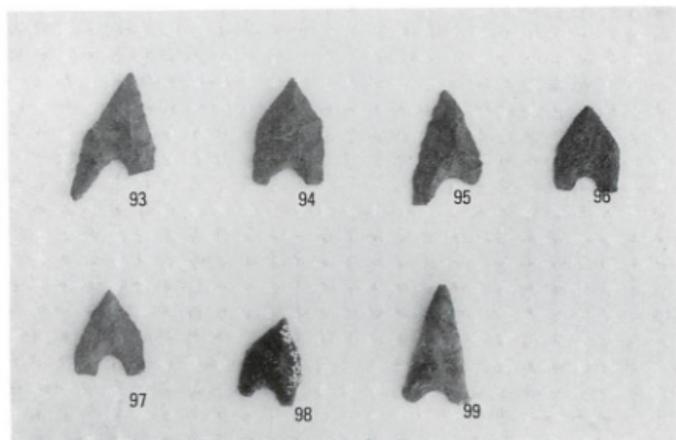
90



91



92



## 八 窪 遺 跡

熊本県文化財調査報告第94集

昭和62年12月25日

編 集 熊本県教育委員会  
発 行 〒862 熊本市水前寺6丁目18番1号  
印 刷 滝下田印刷  
〒869-05  
熊本県下益城郡松橋町久具1961

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第94集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：八窪遺跡

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺6丁目18番1号

電話：096-383-1111

URL：<http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：2016年3月31日

なお、熊本県文化財保護協会が底本を頒布している場合があります。詳しくは熊本県文化財保護協会にお問い合わせください。

熊本県文化財保護協会

URL：<http://www.kumamoto-bunho.jp/>